ネギまとぼくとガンツな俺と

をもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギまとぼくとガンツな俺と

【Ｎコード】
Ｎ１８４７Ｖ

【作者名】
をもち

【あらすじ】
ガンツのミッションで生き延びてきたまだ１０歳の少年、正志明（タダシアキラ）。ラストミッションにて大和猛という人物を失うもののどうにか生還。いつもどおりの部屋に転送された……かと思えば目の前に広がるのは青と白のコントラストが広がる不思議な世界。そこで出会った自称『神』なる人物によってアキラは魔法が存在する世界に行くことを決意。
アキラはそこで誰に出会い、誰と物語を紡ぐのか。

＊これは『ネギまとガンツと俺』の続編です。
＊魔法の世界とは『ネギま』の世界です。
＊原作でいうと学園祭編終了時点あたりから始まります。
＊解釈・設定に独自要素があります
＊オリジナルな魔法や技が僅かにありますので苦手な方はご遠慮ください

開幕

もしも平行世界があったとして。
そこに自分とほとんど同じ境遇に立つ人間がいたとして。
俺がそこからやってきたとして。

なぜ、俺はこうなったんだろう。

どちらかといえば裕福で、けど決して一般家庭の域を出ないような、そんな程度のどこにでもある中流の家。
父親は日々忙しそうに会社に勤めて毎日の帰りが遅く、母親も公務員という仕事に精を出して帰ってくるのはいつも夜。毎日が忙しい二人で平日はほとんど構ってもらえなかったが、子供の頃に寂しさを覚えることはなかった。

日曜はいつも三人で過ごしていたから。

父さんは運動音痴で、母さんは料理ベタ。二人の特徴を思い出す中で欠点が真っ先に浮かぶのは少し申し訳ない気持ちにはなるが、それも事実だったのからあの世にいる二人も許してくれることだろう。
公園に出かければ母さんとキャッチボールして、それをニコニコ笑ってくれる父さんがいて、今でも思い出すだけで自分がにやけてしまう程に幸せだった。

他所のどんな家庭よりも幸せがあふれる一家庭に生まれた俺はい

つも笑っていた。
屈託なく、打算もなく、歪むこともなく。
けれど幸せというものはいつも過ぎ去った後に気付くもの。そんな幸せな生活は、いとも簡単に崩れ去る。
入学式の日。俺が小学六年生になった日。

「おい、火事だ！」
「消防車はまだか！」
「大和さん家じゃないの！？」

燃えた。

全てが燃えていた。

周囲の人間の対応は素早かったらしく、被害は自分の家が全焼しただけで済んだ。火事の原因は単なる火の消し忘れ。
俺を祝ってくれようと、平日にも関わらずわざわざ仕事場から休みを貰っていた母さんが下手なくせに料理をしようとしていたことが原因らしい。
勿論母さんは焼死。けどその日、全焼した家から見つかった焼死体は二つ。もう一つは当然というか、やっぱりというか父さんだった。
母さんと同じく、6年生になった俺を祝ってくれるために家に帰っていたらしい。気付けば二人が動かなくなっていたことを覚えている。
温かかったはずの父さんの手は冷たかった。優しかったはずの母さんの手は何も答えてくれなかった。

――まだ、覚えている。

「もう、二人とも……ダメだなぁ」

当時死ぬことを理解していなかった俺は、確か最初は呆れていた。体が黒ずんだ状態にあったにも関わらず眠ってしまっている二人に、子供ながらに汚いなぁと思っていたからだ。

「これを、キミに」

いつまでたっても目を覚まさない二人に首を傾げていた時、優しそうなオジサンが悲しそうに二つの綺麗な包装紙に包まれたプレゼントを渡してくれた。

「これは？」
「お父さんとお母さんがキミにって」
「あけてもいい？」
「もちろん、包み紙が赤いほうがお父さんで、黄色いほうがお母さんだよ」
「うん、ありがとう」

まずは父さんのほう。
どうせいつもどおりに本とか、そういったつまらないものだろうと思っていたら違っていた。あまりの嬉しさに飛び上がりつつも慌てて母さんのほうのプレゼントを開けてみた。
予想ではゲーム。けど、それも違っていた……こっちは悪いほうの意味で。

「どちらもキミのためのものだったらしくてね。こっちで勝手に包装させてもらったんだよ」

もう何もないのだろうかと、二つの包装紙を見直すとそれぞれか

らは一枚の紙切れがひらりと舞い落ちた。
それを見た瞬間に、理解できていなかった全てが急激に頭に入ってきた。

「……？」

ゆっくりとそれぞれを抱えて目を配る――

父さんからのプレゼントはピカピカのグローブ。

――何度も。

「あれ？」

よく見れば気付く。確かに先のほうは焦げているところもあるけど、この形は見覚えがあった。

「僕が使ってたグローブだ」

傷も残ってるし見間違うはずもない。つられて、父さんが残してくれた紙切れに目を。

『一緒にキャッチボールしてやれなくてごめんな。今日は一緒にって思ってたけど、父さん、もうタケルと遊べそうにないんだ』

「え」

ゆっくりとそれぞれを抱えて、また目を配る――

母さんからのプレゼントはタッパーに入った真っ黒焦げのカレー。

――何度も何度も。

「これって」

よく見れば気付く。具の形がいつもより明らかに大雑把だった。

「食べたいって言ってたカレーライス？」

父さんが作ってくれていたカレーよりも色もあまり良くないし、見間違うはずもない。つられて、母さんが残してくれた紙切れに目を。

『カレーで失敗しちゃってごめんね、ちょっと煮込みすぎちゃった。今日は私がって思ってたけど、母さん、もうタケルとご飯食べれそうにないの』

「……え」

ただ、目を配る――

父さんは今日のためにグローブをピカピカに磨いてくれていた。グローブの手入れなんてしたこともなかったろうから、きっと大変だったろう。

「お父さんの服の中に、手紙と一緒にそれが残ってたんだよ？」

親切なオジサンの声が遠い。

きっと父さんは火に囲まれて動けない中、手紙を書いたんだろう。熱くて仕方がない中で、それでもプレゼントだけは守り通してくれ

たんだろう。

――なんでっ！

ただ、目を配る――

母さんは今日のためにへたくそな料理を作ってくれていた。最近はずっとレトルトとかしかしてなかったから、きっと大変だったろう。

「お母さんも、お父さんと同じようにしてたんだろうね」

オジサンの声が流れていた。

きっと母さんは火に囲まれて動けない中で、それでも火に包まれた黒焦げのカレーを残そうとタッパーに包んでくれたんだろう。

――なんでだよっ！？

二人が残してくれた手紙の最後の一文は同じように始まり同じように終わっていた。

「「幸せに、強く生きてください。それから――」」

字が霞んでいて何も見えない。

いや、違う。

霞んでいるのは、字ではない。

あふれて止まらない涙。こぼれて流れる涙。

「『さようなら』だよ」

おじさんの言葉が耳に届く。

――なんで、俺のことしか書いてないんだろう。自分が燃えそうなときに俺のことばっかり心配してるんだろう。

動かない父さんと母さんに駆け寄って何度も「おきてよ！」と叫ぶ。

――なんで。

動かない。

汚いと思っていた手を握って引っ張る。

動くはずもない。

「なんで――」

――もう一緒に生きていけないんだ。

「うぅ……うわあああああぁぁぁ」

無愛想になって暗くなったその時の俺を、同じ小学生が理解してやれるのはせいぜい数ヶ月。半年もあれば誰もが面倒に思い始める。

そう、始まりはこの日。

俺は一人になった。

第1話「To The New World」

そこかしこに人間が転がっていた。だが、誰もそこに駆け寄ろうとはしない。
なぜか？
答えは簡単。
その全てが息絶えているからだ。
頭がない。頭しかない。腕がない。腕しかない。足がない。足しかない。
そんな、人間達の残骸がただ転がっていた。
人肉が飛び散り、脳漿が死体の上にこびりつく。血の池がそこかしこに出来上がり、まだ生きている人間がその上を必死の形相で走り回っていた。

そう、ここは地獄。
可愛いキューピッドが死体を貪り、巨大な天使像が人間を踏み潰す。更なる巨大な像もそこかしこで暴れ回り、ここまで生き延びてきた精鋭の戦士達をいとも簡単に戦闘不能に陥れていく。

「はぁ……はぁ……」

既に片腕を失い、隠れるようにガタガタと震える一人の少年・・・いや正確には児童。おそらくまだ１０歳にも満たないであろうその子供は顔を真っ青にして路地の隅、死体の下に隠れてアタリを窺っていた。
少年のパートナーだった男、大和猛は既に彼を守るためにその命を投げうった。死体は既に残ってすらいない。

――タケルにぃ……タケルにぃ……！

心の中でその男の名を何度も叫ぶ。零れ落ちる涙は何度拭っても枯れず、その度に鼻をすすり、瞼をこする。大事な人を失ったその悲しさと、もはや自身を助けてくれる人はいないという絶望、さらにこの場所の危険性。

その全てが少年の恐怖を増長させていた。

――ぼく、どうしたらいいの？　誰か……助けて！

そんな心の声も、この地獄にあって届くはずがない。

「……」

当然のように返された沈黙に、少年はなすすべなくも息を潜めて、次いで聞こえてきた「クスクス」という笑い声にその顔を強張らせた。

少年の腕を引きちぎった張本人である笑う天使。正しくソレが近くを飛び回っていたのだ。

――……っ！！

身を固くして、目をギュッと閉じきった少年の正に目の前。

ドン

例えでもなく比喩でもない音が響き、先ほどまで笑っていた天使たちは肉片すら残さずに血の池そのものへと変わっていた。

「……」

眼前で出来た血だまりに少年はそれでも体を小さくし、そして――

「ＷＨｅｅｅｅ！」
「Ｈａｈｈｈｈ！」
「Ｙｉｐｅｅｅ！」

何ヶ国もの言語が乱れ咲いた。

――……え？

呆然とした顔をしたのも束の間、すぐさま転送が始まっていることに気がついた。

「……生き残ったんだ」

ホッと胸をなでおろし、だが表情は複雑に。消えていく自身の視界と共にボソリと。

「タケルにぃ」

少年をいつも守った騎士はもういない。いつも側にいてくれた兄にはもう会えない。

――また一人……なんだね。

そんな想いが胸をよぎり、暗転。

意識を手放した。

ジジと何かを焼くような音と共に徐々に視界が明るくなってきた。部屋に帰ってきたっていうことだ。

ちっちゃい部屋にガンツ。カーテンの引かれた窓。薄暗い室内灯。いつも通り見慣れた世界が広がって……とはいかなかった。

「……あれ？」

目の前に広がっていたのは青い青い天井、なんだかフワフワして踏んでて気持ちのいい白い床。それと――

「ふわ～～」

勝手に声がでてしまった。

――視界いっぱいに広がる何もない景色。

本当に何もない。ガンツも、造形物も、人も、動物も、植物も。あるのは嘘のように気持ちいい真っ青な天井と、思わず寝転びたくなるような柔らかい床だけ。

「……ここ、どこだろ」

どこを見ても青と白。ただ、それだけ。

ガンツの転送ミスかもしれない。というかきっと、そう。

以前タケルにぃから聞いた話しだけど、転送ミスとかも実際あったりするらしい。ミッションから帰ってきたと思ったら別の拠点に転送されて住所まで帰ってくるのに2日かかったとか何とかを聞いたことがある。

「……クス」

ちょっと思い出し笑い。

2日もかかったなんて言うけど転送先は隣の県だったらしい。だ

から普通の人なら電車で2時間程度の距離だったらしいんだけど。

――タケルにぃって本当に方向音痴だから……。

「……タケルにぃ」

だ、だめだ。また考えちゃった。死んじゃった人のことは考えるなってタケルにぃに言われてたのに。

「ってまたタケルにぃの言葉……」

はぁ。

「う……ううっ」

ここには何もない。誰もいない。

そう、タケルにぃはもういない。

ミッション中は我慢できてたけど、もう限界だった。

ずっと一緒にいてくれた。ずっと守ってくれてた。そんな人がいなくなって平気でいられるほどぼくは強くない。

「――おい」

「……え？」

「神様を想像してみろ」

いきなり聞こえてきたオジサンの言葉に息を呑んだ。いや、うん言葉も意味もよく分からなかったけど。それ以上に驚いた。

だって、さっき周囲を見たときは誰もいなかったんだから。いつの間にか後ろにオジサンが立ってたらそりゃ驚いてしまう。

「だ……誰ですか？」

一応自分の服に目を配っておく。うん、まだちゃんとガンツスーツは着込んでる。これなら逃げれる。そんなぼくを見てオジサンが大きな口を開けて笑う。

「はっはっは。いや、大丈夫。別にとって喰ったりはせんさ」

「はぁ……」

とりあえず気の抜けた返事をしてしまうのは仕方ない。

ぼくは服装とかに関して女の子みたい詳しくもないし興味もないからわかんないけど、目の前のオジサンは絶対に変。

真っ白なカーテンみたいな服で体を包み込んでて、それだけ。……うん、そう。それだけ。足もふくらはぎから全部見えてるし、腕だって隠れてるのは肩だけ。鎖骨だって見えてるし、冬だったら捕まってもおかしくない。

しかも何かと毛が煩い。やたらと伸びた真っ白な髪の毛も、真っ白なひげも。とにかく全然手入れとかしてなくて凄く不潔な感じだ。

そんな汚いオジサンに、すぐに心を許しちゃうのは単なるバカだと思う。というか、普通は無理。

「これこれ、そんな目をするんじゃない。わしゃ神だぞ？」

「……わ～、すごい」

うん、そうだよね。そうだと思ってた。

だって絶対そういう危ない人でしかないような格好だもんね。

「あ、お主信じておらんな？」

「そんなことないですよ？」

もちろん、嘘。だけどこういう人には適当にハナシを合わせてばっくれるのが一番だって前にテレビでやってた。

「あ、じゃあぼく今から小学校があったらなって思ってるんで。スイマセン、失礼します」

「む、そうか。小学生は大変だのう？」

「はいそうなんです。それじゃ、さようなら」

よし、うまくいっ「って、待たんかい！」

――ですよね。

「なんですか？」

本当に嫌々に顔を向ける。

仕方ない、少しだけ付き合おう。それで無茶なことといってその間に逃げてしまえばいい。

「むぅ、さすが人間は頭が固くていかんの……」

困ったように呟くオジサン。

結構うざい。早くこの自称『神』の人から離れたい。この人がそんなはずないって分かっててもぼくは神様という信仰そのものが嫌いだからついつい苛立ってしまう。

いい加減無理にでも走り去ってしまおうかと考えたぼくに、オジサンは笑う。

「のう、どうやったら信じてくれるんじゃ？」

「……はい？」

「だから、どうすりゃ信じてくれる？」

この人は何を言っているんだろう。一体ぼくに何をさせたいんだろうか。そもそもそれを信じてもらってどうするつもりなんだろう。

でも、いいや。わかった。少しだけオジサンに付き合おうと思う。

「ねぇ、オジサン神なんだよね？」

その言葉にパッと顔が明るくなった。

「おお、ようやく信じてくれる気になったか？」

「ううん」

首を振るぼくに、今度はガクリと肩を落とす。ホントに歳を重ねてるとは思えないよ、この人。だけど乗りかかった舟だ。一度付き合うと決めたんだし、少しだけでも付き合おう。

「とりあえず神様に聞きたいこととかあるんですけど」

「む、いいぞ。答えてやろう」

どうにか気を取り直して言うオジサン。胸を張って、もしかして威厳があるとでも思ってるのかもしれないけど、もうそんなのないから、ただ滑稽なだけだから。

「じゃ、とりあえず聞くけど……そもそもなんで人の姿なの？」

「……ホ？」

ピタリと動きが止まった。

「オジサンは人間と同じ姿なんだからキリスト？　それともユダヤ？　イスラム？　他にもヒンドゥーとか色々あるけどそれとももっと別の神様なの？」

いつも思ってたことなんだけど、人が信仰する宗教に出てくる神様はその大半が人間の姿をしてる。これって結構不思議だよね。世の中には伝説上の生き物やら幻の生物やらが一杯いるし、その方が威厳があると思うんだけど、こと神様に関しては人の形をしている場合が多い。

「……」

「ねぇ、オジサン？」

とまぁ、どうせ答えなんて返ってこない。そもそも期待してなかったし。「……なんの、か」とか呟いてるけど、どうせそんなの形だけだ。

「わからないんだったら、さようなら」

ま、これでオジサンとはさよならできるし、いいか。そのまま歩き出したぼくに「ワシはそんなの知らん」

「……はぁ」

もういいや、放っておこう。本当に背を向ける。

だけどオジサンはまだ諦めない。

「人間が勝手に言っとる宗教とやらの範囲に神を当てはめられてもな……」

……その発想は確かに新しいかもしれない。

頭をかきむしりながら呟いたオジサンの言葉に、ぼくの足が止まった。うん、興味を惹かれちゃったんだね。

「……確かにオジサンの言うとおりかも。もし本当の神様がいるとして、人間の宗教に当てはめられても困るかもね」

このオジサンは何者だろう？　危ない人には出来ないような答えだ。少し興味が出てきたかもしれない。

「それで、さっきも聞いたけどじゃあなんで人の姿をしてるの？」

だけど、今度こそ期待していない。

人を愛しているからだ、とか。人間と会話するため、とか。最早論破するレベルでもない答えしか出てこないのは経験済みだから。

だけど。

「ふむ、ならこんな姿じゃったら信じるのか？」

「へ？」

言うや否やオジサンの姿がグニグニと変形していく。

――気持ち悪い。

なんて思ったけど言葉が出なかった。そうして出来上がった姿はバケモノと表現するのが正しいのかもしれない。

巨大なヘビのような体。雄雄しい翼。それでいてなぜか顔だけは白人男性のソレ。

「ケツァル……コアトル？」

自然と、その名が漏れていた。

ケツァルコアトル。

アステカ神話の文化神・農耕神で、風の神とも呼ばれている。確かマヤ文明ではククルカンとかで呼ばれていた気がする。

「どうじゃ？　人の形をしとるのは単にお前らがビビらんように、それだけじゃ。別にワシの姿はなんにでもなるからの」

そう言って、今度はライオン、空飛ぶ鯨、犬、カブトムシ、巨大ムカデ、大樹。あらゆる生物に変化していく。

「ほれ、これで最後」

そして、最後になった姿はライオンの頭、ヤギの体、ヘビの尻尾。これはギリシア神話に登場するキマイラだ。

「……」

確かに、メチャクチャ恐い。威圧感がバリバリ出てて声すら出ない。

ぼくの顔を見て、ライオンの顔のままにやりと笑ったかと思えば、一瞬で元の姿に。

「これでいいか？」

腰が抜けていた。今のは手品とかの類なんだろうか？　そうは見えなかったけど。いや、もし目の前で起きたことが本当だったとしてぼくはそれでも信じない。これまでずっといないと思って生きてきたんだ。そんなすぐに信じてたまるもんか。

「じゃあ、おじさんは本物の神様？　全知全能だったりするの？」

「うむ」

即答しちゃった。

全知全能って、オジサン……。本当にただの危ない人なだけかもしれない。でもそこまで言うならちょっとだけからかってもいいと思う。

「全知全能なんだから出来ないことないんだよね？」

「うむ、当然」

胸を張って答える。

「じゃあ、火と氷を目から出してみて」

ちょっとドキドキしてたりする。

もちろん出来るわけないってわかってるけど、この変なオジサンがどんなリアクションを取るかが予想できない。

とか思って見つめてたら本当に予想外の反応が返ってきた。

「任せろ」

「……はい？」

ぼくがつい間抜けな声で聞き返した瞬間だった。

オジサンの左目から火が、それはもう火炎放射器から出てくる炎ばりの勢いで火が出た。それと同時に右目からは氷柱が。長さは５Ｍくらい。

「……」

あまりにもありえない現象に言葉が出ない。まさか本当に出来るとは思っても見なかった。つい固まってしまったぼくに、おじさんは得意げな顔でまた言う。

「どうじゃ？」

その言葉にハッとしたぼくは慌てて次の意地悪を。

「じゃ、じゃあ……誰にも持ち上げられない重い石を作ってみてよ」

全知全能な神様に出来ないことはない。ならばそんな石を作るのは簡単なはず。だけどそんな石を本当に作っちゃったら、誰にも持ち上げられないような石なんだから全知全能の神様だって持ち上げることが不可能になる。

つまり、矛盾が発生する。哲学というか言葉遊びだったかな？

まぁ、それはいいや。ともかくさっきのが手品と強引に解釈するとして、今度のはそうはいかない。　だってぼくは今ガンツスーツを着込んでる。つまり、その怪しげな手品で石を出してもそのほとんどを持ち上げることが出来るんだ。

「……ほう？」

オジサンの目が細くなった。

ありゃ、やっぱこういうのは無理なのかな？

「うむ、面白い。簡単じゃ」

なんてことはなかった。気付けば目の前に１５センチくらいの綺麗な形の石があった。「ほれ、確認してみろ」

「……」

ごくりとつばを飲んでいた。

おそるおそる手を差し出す。

「……？」

うん、もちあがらない。両手で持ち上げようと踏ん張ってもだめ。スーツが唸りをあげて筋力の増加を訴えるけどそれでも石はピクリとも動いてくれない。

本当に驚いて言葉が出ない。

一体どうなってるんだろう？　分からないことが多すぎて本当に混乱してきた。

「ふっふっふ、どれワシに任せろ」

今度はぼくを押しのけてオジサンがその石に触れる。

……そ、そうだ。オジサンがこの石を持ち上げることが出来ても、持ち上げることが出来なくても矛盾が発生する。

「しっかりと見とれよ？」

言葉と共ににっかりと笑ったオジサンはその石に触れ、そしてその次の瞬間にはその石が消失した。

「……うそ」

目の前で起きたことへの理解が追いつかない。手品だと思いたいが、残念ながらそういった視覚のトリックの引っ掛かったことはぼくの短い人生においては一度も無いから言える。

――多分、違う。

すぐさま石があった場所に触れてみるけど、やっぱり石は無い。おじさんも持っている様子もないし、そもそも服装的に隠す場所だってない。いや、スーツでも持ち上げられなかった石をそもそも簡

単に出したり消したりすることなどやっぱり不可能に近い。
もし、本当に消えたとするなら。
それは、ぼくがずっと考えていた全知全能の神として矛盾無く存在するための方法の一つ。それが起きたことになる。

「わしが作った石が『持ち上げられない石』だということを証明するにはもちろん、神であるワシが試すしかない」

そう、その通り。実際にぼくには持てなかったわけだからオジサンが持てるかどうかを試すしかない。

「確かに、ワシが触れるまで—正確には持ち上げようとするまで—は持ち上げることの出来ない石は存在していた。だがもしも真に全知全能のワシが触れたらどうなるか？　答えは明白……そうじゃの？」

そう、明白。
全知全能の神に持てない石はない。だがその神が創った誰にも持ち上げることの出来ない石は、神にすら持ち上げることは出来ない。
その矛盾はつまり、お互いの存在の否定へと繋がる。神は石によって存在を否定され、石は神によって存在を否定される。
だが、何度も言うように神は全知全能。たとえその存在を否定されようが、存在することが可能であるという全能の力によって存在し続けることを強引に可能とする。

結果、石のみがその存在を否定されることへと繋がる。

神にすら持ち上げられることを否定するという石の存在理由と神に不可能があってはいけないという神の存在理由がぶつかり合い、石はそもそも存在していなかったことになれば問題は解決し、神は

矛盾しないという側面が石そのものに顕在化する。

結局、石は持ち上げられないために、自らの存在そのものを否定して消滅。その結果として神にすら持ち上げられないはずの石はこの世から消えて、つまり全知全能たる神の存在そのものの矛盾もなくなる。

要するにそれは全知全能の神と誰にも持ち上げることの出来ない石が両方同時に存在できたという事実が発生したことになる。

「……」

――信じられない。

絶句していた。

ぼくが言葉遊びとして考えていた一つの答え。それが、事実に目の前で起こってしまった。

「どうじゃ……少しは信じる気になったかの？」

「お、オジサンが只者じゃないってことだけは信じるよ」

嘘だった。ぼくの中ではもう目の前のオジサンを神だと信じる気になってしまっている。頭はもちろん否定しているんだけど、心が本能的に認めちゃってる感じだろうか。

どうしようもない。

――もしも全知全能ならきっとぼくの心だって読めるんじゃないだろうか？

どうにか疑わしい目を向けるぼくに、神様は「ふむ」と笑った。

「うむ、やっと信じる気になったか」

「……」

もう、言葉も出ない。

疑う気にもなれなくなった。

「よし、これでやっと話しが進むの。では早速本題じゃ。お主、最強の存在になりたいか？」

――いきなり何だろ……最強の定義ってなに？

首を傾げたけど、問いかけられた言葉『最強の存在』を想像してみた。もちろん、一瞬だけだけど。

「なるほど、真祖の吸血鬼か。確かにお主が今までに見てきた中では最強の存在じゃの？」

平然と呟き、さらに神様が言葉を続ける。

「大和猛がおる世界とお主がおった元の世界。どっちがいい？」

「……え？」

今、何て言ったんだろう？　タケルにぃがいる世界？　それって死後の世界だろうか。

「いや、生きとるよ。いわゆる並行世界みたいな場所で」

生きてる……タケルにぃが？

信じられないという心と、信じたい心がせめぎあってすぐさま希望が勝った。震えだす体と勝手に出てきた涙に、視界がぼやけてきた。

「じゃ、決まりじゃな」

ぼくは何も言ってない。だけど、さすがは神様。

そもそも元いた世界になんかいたくない。しかもタケルにぃがいるなら考えるまでも無くそっちの世界に行くに決まってる。
それを全て分かってくれてるみたいだ。
「ついでにあっちの世界の知識と世界への適応も。あ、目覚めたらお主は人間じゃなくて真祖の吸血鬼になっとるからな」
「……え？」
いや、ちょっと待っ――
「では、行ってこい。正志　明」
その言葉を最後に、ぼくは意識をなくしてしまった。
「お前のいう真祖ではなくあっちの真祖にしとくぞ……ってまぁ、能力はほとんど変わらんか」
そんな言葉を耳にして。

この世界には魔法と気が存在する。それだけでも驚くべきことなのに、しかも魔法世界と現実世界の2つも世界が存在しているらしい。と、いうことはタケルにぃを探すなら2つの世界を回る必要があるということだろうか。
考えただけでも気が遠くなる。
まぁ、でも人間ではなくなった今の自分ならそれも苦ではないかもしれない。
あ、それと魔法は現実世界では秘匿とされているから気をつけなければいけない、らしい。
とりあえずコレが神様（？）の言っていた世界の知識だろう。大

雑把すぎる情報だけど、これを知っているか知らないかだけで大きく違うので助かったといえば間違いなく助かった。

「……」

フと、いつの間にかぼくは立ち尽くしていた。周囲を見回すけど誰もいないし、何もない。ただ木々が広がっていた。太陽が沈んでいるせいで闇が濃く、５M先も見渡すことが出来ない。

「ここ、どこだろう？」

なんて呟いてみるけど、そんなのが分かるはずが無い。とりあえずここが日本ということだけはなぜか理解しているけどそれだけ。

いや、今はそれよりも先に確かめることがある。

「――体がぼくのものじゃないみたいだ」

何と言えばいいのか。

自分がもう人間じゃないということだけは疑いようが無いと思う。

人の皮膚を突き破るための尖った犬歯。全くもって当然のように闇や影の全てを、それこそ自分の手足のように動かせるであろう能力。まるで人間離れした、それこそガンツスーツ以上の力を発揮できるであろう筋力のうねり。脳を潰されようが心臓を貫かれようが、四肢を切断され首を刎ねられようが終わることの無いであろうこの命。

それを感じる。

だけど、体に宿っていると感じるだけ。きっと使いこなすことはまだまだ出来ない。それになにより――

「――うん……なんていうか、実感無いなぁ」

明日にでもなったら自分が吸血鬼になったことなど忘れてしまっていそうな気分だ。
たった１０年だけど、それでも１０年。世間からもてはやされたり、逆に世間に絶望したり。数え上げればきりがないほどに色々と自分なりに精一杯、人間として生きてきた。簡単には人間気分は抜けないだろう。
ただ、不思議なことに抵抗感はまったくない。もしも自分の今の姿が人間とかけ離れているのならきっと抵抗を感じるんだろうけど、多分何も変わらない。少し肌の色が青白くなったくらいだからかもしれない……うん、多分だけど。

それはそうと、自分が不死だけど無敵じゃないということにだけは気を置いておかないといけない。うん、当然だよね。だって実際に真祖の吸血鬼をタケルにぃが消滅させるところをこの目で見たことがあるんだから。
死ぬことは無いけど、いくら真祖の吸血鬼でも死ぬという認識すら覚える間もなく体の全てを消されちゃったらもう消滅するしかないってこと。そうなると復活できないんだから結局は死ぬことと同意義なんだよね。

しかも、ここの魔法使いやらはその時の真祖の吸血鬼レベルじゃ収まらないくらい強い存在もいるらしい。
とりあえず自分に過信することだけは避けて、消滅させられることだけには気をつけよう……気をつけてどうにかなるレベルの話しじゃない気もするけど。
と、そこまで考えて「――ん？」
なんだろう、この世界って少し違和感があることにフと気付いた。いや、違和感というほどのものではないかもしれない。

でも、それは確かに元いた世界とは確実に違う。
自然を強く感じる。とでも言えばいいのだろうか。ただ、それだけ。特に何が困るでもないし、生活をしてて気になる程でもない。
立ち尽くしているから何となくそう思っただけかもしれない。どっちにしてもあんまり気にしなくてもいいかもしれない。

「ま、いっか」
とりあえずそろそろお腹が減ってきた。

「……誰かぼくに血を吸わせてくれる人っているのかな？」

無理やり、という暴力的な解決手段はありえない。そんなことをしてまでおなかを満たしたいとは思わない。それなら餓死したほうがマシだ。
……餓死はないと思うんだけどね。
タケルにぃが生きているという情報があるだけでどこいるのかはわからない。だけど生きてくれてさえすればいい。あの人ならどこにいようがたくましく生きているはずだ。これは絶対に、と言い切ってもいい。

だから、焦る必要も無い。
ぼくは不死だし、タケルにぃだってぼくの血を吸えば真祖ではなくても眷属の吸血鬼になれる。ぼくたちには時間が腐るほど残されているんだ。
だから、のんびりとこの世界を観光する気分で、楽しみながらタケルにぃを探せばいい。

「よし、行こっと！！」

体の一部を闇に同化させて、飛び上がった。

ぼくは今、まさに飛んでいる。
世界が変われば道も変わる。
きっとこれはぼくにとっての第２の人生。
前の世界では社会に適応できなかったけど、もしかしたらこの世界は少し違うかもしれない。
ぼくの胸はかすかな不安と、それ以上に大きな期待で一杯になっていた。

闇の空。
月をも覆う深い雲。
その上空を悠々と飛ぶ一つの小さな物陰があったという。

第2話「Ｆｉｒｓｔ　Ｃｏｎｔａｃｔ」

燦燦と地を照らし命を育む太陽は既に沈みこみ、幻想的な明かりを灯し命に安らぎを与える月が空に映えていた。

時間は夜。

それが人里ならば人工の光が爛々と輝き月の神秘を曇らせてしまうが、ここは木々の隙間から伸びた光がより一層にもどかしいような、無粋な光が届かぬ山奥。

人の気配も人工物もが存在せず、そこに動く動物は野生の生命しかありえないような、そんな奥地。

当然、人間などいないはずのこの場所で、朗らかに会話を交わす少年と少女がいた。

小さな火が爆ぜる。

串に刺さった魚がほどよくその身を焦がし、十分に火が通ったことを見た目にも伝える。それを見た黒髪―頭部からは犬のような耳を生やし、まだ１０歳程度―の少年が、後ろで水を一杯に張ったドラム缶とその下に並べられた木を真摯に見つめる長身―こちらは１５歳前後、１８０ｃｍを越える身長やその大人びた雰囲気からはとてもそうは見えないが―の少女に声をかけた。

「お、焼けたみたいやで、楓姉ちゃん」

「こっちも風呂の準備が出来た。後は火をつけるだけでござるよ」

楓と呼ばれた少女が振り返り、関西弁の少年の隣に座る。

「よっしゃ、ほな早速メシを・・・！」

「うむ」

何本もある串の中から火が通っている魚を選び、各々がかぶりつく。

そうして、全てが彼等の胃袋に納まった頃だろうか。

「！？」

フと楓が目を険しくさせた。

「……ん？」

その様子に気付き、怪訝な顔になる少年。

「どないしたんや？」

「……人間ではない生き物がこちらに向かっているようでござるな……」

その言葉に少年も気配に気付いたらしく、すぐさま汲んであった水を撒き、火を消す。

「誰かわからんけど、とりあえず俺に任せてくれんか？」

体をほぐしつつも数歩ほど前に出た少年の言葉に、楓は笑い相槌を打つ。

「あいあい」

向かってくる気配に殺気があるわけではないが、もしかしたら戦闘になることもある。そんな可能性も感じさせる、どこか切羽詰っ

た気配。
ざわざわと山が蠢き、周囲を覆う闇が一層に濃くなっていく。
「……なんや？」
少年が呟いたと同時だった。
何の前触れも無く、ソレは闇から生まれた。
「「っ！？」」
驚き、慌てて距離を置く彼等をよそに、闇から生まれたソレは徐々に形を成し、人型へと。そして――
「――ふぅ、やっと人と会えた」
少年が現れた。
大地へと降り立ち、顔をあげた少年はまだまだ幼く、関西弁で犬耳を生やす少年とほぼ同じ歳であることが容易に見て取れる。
まず目を引くのはその顔立ち。眉目秀麗とは正にこのことを言うのだろう。あどけない顔立ちはまだまだこれからの可能性を感じさせずにはいられない。ぼさぼさに伸びた髪はそれでも不潔さではなく活発さを象徴し、さらにはどことなく賢い雰囲気をもかもし出している。
まるで絵本から生まれたような見事な顔立ちの少年だが、次に目を奪われるのはぼろ雑巾のような服装。ほとんど浮浪者のような格好である。
だが、その少年自身から発せられる空気がそんな生易しい存在ではないことを著しく物語っている。
「なんや、お前？」

険しい顔のまま犬耳少年が鋭く問いを発した。自分が警戒されていることに気付いた闇から生まれた少年は慌てて両手をあげて口を開く。

「い、いやぼくは怪しいものじゃないんです！」

「いきなり出てきたような奴に言われても説得力あらへんわ。ええからとりあえずお前何者や？　怪しいかどうかはそれから決める」

犬耳の少年のすぐ後ろ、楓も頷き闇の少年を見つめる。

「い、いやその……」

モジモジと体を可愛らしくゆすって、困ったように顔を俯かせる。相手が相手ならこれだけで卒倒しそうなほどに似合っている。

だが、闇の少年が只者ではないように楓達もまた只者ではない。少年から発せられる人間ではない空気に警戒を緩めることはない。

なかなか話そうとしない少年に痺れを切らしたのか、犬耳少年が尋ねた。

「お前、人間ちゃうやろ」

「！！」

図星だったのか、闇の少年の顔が引きつり視線をさまよわせ、結局は諦めたように頷いた。

「……ぼく、吸血鬼なんです」

「ほんで？」

「それで、血が欲しくて色んな人にお願いをしてみるのはいいんだけど皆すぐに逃げちゃって……」

「それで、腹をすかせてこんな山奥にいる拙者たちを見つけたと？」
今度は楓の問い。それは正に図星だったらしく、少年は力なく「はい」とうなだれた。
「出来れば、血を吸わせてもらえたらなぁと……」
――なんや、こいつ？
犬耳少年は湧いて出る疑問にふと首をかしげていた。
そもそも、この少年から発せられる空気は生易しいものではない。犬耳少年自身が知る吸血鬼ほどの力はとてもないだろうが、それでもそこらへんの人間なら無理にでも捕まえて血を吸うこと程度なら簡単なはずの力を感じるのだ。
――っていうかこいつ、実際に戦かったら俺でも勝てるかわからんで。
それほどに強いはず。
「……」
気付けば犬耳少年は、純粋な笑みを。
「楓姉ちゃん、俺こいつに血を吸わせたろうと思う……」
窺うように視線を送ると、楓は「全く」と呆れたようにため息を吐いた。どうやら彼のたくらみに気付いたらしい。だが、止めないということは彼女なりの肯定と受け取ってもいいということだろう。
「よっしゃ、俺の血を吸わせたる」
「え？」
――本当に！？
喜びから叫びそうになった少年の言葉を遮って言う。

「ただし、条件がある」
「……条件？」
「ああ、元気になったら俺と勝負や！！」
その言葉に、少年の目が点になった。

「……しょうぶ？」
「お前、結構強いやろ？　腕試しみたいなもんやな。やっぱ男やったらどっちのほうが強いか決めんと」
その言葉に、闇少年の表情が変わった。ウンウンと一人で頷く犬耳少年はそれに気付かず楽しそうに「どうや？」
「……」

一拍の間。
そして「じゃあ一つだけ質問してもいい？」
今度は闇の少年が問いを発した。

「お、なんや？」
「キミはどうして修行してるの？」
「なんで修行してるか？」
「うん」

頷く少年に、犬耳少年は迷う一瞬すらなく当然だとでも言うように答えていた。
「そんなん強くなるために決まってるやんけ。男やったらそれだけで十分や！」
目を輝かせ「そう思わんか？」付け加えた。

「……」

ぽかんとした顔をしたのは闇の少年。

「む、なんやお前。そう思わんのか？」

呆気にとられて返事をしようとしないことを否定だと犬耳少年は解釈したらしく、恨みがましい目で闇の少年に詰め寄り――

だが。

「これこれ」

――楓がそれを遮った。犬耳少年の首根っこを掴み軽がると持ち上げて言う。

「その気持ちは拙者も理解できるし、コタロー（小太郎）のそういうところは嫌いではないが、相手の命に関わるようなものとの交換条件で無理やり戦おうというのはちと男らしくないのでは？」

楓の言葉に、宙ぶらりんになったことによりジタバタともがいていた犬耳少年―小太郎―がその言葉に動きを止め「む」と呟いた。

「確かに楓姉ちゃんの言う通りや。よし、わか――」

「――いいよ」

小太郎の妥協案を遮り、闇少年が笑顔で頷いた。

「「え？」」

いきなりのことに、楓と小太郎が同時に聞き返していた。

「つまりどっちが強いかを確かめるため、それでいてさらに強くなるための腕比べ、要するに試合みたいなものだよね？」
「……お、おお。そらまあ、そうやな」
「じゃあ、いいよ。ぼくもそういうの嫌いじゃないんだ」

どこか楽しそうに言う少年の言葉には確かに嘘をついている様子ない。小太郎の言葉で先ほど固まっていたのが嘘のようにその表情は晴れやかとしている。

「え、ええんか？」

なぜか恐る恐るといった様子で尋ねる小太郎に「うん」とこれまた明朗に答える。それに気を良くした小太郎は、少年の前に腕を差し出した。

「ほれ、いくらでも吸ってみい」
「コタローの血で足りなければ、拙者の分も吸ってもいいでござるよ？」
「ありがとう！」
「あ、俺が死なん程度に抑えてや？」

などと軽いジョークを交えつつ、吸血鬼の少年は久しぶりの食事を３０秒ほどで終わらせた……のはよかったのだが。

「お、おろ？」
「こ、コタロー？」
フラリと揺れて、そのまま地面に倒れこみそうになった小太郎を、楓が慌てて抱きとめた。

「これは……？」

――返答によっては許さない。

そんな声が聞こえてきそうなほどの楓から発せられた気迫に、吸血鬼は心底申し訳なさそうに言う。

「ご、ごめんなさい。少し吸いすぎちゃって……多分、貧血程度だと思うんだけど――」

――大丈夫？

尋ねる前に小太郎が呟く。

「これはアカン……明日や。ええか、逃げたら許さんからな」

微笑み「楓姉ちゃん、先に寝るわ。おやすみ」それだけ言い捨てて目を閉じた。次に聞こえてきたのは静かな寝息と安らかな寝顔。

彼らは毎日のように修行をしている。当然今日も。

つまり既に疲労も限界にまで来ていた。ただでさえヘロヘロな状態に加えて、吸血鬼の少年によって貧血を起こすほどに血を吸われてしまったのだ。さすがに普段から鍛えている彼とて体力が底をついてしまったのは仕方のないことといえるだろう。

「ああ、やっちゃった」

申し訳なさそうにうなだれる吸血鬼の少年に、楓は優しく笑う。

「拙者の名は長瀬　楓。吸血鬼殿の名は？」

「……え？　あ！」

楓の問いかけに、自分の名をさらしていなかったことに今更にな

って気付いたらしい。なぜか正座になって姿勢を正した。
「ぼくは正志（タダシ）　明（アキラ）です。まだ１０歳なんで、普通に会話してください」
「ほう、なるほど……アキラとコタローはほぼ同い年か」
「え、そうなんですか？」
「うむ」と頷く楓はなぜか嬉しそうに顔を綻ばせて言葉を続けた。
「ではアキラ、今夜はもう遅い。もしも本当にコタローと闘うつもりがあるならアキラもさっさと寝たほうが良いのでは？」

――寝床ならほれ？
気持ちよさげに寝込む小太郎を抱くことによって両腕がふさがっているためか、顎で設営されていたテントを指し示した。だが、それはつまりアキラもそこで寝ていもいいということで。

「え、いいんですか？」
「いいもなにも、当然でござろう？」
「あ、ありがとうございます！」
「礼には及ばんよ、ついでにコタローを頼むでござる」

――拙者はもう少しだけ用事があるから、先に寝るといい。
優しく言い聞かせるように言葉を付け加えて、腕で眠る小太郎をアキラに託して立ち上がる。

「はい！」

アキラは嬉しそうな笑顔を浮かべてまるでスキップでもしそうな勢いでテントの中に転がり込んでいった。
もしかしたら今まで夜風を凌げる場所で寝ることすらなかったのかもしれない。

――色々と謎が多い少年でござるな。
考え事をするかのように地面を見つめていた楓だったが、どうにも考えがまとまらなかったらしく、諦めたように首を軽く振った。
先にアキラにも言っていた用事を済ませることにしたようで、天を仰ぎ、大きく伸びをしてからフと呟く。
「とりあえず拙者は風呂にでも入るとするか……」
実に女の子らしい用事だった。

静かに寝息をたてる小太郎君の隣、ぼくはにやけっぱなしだった。
この世界に来てからもう1週間。初めて飲んだ血は、まるで果物の絞り汁を飲んだときのように濃厚で美味しかった。しかも、それだけで本当におなかが膨れている。吸血鬼という存在の燃費のよさは計り知れないものがあると今更ながらに思う。
「……にしても」
変な感じだなぁ。
これが世に言うキャンプというものなのだろうか。始めての経験に興奮して寝れそうにない。いや、それだけじゃなくて。なんといっても血を快く飲ませくれる小太郎君と長瀬さんへの感謝の想いが一杯でとてもジッとしていられない。
隣の小太郎君に目を向けてみる。くらがりで分かりづらいけど、もう顔色も元通りになっていて、元気に寝返りをうったりしている。
――小太郎君も、あの長瀬さんもきっと気とか魔法とかを使える

んだろうなぁ。

なんてことを少し思ったりする。うん、本当になんとなくなんだけどそれがわかる。なんでわかるのかはわからないけど。

明日はとりあえず小太郎君と一度だけ勝負して。

それから……それから？――

――それからどうしようか。本当ならまたタケルにぃを探すたびに出ないといけないんだけど、この世界に来てから初めて人に優しくされたせいか、もう少し人に触れていたいと思ってしまう。

「でも、やっぱり迷惑かなぁ……」

「何が迷惑でござるか？」

「え！？」

いつの間にか長瀬さんがテントの中に入っていたらしい。小太郎君を真ん中にした川の字スタイルという状態になっているわけだけど、ぼくが考え事をしていたことを差し引いたとして、それでもぼくが全く気付かなかったというのは長瀬さんがそれだけすごい人なんだろう、ということがおぼろげに分かる。

「あ、いや……」

言いよどむぼくに、長瀬さんは何も言わず、じっと耳を傾けてくれている。

大人みたいな優しさを持ってる人だなぁ、なんて思いながらも、いや、そう考えたせいかもしれない。気付けば口が開いていた。

「その、もう少しだけ小太郎君や長瀬さんと一緒にいたいなぁ……なんて」

――やっぱり駄目ですよね。
ハ、ハ、ハと乾いた笑いを精一杯あげてみるけど、長瀬さんの反応はない。
やっぱり吸血鬼なんかと一緒にいたくはないよね。内心でがっかりと肩を落として、もう眠ろうと思って目を閉じる。

「どう思う？」
「いや、別にええんちゃうか？」

今度は小太郎君だ。
いつから起きてたんだろう？

「うむ、それにエヴァンジェリン殿の下でネギ坊主の修行にも呼ばれていたからむしろ丁度いいかもしれないでござるな……」

え？　エヴァン……？　それに葱坊主？　お化けか何か？

「よっしゃ、決まりや。俺らの知り合いに真祖の吸血鬼がおる。んで、丁度明日に会う予定やったからアキラも連れてったるわ」
「え、うそ。知り合いに！？」
「うむ」

のほほんと頷く長瀬さん。
大丈夫なんだろうか？　正直、ミッションで見たときの真祖は半端なく恐かった。うん、凄かったんだよ？　だってぼくなんかその…おっしこ漏らしちゃったし。
……いやいやいや、あれは生理現象だからね。しかもぼく１０歳だから。あの時はまだ９歳だったからソレくらいは多めに見て欲しい。だって他にもおっちゃんとかお姉さん達だってお漏らししてた

よ？　タケルにぃとあとはバカみたいに突っ込んで2秒で死んじゃったお兄さんくらいじゃなかったかなぁ。漏らさなかったのって。
なんて、いやな思い出を回想してしまった自分に言い訳をしてる場合じゃなかった。

「だ、大丈夫なの？」

これだけは聞いておかないと。
いきなり殺されました、では洒落になってない。ぼくも真祖だけど、まだまだ日が浅いせいか全然力を使いこなせていないから本当にありえるハナシだ。

「ああ、うん……恐いのは確かやけどな。まぁいきなりとって食われたりはせんから大丈夫や」

小太郎君が少しだけ背筋を震わせる。
やっぱり恐いんだ。

「ほらほら、2人共明日は勝負するのでござろう？　だったら早く寝ておくべきだぞ？」
「あ、そうやった！　とりあえず、先に勝負やからな。忘れんなよ？」
「もちろん、ぼくだって楽しみにしてるんだからね！」

その言葉を最後に、テントの中が静かになった。
黙り込んで、目を閉じる。
普通に、一緒にいることを受けて入れてくれた2人に、本当に感謝を込めて。

「ありがとう」

今日は気持ちよく眠れそうだった。

翌朝目が覚めると朝日が昇っていた。
吸血鬼って不思議な生き物だと思う。だってこれまではいつも朝・昼をずっと寝てて夕暮れ過ぎから起きて活動していた。つまり昨日の夜も、ほとんど夕方まで寝ていたんだ。
それなのに、夜に目を閉じてもまたすぐに眠れちゃったんだから。昨日だけでもう２０時間くらい寝た気がする。うん、凄い。
だけど、一つだけ。
ぼくはこの世界に来てからの一週間、ずっと朝と昼を寝ていた。だから知らなかったんだ――

テントには誰もいなかったから、もうみんな起きているようだ。とりあえず朝の挨拶をしようと、テントを出たのがいけなかったらしい。
「おは――っ！？」

――吸血鬼が本当に太陽の光に弱いなんて。

……うん、うん。
結局、ぼくは小太郎君との約束を果たせないまま、例の真祖の吸血鬼さんのところに連れて行ってもらうことになりました。
長瀬さん、おんぶしてもらってありがとうございます。

小太郎くん、本当にごめん。ぼくが元気になる夜まで待ってくれる？

第2話「Ｆｉｒｓｔ　Ｃｏｎｔａｃｔ」（後書き）

一応次話も約1週間後です。
あと1，2話更新したら2週間更新になると思いますのでご了承ください。

第3話「Hi Day-Light Walkers」

太陽が昇っていた。
降り注ぐ光にその身を晒すのは広大な大地ではない。海、海、一面の海。どこをどう見回しても広がり続ける大海原がそこにはあった。
そして、そんな海にポツリと、だが近くでみれば仰々しいほどに巨大にそびえ立つ建築物があった。

ここは『闇の福音』『不死の魔法使い』などと恐れられている真祖の吸血鬼たるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルのもつ広大な異空間。
『別荘』とも呼ばれるこの空間のこの建築物の屋上で「うは〜〜」とどこか抜けた声を漏らすアキラがいた。
楓に背負われたアキラは弱々しくも「すご」と呟き、隣で同じように首をキョロキョロとさせている小太郎も「こんなとこであいつは修行しとったんか」と漏らしていた。

「そういえば、小太郎もここに来るのは初めてだったな？」
「お、おう……」

息を呑む小太郎に、楓は軽く笑みを浮かべて今度はアキラに言う。
「もうしばらくすれば、エヴァンジェリン殿に会える。それまで我慢するでござるよ？」
「……はい」

やはり、弱々しい。

ここにきてアキラは完全にダウンしていた。
そもそも真祖が太陽の光に弱いとは、アキラ自身も知らなかった。別に溶けたりだとか、崩れたりだとかするわけではなかったが、それでも体に力が入らないようで、朝から完全にぐったりとしている。

「お前、ホンマに大丈夫か？」

小太郎が心配半分、呆れ半分といった表情で尋ねる。

「うん、夜になったら元気になれるんだけどね……」

申し訳なさそうに言うアキラに、小太郎はソッポを向いて「ま、大丈夫やったらそれでええわ」と言い捨てる。

「小太郎くん……」

――ありがとう。

小さく呟くアキラの言葉に、小太郎は焦ったように

「ち、ちゃうわ！　別にお前の心配やなくてこっちは昨日の夜から腕試しできてへんから、お前が約束を破らんか心配してるだけや！！」

真っ赤になって言う。

それだけで彼の不器用な優しさが伝わり、アキラの頬が自然と緩む。

「うん、だから……ありがと」

「む……ふ、ふん！」

まるで拗ねた子供のように明後日の方向を向く小太郎に、今度は楓がフフと笑う。

「アキラとこたろーはいい友人関係を築けそうでござるなぁ」

「な！？　そんな気色悪い関係いらんわ。男やったらやっぱ強いライバル同士！　これに限るやろ、楓ねえちゃん？」

肘を曲げて天に向けた右腕を左手でパンと叩き、それをへばって動けないアキラに突きつける。

「ま、吸血鬼が太陽に弱いんは認めたる。けど夜になってもお前が弱かったら容赦せんで？」

――ええな？

言葉は乱暴だが、どこか快活として伝わるその言葉。

「もちろん。ぼくだって結構強いんだから」

にやりと笑って答えるアキラの表情に、元気は無いがそれでもどこか楽しそうで。小太郎は満足げに頷き「ほな楽しみにしとるわ」談笑しつつもそうして歩を進めること数分、突如大きな爆音が鳴り響いた。

「な、なに？」

焦るアキラに、だが楓とこたろうーは何の反応も見せずに悠々と歩を進め、視界が一気に開けた。そこにいたのは計４つの影。

偉そうにふんぞりかえった幼女―年齢はアキラと同程度だろうか。その幼女に付き従うように後ろに控えるのが、小さな人形のような女の子と楓と同年齢近くに見える少女。

降り注ぐ太陽の光とは対照的に、涼やかに立ち尽くす彼女達がそこにいた。そして、そんな彼女たちにボロボロにさせられたのであろう、一人の――これも恐らくはアキラと同年齢近く――の少年が体からプスプスと煙をくすぶらせていた。

――……あのぼくと同じくらいの年齢の女の子が真祖かな？

なんとなく、アキラにはわかる。

いくつものガンツに参戦してきたことによって培われてきた勘ではない。そもそもアキラはガンツに参戦はしていたものの、いつも見ていることが基本だった。そんな彼が経験によってしか得ることのできない戦士としての勘をもっているはずがない。

ならば、何か。

生まれたその瞬間からもっていた、ただの勘。それが、アキラにとっては何よりも信頼に値するその勘が、アキラ自身にそう告げていた。

――にしても、何を？

どういう状況になれば少年から煙が出るのか、さっぱりわからずに首を傾げるアキラをよそに女性の怒鳴り声が一帯に響いた。

「――全く……何度いえば分かる？　足を――」

グチグチと続く、ボロボロの少年への叱咤。

「おうおう……今日も荒れとんなぁ」

小太郎の小さな呟きに、アキラは頬を引きつらせて言葉を重ねた。

「……今日も？」

「おう。今日も、や」

――なんていう死亡フラグ？

つい言いたくなってしまった言葉をグッと飲み込んだアキラの様子にも気付かず、小太郎は拳の骨を鳴らし「へへ」と笑っている。

「？　なんでわら――」

「――入れ！」

アキラの声に割り込み、幼女が小太郎に合図を送った。小太郎はさっと前にでて「よっ」と少年との挨拶を。

「コタロー君！？」

ボロボロになっていた少年の驚きの声に、真祖の少女は2人に背を向けて、アキラへと視線を送った。自然とアキラの体が強張ったことに気付いたのは、幸いにも楓だけ。

少女はそのままアキラのいる方向へと歩き出す。

「その犬、お前にはうってつけの相手だろう。ウォームアップだ。手合わせしてみろ」

――ま、負けるだろーがな。

その場を後にする真祖に、少年と小太郎が対峙して言葉を交わす。

「オイ、ネギ。エーんか？　一通り修行してヘロヘロやろ？　休んでもえーで」

「大丈夫、心配ありがと」

そして、2人はぶつかりあった。

「で、お前は何だ？」

部屋に連れて来られて、テーブルを囲うなり、しかもぶしつけに問いただされた。ちょっとだけムッとしちゃうのは仕方がないことだと思う。

けれどさすがに面と向かって文句を言う気にはなれない……恐いから。

「いや、何って言われても……真祖になったばかりの正志　明、１０歳です」

とりあえず畏まりながらも丁寧に答える。

まるでどこかの偉い人と会ってる時のような態度を取ってしまっているぼくに、ぼく自身でも自然なことだとなぜか思ってしまっていた。

「ふん、最低限の礼儀くらいはわきまえているようだな」

「……？」

首を傾げるぼくには目もくれず、目の前の真祖の人は「茶々丸、紅茶だ」と、隣で畏まっていた美人なお姉さん―茶々丸さん―に偉そうに告げる。

「はい、マスター」

――マスター、か。

こういう時、この世界の知識があって助かる。あの神さまに凄く感謝だ。
まさか吸血鬼が普通の、一般的な金持ちが雇うような従者を連れているとはちょっと思えない。となると、きっと魔法使いとその従者という関係を結んでいるということだと思う。

「どうぞ」
「あ、ありがとうございます」

そっと差し出された紅茶に、お辞儀をする。こういうお辞儀を反射的にしてしまうのは、さすがにぼくは日本人なんだなっていう気がする。
――まぁ、この飲み物に手をつける気はないんだけど。
余計なことを考えていたぼくに、目の前の吸血鬼さんが言葉を発した。

「貴様のことは大体、長瀬楓から聞いている。どうも吸血鬼になりたてで陽の光にすら耐性がないようだな？」
「はい」

頷くと、目の前の吸血鬼さんは、ぞっとするほどに残酷な笑みを浮かべた。

「それで、貴様は一体何を期待してここにいる？」
「……え？」
「私が真祖の吸血鬼となったのは６００年も前のことだ。当時はそれなりに苦労した。私にも『それなり』があって真祖になったのだから貴様にも『それなり』があったのだろう。だから、貴様がどういう経緯で吸血鬼になったかは聞かないでおいてやる」

――ま、興味もないしな。
と言葉を付け加えて、茶々丸さんに淹れてもらった紅茶に、真祖さんは口をつける。
話の流れが良くみえない。とりあえず「はぁ、ありがとうございます」とだけ頷いておいて、続きの言葉を待つ。
でも、確かに正直なところ助かる。だって「神さまに半ば無理やり真祖にされました。けどすごく喜んでいます」なんていったら「ふざけているのか」と殺されそうな気がするから。
少しだけホッとしてしまったぼくに、だけど次の瞬間には冷や水を浴びせかけるような冷たい声が響く。

「――が、私が貴様に何かをしてやるという義理はない」

その言葉に、ハッとした。
それは確かにその通り。というか寧ろ普通に当たり前なことだ。誰が同族というだけで見ず知らずの存在を受け入れてくれるというのだろうか。
例えるならいきなり見ず知らずの人間が、家がないから泊めてくれと転がり込んできたとして、ほぼ全ての人間がそれを断るか、良くても一泊二泊程度で終わらせてそのまま追い出すだろう。
つまり、それと同じこと。
元々適当に旅をしつつもタケルにぃを探す旅、誰かに頼るつもりはなかったので大したことではない。大したことではないんだけど、さすがに困ったことといえば困ったことといえるんじゃないだろうか。
いざという時に日中に動くことができないというのは、やっぱり不安が残る。

「……」

何もいえないでいると、彼女はやはり笑って「だが」と付け加えた。

「貴様が私の下で働くのならばある程度は助けてやってもいいぞ？」

――働く？

「何を――」

尋ねようとしたんだけど、彼女は強引に言葉を進める。

「――貴様、夜ならばある程度は戦えるだろう？」

「え？　あ……はい、夜なら。さっきの二人にはちょっと勝てなさそうですけど」

さっきの二人とは小太郎くんとネギと呼ばれていた人のこと。２人の実戦訓練を少しだけ見ていたから言えることだ。

あの二人は驚くほどに強かった。凄く動きが早いし、２人とも魔法やら気やらを存分に行使しまくっていた。

そのどちらも使えない、しかも真祖の力も使いこなすことの出来ない今のぼくでは、少しくらい戦うことはできても二歩どころか三歩くらい及ばないんじゃないだろうか。

「ふん、それでいい。ヘトヘトになったぼーやの相手には丁度いいだろうからな」

――もしこの条件を呑むなら、貴様が日の光に耐性をつけれるくらいの面倒はみてやろう。

椅子の背に体を預け、肘掛に肘をかけ、座りながらもぼくを見下

ろすような態度で、だけどそれは自然で――
それはつまり、多分。ネギくんの訓練相手になるならば、ぼくの面倒も見てくれるということで。
もちろん願っても無いこと。
だけど。
ぼくにはどうしても知っておく必要のあることがあった。
だから――
「――少しだけ待っていただけませんか？」
自然と言葉が漏れ出ていた。
「なに？」
軽く眉を吊り上げ、心外そうに呟いた彼女の言葉に軽いトゲが生まれる。
「待て、だと？」
「……」
震えそうになる体を抑えてどうにか頷く。
――恐い。
けど、これだけは譲れない。
真っ直ぐに目を見つめて、口を開いた。
「ネギ君がどうして強くなろうとしているか。それを知らないとぼくにはそれを手伝うことは出来ません」
「ぼーやが強くなろうとしている理由？」
刺々しい顔つきから一転。今度は首をかしげて「そんなことを知

ってなんになる？」
「ネギ君が、ぼくにとっての友人になれるかを知りたい……それだけです」
未だに訝しげな表情を浮かべたままの彼女が、考えるように目を閉じて言う。
「……なれなければ？」
「あなたのお世話になるのは諦めます」
即答する。
「……」
「……」
沈黙がその場を包んだ。
ぼくは当然、急に押し黙った彼女の返答待ちだし、その彼女の後ろに控えている茶々丸さんはさっきからずっと静観を決め込んでいる。
この場における発言権は、完全に目の前の吸血鬼が握っていた。
沈黙が一体どれほど流れたんだろう？
多分、数秒。
彼女はゆっくりと口を開いた。
「ま、いいだろう。何に拘っているのかは知らんが、貴様がいようがいまいが私自身が困るわけでもないしな」
「ありがとうございます」
「ふん、礼を言われることはなにもしてない」
ソッポを向く彼女は、見た目どおり少し可愛らしく見えてしまって。

「ぼくは正志　明　（タダシ　アキラ）って言います。よかったら名前を教えてくれませんか？」

気付けば名前を尋ねていた。

だが――

「ふん、小僧の名前になど興味ない。それに私の名前を知りたければ誰かにでも聞け」

――いとも簡単に切り捨てられちゃった。

けど、あまりショックは感じない。

なんでだろう、と考えてすぐに思い当たった。

このやりとりは、彼女が初めてじゃない。

それはもう一年も前のこと。

まるで、初めてタケルにぃと出会った日のことを思い出してしまう。

ぼくが父さんに急かされて車に乗り込んだ瞬間に、頭痛が起きて半身にシビレが。前々からあった症状だったからすぐに治ると思って目を閉じて、そして次の瞬間には、気付けば不思議な部屋の一室にいた。

おかしな歌が始まると同時に異形の星人との殺し合いが始まり、結局そのときに生き残ったのがぼくと、そしてスーツを着込んでいた数人。

とりあえず、何が起こったのかよくわからなかったぼくは、その事態を理解するためにも生き残っている人に自己紹介を始めた。

「ぼくは正志　明　（タダシ　アキラ）って言います。よかったら

名前を教えてくれませんか？」
「……お前の名前に興味もないし、俺のことを教えるつもりも無い。ここの情報が欲しかったら俺以外の誰かに聞け」
「……」

うん、確かこんな感じ。
最初、すごくいやな気分になったことを覚えてる。それなのに気付けばぼくとタケルにぃは一緒に行動していた。

――もしかして、この人。ちょっとタケルにぃに似てる……？
いや、でも……うん、やっぱり……似てる？

パッと見て、恐い態度、感じ、表情、思いやりの無い率直な言動。
――信じられないけど、やっぱり似てる。
まさか、まだタケルにぃみたいな変人に出会えるとは思ってみいなかった。もしかしたらこの人も不器用だけど、心根はすごく優しかったり面倒見がよかったりする人なのかもしれない。

「……」

タケルにぃと似ていると一度認識しちゃったせいで、俄然、恐怖感が消えた。それどころかなんだか気持ちが高揚してくる。

「おい、何をボオっとしている」

いつの間にか無反応になってしまっていたようで、まるでタケルにぃみたいな真祖さんの言葉が飛んできた。

それに、ついつい「あ、うん」と素で反応。もちろん、慌てて言葉を付け足したけど。

「……じゃない、はい！　じゃ、早速ネギ君のところへ行ってきます！」

――ちょっとだけ待っててください！

言葉も適当に、そのまま走り出した。

「あ、おい？」

そんな言葉も聞こえてきたけど、とてもじゃないけど止まれない。

――さっさとネギ君がどうして戦っているのかを聞いてあの真祖さんにお世話になろう。

そんな想いが心の中を駆け巡っている。

神様に送られてやってきたこの世界。

この世界にきたのはそもそもタケルにぃがいるからだった。けど、今はそれだけじゃなくてこの世界に来られたことが嬉しい。

だって凄く楽しいから。最初は元いた世界とあんまり変わらないと思ってたけど、この世界はちょっと違う気がする。

小太郎君みたいにただ純粋に強くなることを目的として強くなろうとしている人がいるかと思えば、長瀬さんみたいにとても大らかで優しい人もいる。と、思ったらタケルにぃみたいに、強くてもの凄い変な吸血鬼もいる。

だから、きっとネギ君も。

凄く個性的で、この世界独特な、楽しくて優しくて強い人間なんだと思う。

――～～っ！　ワクワクする！！

はやる気持ちも抑えられず、駆け足でさっき小太郎君とネギ君が試合―でいいのかな？―していた場所へと向かう。

弾んだ息が、とても気持ちよく感じられて、自然と頬が緩んでいたと思う。

ガッと立ち上がり、バッと駆け出し、ワッと部屋を出て行った。
まるでそう表現するのが適切であるとも思えるほどの勢いで走っていったアキラの様子に、真祖の吸血鬼―エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは小首を傾げて、同じく驚いている茶々丸に

「……なんだあいつ。急に元気になったぞ？」

呟き、それに対して茶々丸も

「お手洗いにでも行きたくなったのではないでしょうか？」

と、トンチンカンな答えを返していた。
もちろん、アキラの心の移り変わりなどを分かるはずもないだろうが、普通はその顔色からトイレではない程度のことを察するくらいは出来る。
興味がない存在にはとことん無関心なマスターと、元々がロボであるため感情そのものに疎い従者のコンビなだけあって凄まじい適当な解釈、といえるかもしれない。
エヴァンジェリンも頷き、まるで納得がいったかのような顔で

「む、確かに慌てていたな……なるほどそういうことか」

だが、優雅に紅茶に手を伸ばし、口につけようとしたところでその動きはピタリと止まった。

「……」
「……？」

急に強張ったマスターに、従者もその動きに注視する。

「あいつ、トイレの場所は知っているのか？」

「！！」

弾かれたように顔をあげた茶々丸に、慌ててエヴァンジェリンが指示を出した。

「廊下で用を足されてもかわなん、急いであの小僧を迎えに行ってやれ！」

「はい、マスター」

先ほどのアキラよろしく、茶々丸もすかさず動き出す。部屋に残されたエヴァンジェリンは今度こそ紅茶を飲み、いやらしく微笑んだかと思えばぼそりと。

「これからあいつはションベンこぞうとでも呼んでやるか」

さすがは元懸賞金６００万ドルの真祖の吸血鬼。

寒気がするほどに残酷だった。

小一話「バグとイレギュラー」

そびえたった山々が幾重にも連なり、天高き雲にまで生え並んでいた。その頂きは白く染まり、溶け残った雪が切々と積もっていることが遠目に見ても一目で理解出来る。白き山頂とは対照的にその麓では深緑の木々が命を芽吹かせ、時折り吹きだす気まぐれな風にその音を乗せていく。

風に広がり、まるで終わりが見えないと錯覚してしまうかのような広大な森林地帯に、目を引く大地がそこにあった。一際に大地が盛り上がり、長き年月をかけて幾層をも刻んできたことを主張するかのように切り立つ高い崖。

誰もが写真に収めたくなるような荘厳な風景を背に、だがここに一切の無感動を持ってこの地にたつ２人の人外がいた。

片方は筋骨隆々の男。

褐色の肌に、一切の無駄が無く鍛え上げられた筋肉。その長髪が目にかからないようにするためか、バンダナを頭に巻き、快活に笑う姿が似合うであろう偉丈夫。

向かい合うのは、正にバケモノ。

頭部をすっぽりと覆った能面のマスク。巨木のように太く長い腕。黒くも禍々しく、体と下半身を覆う鎧のような軽装甲。腕が特に長く太いせいで見た目としてはある種アンバランスだが、そこから放たれるプレッシャーは伊達ではない。

褐色の偉丈夫の２Ｍにまで迫ろうかという身長に対してバケモノの方は１．７Ｍほど。

フと、バケモノがマスクの中から声を出した。
「御託はない……行くぞ。ジャック・ラカン」
グッと構え、そして。
にやりと笑った偉丈夫―ジャック・ラカンが呟いた。
「――来やがれ」

頂上の決戦が始まった。
先手はバケモノ。どこから取り出したのか、大きな腕の中から普通の人間サイズの腕から飛び出し、双銃身の奇妙な形をした武器を向け、トリガーを引いた。

「んおっ！？」

突如として襲い掛かる真上からの圧力に、ラカンがたたらを踏む。周辺の大地がラカンを中心とした直径２Ｍほどの円を描いて陥没。彼の体からは血が噴出し、膝をつく――が、それだけ。
さらに迫り来る圧力に、ラカンは「むん」と気合を入れて弾き飛ばし、さらには余裕をもって避け始める。
諦めたのだろう、バケモノが武器を捨てて普通の腕を引っ込める。そしてその一瞬を、この男は当然見逃さない。

「今度は……俺だ！」

１５Ｍは離れていた距離を一瞬で潰し、バケモノの背後に回りこむ。バケモノはそれに対応できず、慌てて振り返るがもう遅い。

「気合ナックル！！」

冗談のような名前だが、威力もそれこそ逆の意味で冗談の域に達していた。空に向かって突き上げられた拳の威力はバケモノを遥か上空、雲を突き抜ける位置にまで吹き飛ばした。

「へへっ、まだ全然元気とは……やるじゃねえか」

これはラカンの言葉。冗談のような威力を誇るあの拳を受けても、バケモノは未だに健在。拳をもろに受けた野太い右腕は既にいびつな形になってはいるもののダメージを受けたようには見えない。右腕の部分には普通の人間のソレも生えているからだ。

普通の、無傷の右腕から円筒形のまるで玩具のような銃を乱射。ギョーンと緊張感が抜けるような音が何度も何度も響く。

「なんだ？」

銃弾が飛んでくるでも、先ほどのように圧力がかかるでもない。

「まぁいい。こないならこっちから行くぜ」

首を傾げつつも、言葉を紡ごうとした時だった。

「アデア――ぶっ！？」

突如、ラカンの頭部が何かに殴られたかのように揺れた。

「んぶっ……ぶぶっ？！」

容赦なくそれが続き、計１２発。先ほどのラカンの拳が馬鹿げた威力というならバケモノのコレも、ついでに言うならば先ほど捨て

た武器も信じられないほどの威力を秘めている。
だが――
「っっっっ……さっきからおかしな技ばっかり使いやがって」
――効いた様子は無い。
「……」
いつの間にやら地に降り立っていたバケモノが無言で向かい合う。
「へへ……まさか俺とやりあえる奴まだがいたとはな……いいぜ、全力でやってやる！！」
「……！！」
両者がぶつかった。

木々が倒れ、山に穴が開き、崖が崩れ、雪が蒸発し、そこかしこに窪地が出来るほどの激しい戦いは続き、そして決着を迎えた。
「終わったか」
体中から血を流し、一本の腕をなくし、フラフラと。それでもどこか元気に歩くラカンと、地に伏して動かないバケモノ――いや、既にバケモノではなかった。１７０ＣＭ程度の身長とアジア系の、さらにいうなら地味な顔立ちである。年齢は１５、６だろうか。黒いコスプレのような奇妙な格好で、先ほどとは違い腕が一般的な人

間のソレと全く同じサイズ。

「……ったく、こんなガキに死にかけるとは……少し鈍っちまったか？」

ぶちぶちと呟きつつも、だがラカンのその表情はまるで晴れやか。

「ほれ、お前もまだ動けるだろ、立ちやがれ」

にっかりと笑って無事な方の腕を差し出す。

「……」

東洋人もほんの僅かにその顔を崩し、その腕をとった。

「お前、名前は？　俺をここまで追い詰めた記念だ、覚えといてやる」

そして、東洋人は息を吐き、自身の名を伝えるためにその口を開いた。

「――です」

太陽が雲の隙間からその顔を覗かせる。注がれる光は山から広がり、麓、森、崖。そして、当然のように2人にも。

まるで悪戯をするかのような一陣の風が吹き、少年の名を空へと舞い上げた。

小一話「バグとイレギュラー」（後書き）

次週から2週間更新になります

第4話「Ａｋｉｒａ　Ｔａｄａｓｈｉ　？」

小太郎とネギが修行を始めた場所へとアキラが辿り着いた時、丁度2人の闘いも終わりを迎えていた。

「へへ……俺の勝ちやな」

小太郎が足を引きずって、地に倒れたまま動こうとしないネギへとゆっくりと歩み寄っていく。

「今日は……師匠（マスター）との修行でヘロヘロだったからだよ」

息も絶え絶えになりながらも悔しげに反論するネギに小太郎も「へっ、ぬかせ」と一笑にふす。

「……」

「……」

沈黙。

お互いに一瞬だけムッとした表情を見せつつも、すぐにどこか満足げな笑みを浮かべる。険悪になりかけたその空気は、もつれることもなく綺麗に解けておちていく。

雰囲気が優しくなり二人の間に入るには今しかないというこのタイミングで。アキラは困ったように頬を掻いていた。

――逆に出づらいよ、これ。

確かに修行も終わり今や雑談を交わしているネギと小太郎。だがなぜか邪魔をしてほくしないような空気をアキラは感じていた。
それはもちろん単なる思い過ごしでしかないことは彼自身も理解している。いきなり話に入っていったとしても小太郎は普段どおりの態度だろうし、ネギはネギでネギらしい態度をとるだろう。

だが、それでも。
2人の間に入っていいものだろうか、という疑問を一度抱いてしまったアキラにその場に入っていく勇気はなかった。

――ううん……どうしよう？

困ったように頬をかいていた彼に、いきなり背後から声が。

「タダシ　アキラさん」
「っ！？」

考え事をしている最中、突然に声をかけられて驚かない人物はいない。慌てて振り向いたアキラの視線の先にいたのはエヴァンジェリンの隣にいた人物、絡操茶々丸。

「あ……えっと、茶々丸さん……でしたよね？」
「はい」

抑揚のない声で頷くサマは、まるで精巧に出来た機械人形を想像させる。つい訝しげな顔をしてしまったアキラに、彼女は当然のように伝達事項を伝えた。

「お手洗いならこちらですが」

もちろん、いきなりそんなことを言われて意味がわかるはずがない。

「……え？」

首を傾げつつ、それでもその場を動きそうにないアキラの反応を見た茶々丸はため息を放ち、突如としてアキラの手をとり、そのまま強引に歩き出す。

「え、いや……あの、ちょっと？」

訳がわからずになすがままになる少年に、茶々丸は「もう少しで着きますのでもう暫しの我慢をお願いします」と、やはり当然のように言う。

――お手洗い……なんで？　っていうか……もしかしてぼく、トイレに立ったと思われちゃったの？え、なんで？　いや、でもさっきお手洗いって言ってたし……やっぱりそういうこと？

やっと思考が追いついたアキラが、とりあえず誤解を解こうとして「ここです」という言葉とともに茶々丸が立ち止まった。

――いや、そもそもトイレに行きたいわけじゃないんですけど。

文句を言おうとして――

「よく、我慢しましたね？」

「……っ」

――言えなかった。

振り返った彼女の微笑みにはうっすらとした温かさが浮かび、なぜかそれがアキラの胸に突き刺さる。
別にトイレに行きたかったわけではない。ただ単に小太郎とネギに声をかけるタイミングを窺っていただけ。
それを言うはずが、なぜかアキラの口から漏れた言葉は薄く小さく「あ、ありがとうございます」と、ただそれだけだった。

「いえ、マスターはひねくれてはいますが基本的に優しい方なので、あまり遠慮はなさらないでください」
「……はぁ」
「それではまた後ほど」

流れるように、だが機械のようにキビキビとした動きで立ち去っていくその姿に、アキラは「どうもです」と、反射的に漏らした自分の言葉にすら気付かないほどに魅入られていた。

「……」

数秒ほどそのままその場で立ち尽くし、そして――

「――とりあえずせっかくだし」

引き寄せられるようにトイレに入るのだった。

だが、結果的にはこれが功を奏したことになる。

「あ、僕トイレに行ってくるね」
「ほな先に行っとくわ」
「うん、じゃあまた後でね」
「おう」

廊下から2人の少年の会話がアキラの耳に飛び込んできた。

――今の、小太郎君と……？

元いた世界で天才と呼ばれていた彼は、ついに。

「「あ」」

この世界の天才と出会った。

気付けば空が紅く染まり始めていた。
地平線の狭間にて、それでも万物を照らそうと燃える太陽は徐々に高度を下げ、その代わりのつもりなのか、月がうっすらと空にその姿を見せ始めている。

「へ～、アキラ君は長瀬さんとコタロー君に師匠（マスター）を紹介してもらったんだ」
「うん。まさかエヴァンジェリンさん（真祖の吸血鬼）を紹介してもらえるとは思ってなくて緊張したけど、話してみたら案外優しそ

うな人で、ちょっとホッとしてるんだけどね」
「うんうん、分かるよ。僕も初めて会ったときは殺されるかと思って恐かったんだ～」
「あ、ネギ君も？」
「それはそうだよ。だって――」

一拍の間。

「「――真祖の吸血鬼……なんだもんなぁ」」

意図したわけでもないのに全く同時に声が漏れ、しかも台詞すらも同じだったことで驚きに顔を見合わせ、一秒ほどそのまま見つめ合っていたかと思えば、すぐさま二人して。しかもまたもや同時に。

「「ぷっ」」

まるで何かに堪えられなくなったかのような声を漏らし、次の瞬間には「「アハハハ」」と朗らかに笑い出すのだった。
紅く差し込む光が、2人の影を一層に伸ばし、まるでそれ自身が意思を持つかのように形をかえつつも、本人達の影として追従していく。

トイレで出会った少年達はいつの間にか意気投合して、廊下を歩いていた。余談だが、アキラがエヴァンジェリンの名を知ったのも、ネギに教えてもらったからである。
既に夕暮れ時ということもあってか、アキラも昼間のようにぐったりとした様子は一切無い。むしろ、これからが彼にとっての本当の時間帯。顔は青白く相変わらずだが、その姿から感じられる力強さはネギと比べても遜色のないものだった。

「……」
「あれ、どうかした？」
いつの間にか真剣な顔になって影を見つめていたアキラに、ネギが声をかけた。
「あ、いや。なんでもないよ」
アキラが首を振って否定し、ネギも「そう？」と大して気にもせずに歩き出す。
「にしても、アンタも真祖の吸血鬼だとはなぁ……」
二人から会話が消えた丁度その時を狙っていたのか、ネギの肩にのっていたオコジョ―カモ―が不意に声を出していた。
「確かにタダモンじゃねぇ雰囲気は出てたが……」
「ああ、うん。僕もそれは驚いたよ。何となく真祖って世界に一人しかいないって思ってたから」
ネギとカモの言葉に、まさか「神様にチョチョイとやってもらったんだ」とも言うわけにもいかず「ハハ」と乾いた笑いでそれを誤魔化す。とりあえず話題を変えようと「そういえば」と、元々聞くつもりだった話を切り出した。
「ネギ君はなんで、こんな苦しい修行をしているの？」
「え？」
いきなりの問いにネギは戸惑いの声をあげ、カモも同じように首を傾げる。

「小太郎君はただ強くなりたいからって言ってたけど、まさかネギ君も同じとも思えないし……どうして？」

それはつまり『なぜ戦うのか』という、ネギが強くなろうとすることへの疑問。だからこそアキラはただ視線を注ぎ、返答を待つ。

ネギは少しだけ言いづらそうに目を伏せた後、意を決したかのように息を吐き、真摯な瞳でアキラの視線に答える。

「立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指してるんだ」

マギステル・マギについては勿論、アキラも知っている。だからそれに対してではなく、別の事柄への疑問をぶつける。

「それで？」

まさか、その続きを聞かれるとは思ってもいなかったネギは「……え？」と自然に聞き返していた。釈然としない様子のネギに、アキラは言葉を重ねる。

「マギステル・マギになるために修行しているのはわかったんだけど……それでもしソレになったとしてネギ君はどうするの？」

「どうするの……って」

アキラの様子が先ほどまでとは異なることに、ネギもカモも気付き始めていた。ついさっきまでは朗らかで笑っていた彼が、いつの間にか平然と無表情で。まるでネギが尊敬するあの人物のような顔をしていた。

「色んな人の力になれたら……って思ってるんだけど」
「人の力になるって、なに？」
「だから……困っている人を助けたり――」
「――その強くなった力で？」
「う、ん――」

どこか自信なさそうに頷いたネギが視線を漂わせ、だが次の瞬間にはアキラを見つめ返し、今度は自信をもって答えていた。

「――そうだよ？」

ネギの頭をよぎる、学園祭での超鈴音との別れる時の会話。
結果的にはネギ自身は超鈴音の敵に回らなかったものの、一週間後に飛ばされた世界で起きていた『あの人の件』がなければきっと超鈴音と敵対していたであろうネギには、色々と考えさせられる別れとなっていた。

超鈴音の計画を阻止していたかもしれない自分。キレイなままではいられない。そもそもキレイでいられるはずもない。
立ち止まるわけにはいかない。前に進まなければいけない。
だからこそ、よくわからない小さな心のしこりに囚われることなく、せめて自信をもって進まなければいけない。
だからこそ、ネギは胸を張って向けられた視線に答えた。

だが――

「――そっか。じゃあね。ネギ君」

無表情ではない、冷めた顔。そのまま別れるつもりなのか、アキラは方向転換。来た道をそのまま戻り始めた。

「え……え？」

訳がわからずに戸惑いをみせるネギが慌ててアキラの肩を掴む。

「……なに？」

ほとんど別人のような態度をみせる彼に、ネギはよくわからずに尋ねる。

「ど、どうしたの？」

「何が？」

「だって明らかに様子が変になったっていうか……」

「そんなことないと思うけど？」

明らかにおかしい態度をしておいて、さすがにそれはない。ネギが「そんなことあるよ！」と反射的に答えたところで、アキラが大仰にため息を放ち、口を開いた。

「じゃあ、はっきり言うけど」

いったん言葉を区切ってからネギとしっかり向き合う。

そして。

ばっさりと、単刀直入に――

「ぼくはキミが嫌いになったよ、たった今」

――言い放った。

「へ？」

ついさっきまで仲良く談笑していたとは思えない言葉だった。まるで冗談とでも考えたくなるだろうが、アキラの冷たい表情からもそれがとても冗談ではないことが察せられる。

突然できたと思った友達にいきなり嫌いだと宣言されたネギは肩をビクリとさせ、それでも意味がよく理解できないのか、首を傾げた。

「な、なんで……？」

「だって、結局はキミは力を振るうために強くなろうとしているんでしょ？」

その言い回しには、ネギが人の助けになりたいという意思があることを含まれていない。もしも第三者がいれば首をかしげていたことだろう。もちろん、ネギも首を横に振る。

「ち、違うよ。僕が修行してるのは力を振るうためじゃなくて、人の助けに――」

「――同じだよ」

ネギの弁明に、アキラはやはり冷たく首を振って言葉を続けた。

「人のために強くなって、結局はそれによって得た強い暴力によって物事を解決するんでしょ？　じゃあ力を振るうために強くなるのと同じじゃないか」

「違う！　僕はそんなつもりで修行してるんじゃないよ！」

「違わないね。小太郎君みたいに目的がただ自分を鍛えることでもない、『あの人』みたいにただ生きるために強いわけでもない。キミが他人のために力を振るうなら、それはもちろん力を振るわれる

他人だって存在することになる」

その言葉に、グッと息を呑んだ。

ネギはそれを既に知っている。己の正義が存在すれば相手の正義も存在している。己の正義は相手の悪で、相手の正義は己の悪で。

そんなことは学園祭で学んでいた。

アキラの指摘はもちろん、正しい。

ネギもそれで悩んだのだから。今も、少しだけ悩んでいるのだから。

だが、そんなネギの気持ちを知るはずもない――いやおそらく知っていても――アキラは、言う。

「結局、キミは暴力を振るために強くなろうとしているんだ」

――キミに何がわかるんだ？

ギリと歯を食いしばる音が小さく響く。が、アキラは気付かない。

「自分のためじゃない、他人のために使う力なんて最低で、偽善で、卑怯だよ。本当はただ他人を傷つけているだけなのに。キミは自分が暴力を振るうことを守られる人間のせいにしているだけだ」

――勝手に決めないでよ。

拳をギュッと握り締めて、ただ耳を傾ける。

「キミとはいい友達になりたって最初は思ったけど、願い下げだよ」

限界だった。

そのまま立ち去ろうとするアキラの背中に「勝手なことばっかり言うな！」

「……？」

アキラの足が止まる。

「僕は進むって決めたんだ。僕にとっての正義が相手にとっての悪であっても、僕はその悪をやりきるって決めたんだ。それはアキラ君の言うとおり最低で、偽善で、卑怯なことだと思う。だけど、僕はそれを誰かのせいにするつもりはないよ！」

「……へぇ」

アキラの小さな声が漏れたが、それだけ。2人の視線がぶつかり合って、火花を散らす。一触即発のこの空気に、カモはそれをはらはらと見つめることしかできない。

「「……」」

数十秒ほどの沈黙が流れ、そして。

「じゃあ、キミ……いや、ネギ君はどうし――」

アキラが再度、口を開いた時だった。

「――なかなか面白そうな会話をしているじゃないか？」

言葉を割って入ってきたのは、誰よりも自身を悪と認め、それを肯定するこの異空間の主。

「ま、師匠（マスター）！？」

「え、エヴァンジェリンさん！？」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだった。
慌てる二人に、エヴァンジェリンは悠然と現れ、アキラを見つめる。顔には笑みが浮かんでいるが、その空気が平常のものではないことをエヴァンジェリンの常を知るネギは理解し、アキラも持ち前の勘のよさでそれを察知していた。

「な、なんですか？」

見つめられて内心で恐怖しながらも、エヴァンジェリンの視線にアキラが尋ねた。だがもちろん、その質問に答えるほど彼女は優しくはない。その問いを無視し、ネギに声をかける。

「おい、ぼーや」
「は、ははは い！？」

体をビクリと震わせ、背筋を伸ばしたネギに、「お前は先に部屋で休んでいろ」

「え？」

おもいもかけない言葉につい聞き返し、だがその危険性に気付き「はい、わかりました！」と、一瞬だけアキラに視線をおくって走り去って行く。
場にはただ、吸血鬼が二人残された。

大きく息を吐き出し、廊下の壁にもたれかかった。思い出すだけでも震えそうになる体を抱え込み、それでもやはり2人の吸血鬼、

特についさっきまで口喧嘩をしていた彼のことを考えてしまう。
「アキラ君……大丈夫かな～？」
その呟きに反応したのはもちろん、肩に乗っていたオコジョのカモ。
「アニキ？」
不思議そうな顔で首を傾げ、半ば呆れ顔でネギを見つめる。
「さっきはあんなに喧嘩してたってのに」
「うん、そうなんだけどね」
まるで悪戯をしたかのように舌をちょこんと出して、ネギも苦笑してみせる。
「なんていうかさ。ああいう風にいきなり言われて、やっぱり僕もムッとしちゃったんだけど……でも、さ。カモ君？」
一旦、言葉を区切ってから、どこか楽しそうに微笑む。
「なんっスか、アニキ」
「うん……よく考えたらああいう風に言ってくれる友達、僕にはいないなって」
「え」
カモの声が、小さく漏れた。
「そんなことは――」

――ない

とはいえなかった。

確かにその通りなのだ。そもそもネギの周囲にいる人間は、どうしてもその環境から基本的に年上しかいない。

唯一、小太郎が同じような年齢だが彼はあまり難しいことを考える性分ではない。ネギが抱えるような悩みを悩みとしてすら認識しないような、竹を割ったような性格をしている。つまり、日常や戦いに関する会話・喧嘩などはあっても、想いに関しての会話はネギと小太郎の間にはない。

気をつかうこともなく、言いたいことを言い合い、同じように戦うことに意味を求めているような人間。

それが、ネギがアキラに抱いた感想だった。

会って初日からいきなり仲良くなって喧嘩して、別れ際はたしかに険悪なままだったが、それでもネギにとってアキラという存在は確かに、また新しいタイプだった。

「まぁ、やっぱりまだちょっとだけ嫌な感じはあるんだけどね」

困ったように言いながらも、やはり楽しげ。

「ちょっとだけ……って」

「ん？」

――あっちは明らかにそんなレベルじゃなかったんじゃ？

言いたくなる気持ちをぐっと抑えこむ。

「……」

「カモ君？」

黙り込んでしまったカモは「ま、アニキがそれでいいなら、オレっちもそれでいいんだけどな」と、相変わらずのお人よし思考を発揮するネギに、僅かな呆れと尊敬を抱きつつも呟くのだった。

第5話「Ａｋｉｒａ　Ｔａｄａｓｈｉ　？」

大きな爆炎が舞い上がり、ソレとともに生じた煙が視界をゼロにする。どうすればいいかもわからず棒立ちになった瞬間、その危険性を思い出して慌ててしゃがみこんだ。

と――

チリと、短い黒髪が数本、宙に舞った。もしも数瞬でも反応が遅れていたら、きっとぼくの首が飛んでいたことだろう。

「……っ」

ゾッとする。

――き、聞いてないよっ！

喚きたくなる自分をどうにか押さえ込んで、逃げるために脱兎のごとく駆ける。

「っ！」

途端、体がまるで何かに縛られたかのように拘束された。

「どうした！　このままではお前も死んでしまうぞ？」

エヴァンジェリンさんの声が響く。

そう、今のぼくはエヴァンジェリンさんに殺されかけようとしていた。

「ど、どうしてこんなことを！？」

「言っただろう！　お前がぼーやに言ったことをおまえ自身が言う資格をもっているかどうかを見極めるためだと！！」

「だから、それでなんでこんなことを！！」

エヴァンジェリンさんの手によって結集された、５Ｍ以上はあるだろう巨大な氷の魔法玉がいつの間にか迫っていた。

原則、魔法には呪文と始動キーというものが必要だが、呪文に関しては練習とその魔法の規模次第で簡略も可能となる。

ただし、始動キーに関してはまた勝手が違ってくる。

始動キーの簡略も練習によってある程度は左右される。が、それはある程度であって決してその魔法を練習すればいいというものではない。それよりももっと大事な要素、ただ純粋に使う魔法の規模とその使い手の力量がものを言う。

つまり熟練な使い手になればなるほど、その使い手にとっての簡単な呪文程度ならば始動キーすらも唱えずに魔法を発動することができるということになる。

そして、呪文どころか始動キーすら唱えないという、その完全な無詠唱で発動させた魔法の規模が、あまりにもでかかった。

――こ、この規模を無詠唱で！？

拘束されていた体を動かそうと、その見えない何かを強引に振りほどき、どうにか脱出。すぐさま大地を蹴って空中に飛び上がることによってその魔法球を辛くも避けることに成功する。

ぼくの筋力が真祖としてガンツスーツ以上の力を発揮することが出来たからこその脱出だった。

「……っていうか、どのアタリが力を抑えつけられてるの？」

小太郎君に聞いた話だと、呪いかなにかのせいでほとんどの力を発揮できないとか聞いてたんだけど、今のを見ている限り嘘臭いとしか思えない。

「ほら、よそ見していていいのか？」

「っうそっ！」

しつこいようだけど、ぼくはガンツスーツ以上の力で空に跳ね上がった。それはもう凄まじいほどの速度で。

なのに、気付けば目の前には彼女が。それも魔法なのか、手にまとった光が刃のように鋭く纏われている。

「そら」

「っ」

回避しようと体を捻る。けど――

――間に合わない。

もろに直撃した。

切り裂かれた胸から血が激しく吹き荒れる。切りつけられたせいで落下する体を空に浮き上がらせる停止。

痛みで体がズキズキするけど、そんなことを言っている場合ではない。どうにかすぐさま体を再生させた。

ぼくの動きに、エヴァンジェリンさんは笑みを浮かべて口を開く。

「ほう、貴様。やはり何度か戦いを経験しているようだな？」

「……」

それはもちろんのことだった。ガンツのミッションに呼ばれるよ

うになってから一年間を生きてきた。
もちろんタケルにぃがいたから生きて来られた僕だけど、大怪我をしたこともあれば実際に死んだことだってある。
つまり、胸を裂かれる程度の痛みで我を忘れるようなことはない。
――このままじゃ殺されちゃう。

逃げようにも、ここがどこだかわからない。エヴァンジェリンさんに見つめられたと思ったら気付けばこの変な闘技場らしき場所にいた。せめて身を隠す場所さえあればいいのに、それもない。
いや、そもそも逃げるだとか隠れるだとか。そんなことが通用する相手ではない。

――ど……どうすれば？

本当は答えは出ている。実に簡単な答えが。
闇に溶けても一瞬で見破られたし、彼女の力は身体強化の魔法のせいか、ぼくよりも強いみたいだった。
逃げ場は無い。逃げ切れるはずも無い。説得だってきっと無理。そもそもどうして襲われているかさえよくわからない。
いわゆる絶望的な状況。きっとタケルにぃならそれでも諦めない。というか寧ろ生き残る。けど、ぼくには無理。同じ真祖の吸血鬼で、６００年も先輩で魔法も使えて。そんな人にぼくが勝てるはずがない。

「……だめだ、これ」

息を吐き出して、大地に降り立つ。
エヴァンジェリンさんは首を傾げて、同じようにぼくの前に降り立った。

「なんだ、戦わないのか？」

その疑問は当然かもしれない。

ぼくも全然弱いとはいえ真祖の吸血鬼。まだまだ粘れるはずの能力は秘めている。それが急に、傍から見てもわかるほどに明らかに諦めたんだから。

だけど、その全く警戒すらしない様子に、ちょっと笑ってしまう。まぁ、警戒する必要がないっていうのが一番の要因なんだろうけど。

「……何がおかしい」

不快そうに眉を吊り上げる彼女に、ごくりと唾を飲み込む。

「い、いえ、何でもないです！」

その言葉に、エヴァンジェリンさんは「ふん」と息をつき、言葉を続けた。

「お前、さっきぼーやに言っていたな」

「……え？」

「守るために強くなろうとするのは、結局暴力を振るうために強くなることと同じだと」

ああ、そのことか。

「言いました」

いつ殺されてもおかしくないこの状況で、自然と体が震える。だけどぼくはちゃんとエヴァンジェリンさんの目を見つめる。

それは、それだけはぼくの揺らいではいけない想いだから。
「強くなろうとする理由が他を守るためだから気に入らない。それは他を傷つけることだから気に入らない。そういうことか？」
「はい」
エヴァンジェリンさんの不快そうな顔が、より険しく、鋭い気配を帯びていく。
「だったらなぜ、お前は生きている？　生物は生きているだけで他を傷つけている。お前がぼーやに言ったことは、ぼーや以上に偽善で、我侭なただの夢物語でしかないこともわからんか？」
そう、そのとおり。
人は生きるだけで何か傷つける。それは絶対で、生物である以上仕方のないことだといえる。だけど、エヴァンジェリンさんは一つだけぼくのことを勘違いしている。
「ぼくは誰も、傷つけませんよ……物理的な意味においては」
「なんだと？」
一気に悪意の塊が噴出した。
それだけでおしっこを漏らしたくなる。
だけど、これだけは譲れない、これを譲るわけにはいかない。揺らがず、揺れず、曲がらず、ただひたすらに真っ直ぐと、タケルにいのように。
「貴様、ふざけ――」
「――ぼくはそうやって生きてきました」
「……なに？」
「何があっても、何が起きても、どうなったって。絶対に誰かを傷

つけるような、誰かの命を奪うような生き方だけはしません」

ぼくの言葉に、迷いは無い。

「ぼくがしっかりとした自我をもったのはまだ0歳のころ。まだ乳離れすらできていないときです。その時から本に興味をもち文字を勉強していました。色んな本を読み、そして知りました。食事、服、住居……ただ生きているだけで、人は数え切れないほどの命を奪う」

「それを知って、貴様はなぜ今も生きている？」

今度は探るような目つき。ちょっとだけ不思議そうな顔をしているのが珍しくて印象的だったりする。

だけど、その通り。

服や住居はどうにかなるといえないこともない。人工物だけで構成された建築物や服。けど、食事だけはどうにもならない。食すことは即ち命を奪うこと。だけど、人間は何かを食べなければ死ぬ。

お父さんやお母さんに懇願されて魚を食べようとした時は、口に入れようとした瞬間にゲロを吐いてしまった。

肉も当然、野菜だって一緒だった。結局は生きている植物だったことには変わりはないからだ。生きていた何かを食べることは不可能だった。本能が拒否をする感じというしかない。

つまり、ぼくは0歳のころに自我をもてるほどに発達した知性をもって生まれた。世界に愛されたかのごとく。

だけど、生きることそのものが不可能な体質だった。まるで世界に拒絶されたかのように。

――ぼくは世界に愛されて嫌われた異端児だった。

「だから、ぼくは落ちてきた木の実を食べて生きてきましたよ。り

んごとか、そういったフルーツとか栗とか。これならぼくの本能も命を奪っているとは思わなかったみたいです……実際に植物から落ちた実が生きているという科学的根拠もなかったことも幸いしてました……まぁ味に関してはさすがにアレでしたけど、死ぬよりはまだ、ね」

「……」

考えるように黙り込んでしまったエヴァンジェリンさんに、言葉を続ける。

「もちろん、人は生きているだけで何かを傷つけている。それはある意味仕方のないことですから、それで誰かを責める気はありません。ただ、ぼくが物理的に傷つけることを絶対にするつもりはないというだけです。他人が他人を傷つけるための力を手に入れようとすることだって別にぼくにとってはどうでもいいことです。」

「どうでもいい？」

「はい」

「だったらぼーやにとった態度はなんだ？　もしも本当にどうでもいいならあのままガキの付き合いを続けていたはずではないのか？」

ガキの付き合いって……もう少しオブラートに包んで欲しい。いや、もちろんそんなこと言葉には出来ないけど。

まぁ、それはともかく。エヴァンジェリンさんの言うとおり。

少しバツが悪くて、俯いてしまう。うん、これに関してはぼくも少しだけ反省している。

「いや、それは……その、なんていうか。最初ネギ君とあんまりにも話が合って、それでちょっと期待しすぎたって言うか。あんまりにもがっかりしてつい感情的になりすぎたっていうか……」

「……」

呆れたような目をされてしまい、居心地がわるい。

「でも、ネギ君はネギ君で色々と考えてるみたいで、少しだけ凄いなっていう風にも思ってるんですよ？」

「凄い、だと？」

「自分を悪だとわかっていても突き進むんだって言った時の顔が、なんか大人だったっていうか。きっと色々と悩みながら生きてるんだろうなってちょっと思ったんです」

今度は探るような顔をしている。コロコロと変わるエヴァンジェリンさんの表情に、もしも今が殺されそうに無い状況ならばきっと笑ってしまっていただろう。

「お前の言いたいことは分かった。『何も傷つけない、何も殺さない』。確かに聞こえはいいが、それの難しさを、まだまだこぞうでしかないお前が本当にわかっているとは到底、信じられんな」

「……」

当然だ。

誰に言ったって信じてもらえるようなことではない。

「ぼくだってぼくほどに歪んでる存在はないと思っているくらいですよ。だけど、これは絶対に。何があっても曲げません」

「絶対に……だと？」

にやりと笑って、エヴァンジェリンさんが口を開いた。

あまりにも生意気な小僧の言葉に、ついつい言ってしまった。

「だったら、命をかけてみろ」

「……いのち？」

「いいか、お前がもしも私に一撃でも入れてることができたら生かしておいてやる……サービスだ、掠る程度でも構わんぞ？　だが――」

言葉を区切り、じっくりと顔を見つめる。

いかん、口元が勝手に緩む。

「――ソレが出来なければお前は死ぬことになる」

ションベンこぞうの頬がヒクと震えた。

「いいか、私を殺す気でこい。でなければお前程度では私に掠ることすらできんぞ？」

こいつは『絶対に他人を傷つけない』と言い張っている。だがそんなことが、そんな生き方があるはずがない。こうやって、死と引き換えにすればどうせ本性もすぐに明らかになるだろう。

――その時はどうしてやろうか。

私のどす黒い空気を察したのか、こぞうは顔を真っ青にさせて、だが次の瞬間には予想外の行動に。

「……ふぅ」

震えた息を吐き出したかと思えば目を閉じ、諦めたかのごとく地面に座り込んだ。

「……どういうつもりだ？」

「いや、だって。あなたを傷つけるとかどうせ無理ですもん。そりゃ、ぼくもあなたを本気で殺す気になって粘れば掠るとか触れるくらいなら出来るかもしれませんけど……他人を傷つけるような生き方は絶対にしないってさっきいったばかりじゃないですか」

――こいつ……本気か？　単なる偽善者気取りのガキではないのか？　いや、それとも……どうせ殺されることは無いとでも思っているのか？

だが、流れる思考は、すぐに外れていることがわかった。

「……」

黙りこくって目を閉じるションベンこぞうの体はよく見れば震えている。顔もやはり真っ青なまま、息も荒い。

本気で死に恐怖し、それでも傷つけるくらいなら死んだほうがマシだと思っているのかもしれない。

――だが、もう少しだけ。

「ふん、つまらんな。なら死ね」

「っ」

唇を噛み締め、目をギュッと閉じる。だというのにその場から逃げ出す気配は無い。心のどこかでそれには感心してしまうが、もちろん容赦をする気はない。

「ＬＩＣ　ＬＡＣ　ＬＡ　ＬＡＣ　ＬＩＬＡＣ」

まだ私は信じない。

どうせ土壇場になれば逃げ出すに決まっているのだ。こんなこぞうの『絶対』など、所詮はその程度の想いでしかないはず。

――じっくりと恐怖を煽ってやるさ。

「契約に従い（ト・シュンボライオン）　我に従え（ディアーコネートー・モイ・ヘー）　氷の女王（クリュスタリネー・バシレイエ）　来れ（ゲネーテートー）」

わざとらしく、たっぷりと詠唱の長い呪文を唱える。

「さぁ、いくぞ？」

「……」

もはや震えるのみで完全に無反応。だが、それでは意味が無い。こぞうの意思など無視して強制的に目を開けさせる。

「え……ええ？」

誰に触れられるでもなく、自らの意思に反して勝手に開いた瞼のせいで嫌が応にも私の魔力の噴出に気付き、顔を引きつらせた。

「永久の（タイオーニオン）　闇！（エレボス）　永遠乃氷河（ハイオーニエ・クリュスタレ）！！」

こぞうの周囲を巻き込み、空間ごとの全てが絶対零度に包まれる。

――どうだ？

逃げる様子も見せず、ただその場にうずくまって呪文を享受していた。徐々に体が凍てついていき、そして呟いた。

「ごめん、タケルにぃ」

「……タケル？」

聞き覚えのある名が私の耳に入った。

戸惑いそうになるが、それは後回しでも構わない。気を取り直して、ジッとこぞうの完全に凍りついた姿を見つめる。

全く逃げようとした様子がなかった。動こうとした気配すら、ない。

確かに恐怖を覚えていたはずだ。なのに、結局こいつは最後まで私に敵意をぶつけようとすらしなかった。

「……ちっ」

――気に入らんな。

こぞうの分際で、死の恐怖を乗り越えている。それが、まだあいつのように強い男ならば何もこうやって苛立つことはない。むしろ面白いとも思える。

だが、目の前でただただ凍り付いているこいつは、違う。

力を使いこなすことすら出来ていないことや太陽に弱いなどの弱点も残していることからわかるが後天的の真祖で、まだまだ生まれたての真祖だが、それでもそんな欠点は何もせずとも生きているだけで克服されていくことになる。

つまり、人の強さを完全に超越している真祖の吸血鬼で、しかもそれとは別に筋力も魔力も常人のソレを遥かに超える資質を持っている。

なのに、この体たらく。
最初から暴力を嫌い、他人を傷つける力すらも嫌う。非暴力ぶりは徹底的で、現在の人間の食事すらも拒絶するほど。最早完全といってもいいほどの非暴力主義。なのに、他人の暴力を否定しないという完全な矛盾。

――いや。

矛盾ではない……か。
このこぞうの非暴力はただ、己が絶対に他人を傷つけない。それを守れるならば他人がどうなっても構わないという、暴力的なまでに自分勝手な非暴力主義。決して暴力そのものを否定しているでのはなく、ただ単に己が暴力を振るうことのみを否定しているだけ。断じて平和主義などではない。

単なる甘ったれでもなく、夢想家でもない。己のエゴにただ従って生きるという、ある種人間らしいといえば人間らしい生き方。
その生き方の特殊性は別として、それを自分でもわかっている節があるから、尚のこと性質が悪い。
それが、こいつ。確か名前は正志　明。

気に入らない。それも圧倒的に気に入らないが、ただし面白い。自分勝手で自己満足な生き方だが、こんなこぞうの癖に確かにこいつの性格には筋が通っている。

「ふん」

小さな息とともにため息をはく。軽く指を弾き、『幻想世界（ファンタズマゴリア）』を壊す。世界が現実のソレへと変わり、一瞬前まで凍り付いていたこ

いつも元に戻る。
先ほどまでの出来事はいうなれば全て幻。でもなければ今の私に、先ほどのような大規模な魔法は唱えられない。
幻の中とはいえ完全に凍り漬けにされたのだ。現実においても肉体はともかく、精神性において廃人と化していてもおかしくはない。
まぁ、あの魔法は本来ならあの後に詠唱を重ねて一時的な凍り漬けから永久冷凍にしたり、砕いたりする魔法。それを最後まで発動させなかっただけ、マシなほうだろう。
「おい、いつまで立ち尽くしている？」
なかなか動こうとしないぼーやに声をかける。だが
「……」
返事がない。
「……おい？」
「……」
それどころか、動く気配すらない。
――まさか死んだのか？
最悪の可能性が脳裏をよぎる。慌てて顔を覗き込み、そして気付いた。
「……こいつ」

――どうりで動かないわけだ。

「……スゥ……スゥ」

寝ていたのだから。

――殺すか。

すかさず僅かな魔力をかき集め、手を刃に。そのままこの私に少しでも動揺をさせたこいつの首へと振るった。

胴と離れた首が地に落ちて、ごろりと転がった。大量の血しぶきが舞い上がり視界を遮ったと思えば、別々にあった頭と体が闇に溶けて落ち、そして再び形を成したときには見事に元通りの姿を形成していた。

「これでも起きん、か」

首を刎ねてやったというのにスヤスヤと眠っている姿に、怒りどころか呆れを感じてしまう。そして僅かな驚きも。

どうもこいつの肉体は痛みに慣れ過ぎている。眠っていようがあれで死ぬはずがないのは当然だが、それでも目を覚まさないのは異常と言ってもいい。

吸血鬼になろうが痛みはある。再生しようが、切断されたときにはある程度の痛みは感じるはずだ。

それなのに、目を覚まさない。

全くもってありえない。

だが、そんなありえない現象が起きている以上は仕方がない。これでも起きないなら、無理矢理は無理そうだ。

――仕方ない。

「……おい」

「はい」

後ろでじっと控えていた茶々丸が、すかさず反応した。

「こいつの介抱をしてやれ、それと目が覚めたら私に知らせろ」

「……」

まるで文句でも言いたげな表情で返事もせずにじっと佇む茶々丸に、眉を吊り上げる。

「なんだ？」

「いえ、了解しま――」

「――いいから、言ってみろ」

従者として優秀だといっても過言ではない茶々丸が少しだが返事をしなかったのだから、何もないはずがない。

茶々丸を見ていると最近は面白い。以前はただ従順なだけだったが、ここのところ妙に情緒的な感情を覚えたのか、私の命令にすら戸惑いを見せたり、反抗さえすることもある。

「……ですが」

「言え、命令だ」

あくまでも渋ろうとする茶々丸に、だがマスターとして命令を下す。もちろん、本気ではないがこの実直な従者にはそれでも十分だ。

「……」

それでも躊躇いを見せるが、私が頷くとさすがに諦めたらしく「では」と、口を開いた。

「正志　明さんも真祖の吸血鬼とはいえ、さすがにやりすぎではないでしょうか？」

それはやはり、最近の茶々丸らしい言葉だった。ついついにやけてしまった私に、何を勘違いしたのか、切実な表情になってさらに言う。

「幻想世界（ファンタズマゴリア）でも、最悪の場合は絶命していたのでは？」

――見ていたのか……全く。

最近のこいつは面白い。時々面倒くさいこともあるが、それはそれでいいと思っている。少し面倒くさい時はからかって遊んでやれば問題はない。もちろん、今回も。

「お前、あいつの影響を受けすぎだ」

「なっ」

先ほどまでの、困ったような表情は消し飛び、

「いえ別にそそそんなはずが……だだだ、だいいち私は機械ですし！　そそそそれにそも、そもそも、そもそもネギ先生の影響を受けたわけでは――」

顔を真っ赤にさせて、そこらへんの人間などよりもよっぽど素直な反応を見せる。

「おや？　別にぼーやとは言ってなかった筈だがな……」

わざとらしく首を傾げてやる。

「！　……あぅう」

途端にしょぼんとなった。

――まぁ、こんなとこか。

何かを妄想しているのか、赤い顔のまま黙りこんでしまった茶々丸に背を向ける。

「茶々丸」

「は、い！？」

声が裏返った。葉加瀬聡美の仕業か、それとももっと別の要因かはわからんが、正直いって面白い。が、少しだけ真面目なトーンになって、さきの質問に答えておく。

「こいつもまだまだガキとはいえ、一応は真祖の吸血鬼……それも後天的の、だ。あの程度で精神が崩壊するなら、それこそ吸血鬼にされた時に既に崩壊しているさ」

言い捨て、そのまま部屋への足を向ける。

「はい」

茶々丸の声がなぜか柔らかく聞こえたのは、おそらく気のせいではないだろう。

「う……ん」
「目が覚めましたか？」
いきなりのドアップで現れた茶々丸の顔に、アキラの目が驚きに見開かれた。慌てて身を起こし、その途端に首にはしった激痛に顔を引きつらせつつも、周囲を見渡す。
「状況はわかりますか？」
「あ……えと、はい。そうですね。とりあえずエヴァンジェリンさんに殺されなかったことだけは理解できます」
「その通りです」
抑揚の無い返事を聞き流し、アキラは自分の状況を確認する。
――ベッドに、茶々丸さん……っていうかどうなったんだろ。すごい魔法を撃たれたところくらいしか覚えてないなぁ。
どうなったのかを思い出そうとするが、どうも思い出せないようで軽く頭を振る。その様子を見た茶々丸が状況を説明しようと口を開いた時、別の声が彼にかけられた。
「やっと目を覚ましたか」
「っ！？」
背筋を震わせ、反射的に体を緊張させる。いつの間にか茶々丸の横に立っていたエヴァンジェリンが、ソッポを向いたまま言う。
「お前のそのこだわりは気に食わん」
唐突すぎて一瞬だけ何を言われたのか、思考が追いつかなかった

アキラだが、すぐに気付いたらしく、若干だが緊張気味な面持ちで彼女の顔を見つめる。

「だがお前のその筋のとおった自分勝手な性格は面白い」

「え？」

緊張の表情から、気の抜けたような表情へと変化。さらにはなぜか茶々丸に目を配り、最後にエヴァンジェリンに視線を送る。

それを片目で見やりつつ、エヴァンジェリンは腕を組み「ま、いいだろう。少しくらいなら面倒をみてやろう」

「！」

気の抜けたソレから驚きのソレへ。金魚のように口をパクパクとさせたかと思えば、今度は「あれ？」と不思議そうな顔に。

「ぼく、結局エヴァンジェリンさんにかすった覚えもないんですけど……いいんでしょうか？」

「あれは嘘だ」

「うそ？」

「お前のいった言葉に、嘘がないかを確認するための、な」

「・・・・」

言葉を失い、唖然とするアキラに、彼女はいつもの笑顔を浮かべた。

「むしろあの時。お前が本気で私を傷つけようとしていたら、今お前の命はない」

「……そ、そうですか」

やっとのことで絞りだされたその言葉に、エヴァンジェリンは「

それよりも」と言葉を続けた。
残酷な笑みは消え、かといって優しい表情でもない。真剣というには足りないが、興味本位と例えるのは少し違う。そんな、複雑な顔。

「お前、タケルにぃと言っていたが……それは大和猛のことか？」

まず、これに驚いたのは茶々丸だった。
タケルにぃ。
エヴァンジェリンが言っているのは大和猛。ほんの少し前までここで教師をやっていた、まだ15、6歳の仕事人。学園祭で起こった事件の後に気付けば学校から去っていた謎の多い人間。
茶々丸もエヴァンジェリンから詳しいことを聞かされ、その学園祭での顛末を知ってはいたが、それはともかく。

タケルというそこまで珍しくもない名を持った人間が、この日本に一体何人いるのだろうか。
幻想世界（ファンタズマゴリア）にて、アキラが『タケルにぃ』という名を呼んでいたのは茶々丸も聞いてはいたが、それでも大和猛のことと考えはしなかった。
エヴァンジェリンの中で何か思い当たる節があったのか、それとももっと別の感傷的な何かが働いたのかは茶々丸にはもちろん分からないが、それでも学園結界に縛られてどんどんと他人への興味を失っていた彼女とは思えない発言だった。

ナギ・スプリングフィールドをただ待ち続けて退屈してきた過去とは違い、今を少し楽しめているということなのかもしれない。
それはもちろん、ネギという人間に触れ合い始めたことが最たるキッカケだろうが、どこかその一翼を大和猛という人間が担っていたことも否定できない。

――……マスター。

衝撃を受けつつもどこか微笑んでマスターを見つめていた茶々丸と、そしてもう一人。おそらく茶々丸以上にエヴァンジェリンの発言に驚愕を覚えている人間、いや吸血鬼がいた。

「……やまと……たける？」

まるで初めて呟くような声色に、エヴァンジェリンは首を傾げて呟いた。

「なんだ、知らないのか？　……私の勘違いか」

「……え、いや、そ、の」

舌が回らずに何も答えられないアキラの返事を、知らないという答えと判断したらしく「まぁいい、とりあえず明日から、お前の体質を改善してやる。せいぜい心の準備をしておくがいい」

そのまま茶々丸を連れ立って部屋を出ようとして――

「――し！　ってます！！」

素っ頓狂な声が響き、エヴァンジェリンの足が止まった。

「……」

振り向いたエヴァンジェリンに、アキラが畳み掛けるように問う。

「１６歳で、すごく方向音痴で、休日でも制服姿で、いつも無表情な顔をしている大和猛ですよね！？」

その勢いに、若干引き気味になりながらも「あ、ああ」と頷く。
そして僅かな間が訪れたと思えば、同時。
「知っているのか！？」
「知ってるんですか！？」
部屋どころか空間にその大声が響いた。

第6話「Three Children Prodigy」

「フッ」

ネギが小さな息とともに一歩。こぶしを突き出した。
完全に意識がそれていたアキラにはそれに対処する術もなく、直撃。そのまま5Mほど吹き飛ばされた。
だが、それで終わりではないことは誰よりもネギが知っている。
瞬動術で追撃しようとした時「俺を忘れんなや！」

真上から小太郎が気弾を放っていた。
凄まじい速度のソレに、慌てて「風楯（デフレクシォ）！」
魔法障壁が瞬時に生み出され、それにより気弾がはじかれて消失。
だがそれは小太郎にとっては想定内。気弾を防ぐことに成功したおかげで、ネギがホッとしたその隙をつき背後に回っていた。

「甘いで、ネギ！」
「えっ！？」

今度こそ何もできずに蹴り飛ばされた。小太郎はそのまま吹き飛ぶネギから視線を外し、大きく空へと跳ねた。
と。
一瞬前まで小太郎の体があった位置に突き刺さる無数の闇の針。
針はすぐさま空気へと溶けて消えたが、小太郎はそれに興味すら示さない。針を放った人物、アキラへと既に駆け出していた。

「！」

ほとんど一秒にも満たない時間で５Ｍほどの間合いを潰され、既に至近距離。そのままノータイムで小太郎が掌底を放った。が、アキラもそうやられてばかりではない。
まるで溶けるように薄くなったアキラの体を小太郎の掌底がすり抜けた。気付けば小太郎の背後にいたアキラが逆に足払いをかけようとして「魔法の射手（サギタ・マギカ）連弾（リエス）　雷の矢（フルグラーリス）！」

１７本の光の矢が２人に襲い掛かっていた――

一日は現実での一時間しか経っていないというエヴァンジェリンの異空間。そこで彼らは修行に勤しんでいた。時間も既に夕暮れ時でアキラの体にも何の支障も起きない時間だ。
ネギは朝からエヴァンジェリンと修行。
小太郎は楓たちと修行。
アキラは更なる異空間にて太陽光に慣れるための修行……というか訓練。
各々が忙しいような日々を送る中、太陽が沈んでからがアキラにとっての楽しみだった。
アキラは暴力は嫌いだが、試合でいう武道の大会――例えば空手や剣道――は嫌いではない。
なぜなら、それらは暴力を目的としているのではなく、己の研鑽をぶつけ合い更なる高みを目指すことが目的とされたものだからだ。
現在、大会で開かれる武道はそのほとんどがスポーツと化してしまっているが、だからこそアキラも研鑽をすることは好きだった。
そしてその修行という名の研鑽をしているのが、今。修行内容が

そのまま組み手。
つまり、傷つける目的ではなくて高みに上る目的の修行ならばアキラにとっての抵抗感はない。アキラが修行に付き合っているのはもちろん、エヴァンジェリンに「ぼーやの修行に付き合え」と言われたこともあったからだがそれ以上に、アキラ自身も楽しんでいたからでもある。
ネギは守るため。
小太郎は強くなるため。
アキラはこういった研鑽が単に好きだから。
だからこそネギと小太郎と、そしてアキラは修行を繰り返していた。

――小太郎とアキラに襲い来る17本の魔法の矢。

その一本一本を見切り、避け、時には拳で弾き飛ばす小太郎とは逆に、それほどの動体視力を備えていないアキラには術が無かった。具現化したその瞬間は溶けだすことが出来ないこともあって結局はその全てを身に受けることになった。

ばたりと倒れて力尽きたアキラをヨソに、ネギと小太郎は組み手を続ける。

「……ったたた、やっぱり僕も魔法を覚えたほうが良さそうだなぁ」

自分よりも強い同年代の2人に負けて悔しい顔をしつつもどこか爽やかに笑うアキラだったが、ふと襲ってきた浮遊感に「わ」と小さく驚きの声をあげた。

「ここにいつまでもいると危険でござるよ？」

遠目で見学をしていただけのはずの楓が、いつの間にかアキラを背負っていた。

「あ、ありがとうございます」

背中に乗せられたまま、反射的に頭を下げるアキラに「あいあい」とまるで当然のようにその場を離れていく。

「……」

「……」

微妙に流れる沈黙に、アキラは耐え切れず「あの」と声をかける。

「ん？」

安全と思われるところにまで落ち着き、アキラを地に下ろしてから楓は首を傾げた。アキラは目をネギと小太郎に向けつつ、一度大きく息を吐いてから口を開いた。

「その、少しだけ聞きたいことがあるんですけど……」

「何でござるか？」

楓もネギと小太郎の修行風景に目を送りながら、アキラと同じように腰を落ち着ける。

「エヴァンジェリンさんに聞いたんですけど……」

言いづらそうに言葉を区切る。

「……」

黙って耳を傾ける楓の姿を見て意を決したのか、おずおずと口を開いた。

「長瀬さんは、タケルにぃ……と、その、恋仲にある関係……って」

「っ！？」

アキラの言葉に、途端に耳を真っ赤にした楓。そのあからさまな姿に「やっぱり」と呟き、視線を空に送る。

アキラは既にエヴァンジェリンから色々な話を聞いていた。

大和猛という人間が関わり、どのようなことが起きたか、波紋を起こしたか。教師になったことから始まり、様々なバケモノとの戦い、修学旅行や学園祭での事件。そして、おそらく長くても数年間もあればこの麻帆良という都市に彼が帰ってくることも。

詳しい顛末やらを聞いたわけではないので、大雑把な流れを知っただけだがその中でもアキラを最も驚かせたのはあの大和猛が、今アキラ自身の横にいる長瀬楓という女性と男女の関係らしき関係を築いているということだった。

「い、いや。一応はそうなる。で、ござるな……」

アキラの問いに、楓の声が徐々に小さくなる。それは照れか、もっと別のなにかかもしれない。アキラには分からない感覚だが、それでもその姿を見ているだけでその関係が表面上だけのものではないであろうことが推測できる。

だが、しかし。
それはアキラにとって、とてもではないが信じられることではない。いや、正確にいうなら『信じられない』どころか『ありえない』といったほうが正しい。

はにかみ、少女らしい笑顔を見せる楓の大和猛を思う気持ちが嘘だとは到底思えない。だがあの大和猛が誰かを好きになることなど、それこそ『嘘』のような話なのだ。
アキラにとってタケルという人間はもちろん、どこかで優しい面をもっているという認識はあるが少なくとも誰かに恋をする人間ではないという印象をもっていた。

「あの」

おずおずと質問を重ねようとしたアキラに、だが「ふ〜、今日もワイの勝ちやったな」と小太郎の声が響いた。

「う〜、やっぱり分身は卑怯だよ」
「アホ抜かせや。お前かて魔法でそれっぽいことやってたやんけ」
「だって、それは――」

グチグチと、ボロボロの体になっているにも関わらずいつものように言い争いを続けるネギと小太郎の姿に、楓は「今日はこれで終わりのようでござるな」と立ち上がった。

「あ、あの！」

そのままその場を離れようとする彼女に、アキラが慌てて声をかけるが楓は静かに首をふる。

「その話はまた今度、でござるよ」

その言葉に、アキラはそれでも食い下がろうとするが、まるで待っていたかのようなタイミングで

「アキラ、風呂いかんか？」と小太郎が声をかけた。組み手が終われば3人で風呂へと向かう。これもほとんど日課となっていた。

「え、あう……うん。わかった。ぼくも行くよ」

少しだけ躊躇ったものの、楓が既に背を向けようとしていることを見て、ゆっくりと頷いた。それを見届けた小太郎が、今度はネギに顔を向ける。

「よっしゃ、ほらネギも行くで」

「え～、いやーお風呂はちょっと」

一歩引いて、そのまま逃げようとするネギを捕まえてグッと引き寄せる。

「またお前の師匠に怒られるんちゃうか？」

意地悪な笑みを浮かべ、耳元で囁く。その言葉にビクリと背筋を震わせてそのまま何度も頷いてから

「行く」と小さく呟いた。

これもまた、最近の風景。いつも通りの微笑ましい姿に、アキラも軽く笑みを浮かべる。

――仕方ないか。

諦めたようにため息を吐く。

――タケルにぃのことを聞くのはまた今度お願いします。

楓に言おうとして気付いた。

「あれ？」

いつの間にか姿がない。

周囲を見渡すがどこにもいない。気配すら見つからない。

「……忍者ですか？」

本人的には冗談で呟いた真実が漏れて、そのまま静かな空へと消えて落ちる。

「ほれ、アキラも早く行くで」

「あ、ちょっと待って」

慌てて駆け出したアキラ。

いつの間にか沈みきった太陽の代わりに浮かんだ月が、エヴァンジェリンの大きな別荘を照らし出す。

波が岸をうつ音が響き渡り、まるで清廉な空気を生み出していく。

アキラも、小太郎も、ネギも。誰もいなくなったはずの修練場で、まるで無から生まれたかのように二人の人物が月光に照らし出された。

知る人が見ればどちらも中学生3年生の同級生であることがわかるが、その二人を知らない人物が見ればそうは考えない。パッと見て１０歳程度でしかない少女と２０歳程度に見える少女。前者がエヴァンジェリンで後者が楓である。

ジッと並び立っていた2人だったが、エヴァンジェリンがふと呟く。

「いいのか？」

「……何がでござるか？」
「タケルのことを詳しく知る機会だったんだぞ？」

タケルの過去を知る人間は誰もいない。学園長も、ネギも、刹那も木乃香も。エヴァンジェリンや楓でさえも。
彼が慕い、彼を慕った人間達ですら誰も、何も。彼がどういう経緯で生きてきたか、どうやってここに来たのか、なぜ教師になったのか。
タケルがいない間、なんと無しに興味を持った楓とエヴァンジェリンだったが結局はその尻尾すらも掴めていない。

いつかどうしても気になったエヴァンジェリンが学園長やタカミチに問いかけた時も、明瞭な答えが返ってこなかった。それが当然であるかのように彼を受け入れ、教師へと引き入れた。
まるで何かに操られるかのように。
学園長やタカミチ自身でも首を捻っていたくらいなので、逆に謎が増えるばかりだった。何らかの陰謀が含まれていた形跡はない。陰謀を働くどころか何の爪あとも残さずに率先して学園から去っていた。
調べれば調べるほどに深まり、増えるタケルという人間の謎。

もちろん、その謎が原因で二人が抱く彼への評価が変わるわけではない。
だが、それでも増える一方の謎を気にならないでいられる人間などいない。ましてやエヴァンジェリンは普段から暇をもてあまし気味でいるのだから、こんな面白そうなことに興味を示さないはずが無い。
楓もタケルを好いている人間として彼のことを知りたいと思うのは当然でもあった。
「……」

楓はエヴァンジェリンの言葉に黙り込み、まるで考えるように目を閉じた。そのまま黙り込んでいたかと思えば、いつものようにのほほんとした笑みを浮かべて、言った。

「まだまだ、お互いのことを知る時間はある――」

タケルを信じて待ち続ける一人の少女の言葉。それは優しく、温かく、そして鋼のように真っ直ぐと。

「――聞きたいことは本人が帰ってきてから聞くでござるよ」

まるで今までしてきたタケルの過去を調べる行為は悪戯だった、とでも言うかのように軽く舌を出してそのまま闇へと姿を消した。

「……」

一人残されたエヴァンジェリンは、楓が消えたほうをずっと見つめていたかと思えば急に笑みを浮かべて呟いた。

「ふん、なら私も待ってやるとするか」

彼女も同じく、闇へと溶けて消えていく。

タケルを知るための新しい手がかりであるアキラという人間に何も聞かないのならば謎はこれから先も紐解かれることはないだろう。だがタケルが帰ってきたその時、きっと答えは出る。

月明かりが修練場を明るく照らし出す。

今度こそ、人の姿はなかった。

ここは風呂場。
数十人単位が入れるであろう程の大浴場。豪華な装飾が所々に施され、とても全てがただ一人の人物の所有物とは思えないほどの荘厳さを兼ね備えていた。
この豪奢すぎるといっても過言ではないほどの風呂場で、先の三人が各々に体を休ませていた。

「ふ～、やっぱりお風呂っていいよね」

肩まで湯船につかり、見ていて気持ちいいほどにとろけた表情で呟いたのはアキラだった。初めてこの風呂場を見たときはあまりの豪華ぶりに居心地悪そうに佇んでいた彼も、何度か使ううちに慣れたようで、今では純粋にこの大きな風呂場を楽しんでいた。

「ホンマにな」

同じく、湯船で気持ちよさそうに呟いたのは小太郎。彼の特徴とでもいうべき犬耳には水が入らないようにするためか、パタリと閉じられている。

「う～、髪の毛を洗わないですむならこういうのも嫌いじゃないんだけど……」

明らかに風呂に入ることを楽しんでいる二人とは対照的に、同じように浴槽に入っていたネギからは暗い声が漏れた。

「お前は相変わらずやな」
「頭が濡れるのが嫌いって……人間として変だよね」

苦笑する小太郎と辛口な言葉を呟いて呆れたような顔をするアキラに、ネギは肩を落としてうなだれる。

「……ああっ、うそうそ冗談だってネギ君！」

慌てて自分の言葉のフォローに回ったアキラに、ネギはパッと顔をあげて笑う。

「はは、僕も冗談だよ？」

悪戯な笑みを浮かべるネギに、アキラは少しだけ間抜けな顔になって沈黙。それからホッとしたような安堵の表情を浮かべて「もう、勘弁してよ」

ネギも笑顔のまま「もう言われ慣れたから気にもならないけど、初めて言われたときは少しだけショックだったんだよ？」

「あれ？　そうだったんだ」

「そうだよ。だってアキラ君って――」

会話が弾む。

お互い、初めて会ったときから仲良くなる様相はあった。少しだけ喧嘩のようなトラブルはあったが、それでも両者共にそれによって嫌悪感を抱いたわけではない。むしろ、それがあったおかげで少しだがお互いのことを理解することにもなり、二人のお互いへの印象はより良くなっていた。修行当初はぎこちなかったような二人も、何日も一緒に修行することによって関係が修繕され、今では何の気兼ねも無く接することが出来るような間柄になっていた。

「え、でもさ、そういえばアキラ君って――」

「ああ、うん。それはさ――」

「――きしょいわ！！」

ネギとアキラの会話に、ついに我慢できなくなった小太郎が声をあげた。ポカンとした表情を見せる二人に、立ち上がって二人を指で指した。

「お前ら、仲良しか！？」

「「え……うん」」

全く同じタイミングで頷くネギとアキラに小太郎はヨレヨレと頭を抱え込んだ。

「あ、大丈夫？　もしかしてのぼせたとか？」

「じゃあ早く出ないと――」

「――ちゃうわ！！　そもそも今の会話の流れでのぼせたんと違うことくらい分かるやろ、何でいきなりのぼせんねん！？　お前らの気色悪さに頭を抱えただけや！！」

「「……？」」

やはり要領を得ない二人に小太郎はガックリと肩を落として言う。

「あんなぁ、お前ら俺のライバルなんやから今日の組み手でもうちょっと何か反省するとかないんか？」

未だに呆けたような表情でいる二人にため息をついて言葉を吐く。

「例えばアキラ」

「え？」

「お前かて、魔法とか気を覚えたらホンマに俺らと同等かそれ以上になってもおかしくないほどの強さを秘めとる」

いつしか真剣な言葉になっている小太郎に、アキラも真摯に頷く。

「それは、わかってるよ」

「ほな、ネギに魔法を聞くとか俺に気の使い方を聞こうとかないんか？」

その問いに、ネギも同じ意見なのかジッとアキラを見つめる。小太郎とネギの視線を受けて、アキラは考えるように目を閉じて頷いた。

「……大丈夫」

「「はい？」」

ＹＥＳでもＮＯでもない奇妙な答えに、首を傾げた二人。アキラは目を配りつつも、自信満々にある言葉を呟いた。

「プラクテ・ピギ・ナル」

それは魔法の初心者なら誰もが覚える初級魔法。始動キーすらも固定されており、魔法を使うというよりも理解するためと言ったほうが正しいかのような魔法。だが――

「えっ！？」

「嘘やろ」

――ネギと、小太郎からは驚きの声が。

それもそのはず。

いくら簡単な初心者用の魔法とはいえ、魔法は魔法。つい先日まで何も知らなかったような人間使えるものではない。

アキラはいつの間にかどこからから取り出していた初心者用の杖を振りかざし、それを唱えた。

「火よ灯れ（アールデスカット）」

見事に杖先から小さな火が灯り、魔法の発動に成功。

「「おお～」」

素直に感心して拍手をするネギと小太郎に、アキラは苦笑した。

「とはいっても、まだまだコレくらいしか出来ないんだけどね」

「いや、でも凄いよ！　ここは確かに魔力が充溢してるけど普通は数ヶ月はかかるんだよ！？」

ネギの言葉に、だが当然のように呟く。

「ぼくは人に教えてもらうよりも誰かの魔法を見たほうが理解するのに時間かからないから、これ位は、ね」

「ほな、『気』もつかえるんか？」

好奇心から尋ねた小太郎の問いに、アキラは首を振った。

「気は練習してないんだよ」

「何でや？」

「二人を見ててどっちも習得する必要はないかなって」

その言葉に、小太郎が少しだけつまらなさそうに「ま、その通りやな」

「実用レベルになるまではもう少しかかりそうなんだけどね。せめてネギ君が使ってる『戦いの歌』くらいは使えないと2人にはまだまだ敵いそうにないから」

とても数日前に魔法や気を知っただけとは思えない言葉に、ネギも小太郎も少しだけ唖然とするが、それは次第に嬉しそうな表情に。

「これは俺らもウカウカしてられへんな、ネギ？」

「うん！」

「絶対に二人に追いついてみせるけどね」

挑戦的な目つきになって見詰め合う彼らに一拍の間が空き、そして三人は一斉に笑う。

ライバルとして、友として。

偉大な魔法使いの息子にして既にその頭角を現しつつある、天才魔法使い――ネギ・スプリングフィールド。

生まれたときから常に戦ってきた、戦いの申し子――村上小太郎。

そして、数奇な宿命を経て別世界からやって来た、才能の寵児たる真祖の吸血鬼――正志明。

彼らは１０歳の少年というカテゴリーから大きく外れた異常な存在。だが、それでも彼らは１０歳の少年。

三人の笑い声が高く、いつまでも響いていた。

そう――

「……しぬ」
「……あかん」
「……もうだめ」
――のぼせるまで。

小二話「最強級とイレギュラー」

大切な人が出来た。

好きな人が出来た。

だから、死ぬわけにはいかない。

とはいっても戦いの結果、死に掛けることはよくある。だがそれはいつものことで、いつも死ぬつもりで戦っているわけではない。危険な綱渡りが必要だから渡っているだけ。己の命すら道具として使う必要があるから、そうしなければ生き残ることが出来ないから、そうやって戦っているだけだ。

逆境を掴み、一瞬を獲る。命を生を代償として、命を生を奪い取る。

そうして生を得てきた。この生き延び方は俺がガンツで得た全てといっても過言ではない。

「これならまだ小娘どものほうが随分マシではないか」

その言葉に、意識が覚醒した。

「が……ふ」

息を吐き出すと共に漏れ出した血が大地を濡らす。

「まだ生きていたか」

フードと仮面で顔ごと覆った男、名前は確かデュミナス。たった一撃、ただの一撃を貰っただけで俺はこの有様だ。右腕は完全に逝っている。肋骨も何本かいってそうだ。もしかしたら内臓もいくつかやられているのかもしれない。

俺の周囲を影の戦士たちが覆っている。体長３Ｍはあるであろう巨躯で、俺に拳を振り上げていた。

「っ」

慌てて体を捻って立ち上がってその勢いのままに飛び跳ねる。だがもちろん、それだけで逃げ切れるはずも無い。

――そんなことはわかっていた。

２本の拳が俺の背中を捉えた。

息が出来ない。体がバラバラになるような痛みを訴える。が、俺の進行方向への衝撃だったことと空中にいたことが幸いして威力が幾分かマシになった。つまり、この程度の痛いならまだまだ大丈夫。ギリギリで致命傷ではないはずだ。

１０Ｍほど吹き飛ばされて、大地を滑る。気付けばデュミナスの足元にまで転がっていた。

「弱い、なぜ奴はお前のような使えない男を仲間に引き入れたのだ」

はき捨てるような言葉が降りかかる。それは俺に問いかける質問

のようで、ほとんど独り言のようものだった。

――武器はポケットに隠された一本のナイフのみ。

震える足で立ち上がろうとして背中を踏みつけられた。その重さ、衝撃に息がつまる。

「ここで死ね」

頭をあげることすらも許されないこの状況で、それでもデュミナスの行動が手に取るようにわかった。

金属がこすれる音がかすかに響く。これは聞いたことがある。間違いなく刀剣類。それが、恐らくは俺の心臓めがけて振り下ろされた。俺は瞬間的に体を捻って――

「これで、終わった」

――全て上手くいっていた。影の戦士に殴られることも、デュミナスの足元にはじかれることも、直接止めを刺されることも。全てが計算どおりだった。

全ては、そう――

俺に突き刺さった刀剣―肉体から抜けるときの刀身の長さからして、おそらくは短剣やナイフの類―を抜き、デュミナスが背を向けた。

「このことを言えば少しは驚くか？　奴の鉄面皮も少しは――」

そのまま一歩ずつ歩き去っていく背中の呟きが耳に残る。やはり、完全に止めをさした気になっている。

――この一瞬のため。

無音で、無言で、気配を悟らせず。

どんな達人も、どれほどのバケモノも。生きている限りは儚い命。油断した瞬間は凡人となんら変わりない。

足を払った。

「！？」

崩れたバランスにたたらを踏む。倒れるには至らなかったものの慌ててこちらを振り向こうとした瞬間を狙う。

「きさ――っ！？」

ナイフの柄で邪魔な仮面を叩きわり、そこから流れる動きで――

「チェックメイト」

――言葉を吐くために開かれた口の中にナイフを突きつけた。

いくら魔法使いや気を使える人間の障壁が固いといっても、それは戦闘時の話。今のようにほんの一瞬でも油断したデュミナスの魔法障壁は最低レベルのそれか、もしくは障壁を張っていなかったはず。

つまり、あと数センチ腕を押し込んでいれば喉を切り裂く結果になっていた。いや、実際の戦闘ならば既に切り裂いていた。

「今、俺がその気だったらお前の命は既になくなっている」

「……ふぬ」

口の中に入ったナイフのせいで、必然的にめいいっぱいに開かれた口から、言葉にもならない憤怒が洩れ出る。

「形はどうあれ、お前の負けだ」

手を引き、ナイフを下ろす。刃にべったりとついているであろう奴の唾液が少し気持ち悪いがそんなところに目を配っている余裕はない。

目を見続けること数秒、デュミナスが口を開く。

「……心臓をつらぬいたはずだが？」

確かに、やつの体は俺の体を貫いた。だが、それは心臓ではない。

「残念、外れだ」

風穴が開いたのは心臓からほんの少しずれた左胸。穴の開いた服と胸を見て、デュミナスもすぐに気付いたのか、目を見開いた。

「まさか、振り下ろした瞬間に？」

「……」

まさにそのとおり。デュミナスほどの男ならば体を少しずらしても気付く。刺されるまさにその瞬間でなければならい。

早ければばれてもう一度刺されて殺されていたし、少し遅ければやはり心臓を刺されて完全に死んでいた。

「……」

顎に手を置き、考えるように黙り込む。そして仮面が割られたことによってあらわになった端整な顔をゆがめて笑い出した。
それも、大声で。その笑い声が響いて数秒。
ピタリと止んだ笑いと共にデュミナスが俺を見つめる。
「フェイトがお前を気に入る理由が少しわかった。いいだろう、俺もお前を認めよう」
「……助かる」

その言葉を皮切りにデュミナスが背を向けて遠ざかっていく。それをなんとなしに眺めていた俺との距離が１０Ｍほどにまで開いた頃だったろうか。彼は口から光る何かを吐き出した。

「？」

それが何かわからずに見つめること数秒。

「！？」

恐ろしいまでの可能性が閃いて、それを否定するべく手に持つナイフを改めて見直す。

「……はは」

乾いた笑いが自然とこぼれる。それほどの衝撃だった。
１０Ｍ先で鈍く光る数センチの物体はナイフの切っ先。そして、手元にあるナイフの切っ先からはその数センチが見事に欠け落ちていた。
決してナイフはデュミナスの体に触れてはいない。触れたのはきっと彼の魔法障壁。それに触れたせいで刃がかけ落ちたということしか考えられない。

これがいつの段階でなっていたかはわからない。ナイフを突きつける一瞬前か、それとも突きつけた後か。
どちらにしても、ナイフで彼を傷つけることなど不可能だったということに間違いはない。

「……本当に認められたみたいだな」

でなければナイフに構わず攻撃されて、俺は死んでいた。

「ふぅ」

気が抜けたせいだろう。穴の開いた胸、骨の折れた肋骨と右腕、それから絶対に傷んでいる内臓。それらの体の痛みが一斉にぶり返してきた。

「……」

とりあえず、治療が必要だった。

小二話「最強級とイレギュラー」（後書き）

冷静になって考えた。

口の中に刃物入れたまま笑わなくね？

……すいませんでしたｏｒｚ

第7話「New Ways」

雲ひとつない晴れやかな空に、時おり吹く風が頬を撫でる。昼に差し掛かった時間帯のためか、太陽は空のど真ん中で輝き、爛々と全てを照らしていた。

だがその照った光は決して厳しすぎるものではない。眩しくも温かい、誰もが欠伸をしたくなるようなのんびりとした陽の光。

だがここに。

「こ、これは……しねる」

明らかに苦しんでいる少年がいた。

先ほども述べたように日光は確かに照ってはいるものの、それは苦しみあえぐほどのものではなくむしろ陽気を誘われるようなそれ。

にも関わらずアキラはぐったりと誰もいない芝生の庭で立ち尽くしていた。

現在彼は太陽の光に慣れるための訓練中。とはいっても普通の人間が見れば意味がわからないに違い。なにせそれは何かをするでもなく、ただ直射日光を浴び続けるというただそれだけの内容なのだから。

だが、それはあくまでも普通の人間にとっての話。アキラは吸血鬼であり、日光には滅法弱い。それがこうしてジッと、朝から太陽光を浴び続けているというわけだ。それこそ何かをするでもなくただ立ち尽くすだけで精一杯なのは仕方がないことといえるのだろう。

「い、いや……でも諦めないぞ」

呟き、拳を弱々しく握り締める。ほとんど死に体になりつつも気を失わずに歯を食いしばっているのには理由があった。

「絶対、遊びに出てやるんだ」

十歳の少年とは思えないほどに引き締まった表情とは裏腹に、それはいかにも少年らしい言葉。

まだ修行を始めてから三時間程度。夕暮れ時までこれをすることを考えれば残り五、六時間。つまり、まだ三分の二は残っていることになる。が、アキラは冗談ぬきに倒れかけていた。

アキラがここまで追い詰められているのは、単にエヴァンジェリンに課せられた訓練が厳しすぎるから、という訳だけではない。確かに彼女の訓練は常に熾烈を極め続けるのが基本だが、彼女のポリシーは生かさず殺さず。決して早々に倒れるような、逆の意味で楽なメニューを組むことはしない。

なら、なぜか？

それは単にアキラが言い出したことだからに他ならなかった。

つまり、ここ麻帆良の地に降り立ってもう一週間程度。にも関わらず見回った場所はほんのごく一部。それでは流石につまらないと思ってしまうのは、彼も結局は少年だということも加味すれば仕方のないことかもしれない。

「僕もネギ君や小太郎君みたいに学校に行きたいです」

「……ほう？」

「いや、決して学校に通いたいんじゃ無くてあくまでも見学的なやつですよ？　……もちろん」

「だったら、そうだな。貴様がどれだけ陽の光に耐性がついたかを試してやる。クリアできたら許可してやるぞ？」

こうして、今回の地獄が始まったのだった。

試練内容は基本的にいつもの訓練と同じ。違うのはもちろん陽光の強さ。

これに耐えさえすれば、夕暮れ終わりからしか許されていなかった、正確には活動できなかったアキラに夕暮れ開始時からの活動が許可されることになる、

「ま、まだまだ……」

もはや朦朧としてきた頭で、それでもアキラは外出することへと執念を燃やすのだった。

麻帆良の地。

学園祭が終わり、生徒達にとってはつまらない日常が始まっていた。

ほんの数日前には麻帆良女子中等部３－Ａに属す生徒だった超鈴音による騒動があったことも、３－Ａの副担任を勤めていた大和猛という人間がいたことによって起こった騒動があったことも、それら全ての事実を知る人間は僅か数名。

渦中のクラスだった３－Ａ。その生徒達も超鈴音との別れを済ませていたし、大和猛という副担任が突如として誰にも別れを告げずに転任となったことも既に過去のこととして受けいれられ始めようとしていた。

誰もが新たな日常の生活を享受し、その中からも楽しみを見出そうとする中、学校の屋上でネギが肩を落としていた。
首をめぐらし誰もいないことを確認して、ため息をこぼす。

「……はぁ」

小太郎やアキラという友人とも呼べる存在と出会い、エヴァには日夜修行をつけてもらい、生徒達との関係も良好。
一見なんの問題もなさそうなネギだったが、彼の内心はそう穏やかなものではない。学園祭終了からこの時に至るまでで、ネギにとって大きな事件が起こりすぎていたのだ。

まずは大和猛という人間のこと。
とはいっても今のネギの心を掴んでいるのはその問題ではなかった。
タケルという人間が学園祭でとった行動については既に詳細を知る人物から詳しく聞いていたし、その彼が学園からいなくなったということに関しても『一身上の都合により転向した』と学園長から聞かされたときは、ショックを覚えていたが『いつか帰ってくる』と言っていたらしいことも教えられたのですぐに立ち直った。

問題はその後の話。アキラと知り合いになる少しだけ前のこと。
生死不明だった父であるナギ・スプリングフィールドの情報をクウネル・サンダースという人物から「生きている」と教えられたことが発端だった。

ずっとその人を尊敬し、その人を目指してきたネギにとっての全てといっても過言ではない人物。今すぐにでも探しにいきたいという気分になる一方、なにかが心にしこりを残していた。
それが何かが、わからない。

何においても重要な父のこと。頭が一杯になり、全ての心をそれに傾けたくなる一方で、誰かが頭の中でネギに言う。
『周りを見ろ』と。
ネギからすれば意味がわからない。いつ聞いたかも、誰に聞いたかも、何もかもが不明瞭で。けれど無視するにはなぜか心に響いていて。

――そもそも周りって……？

思考は常に父のことへ向けられる一方、そのもやもやにも心がつもる。

「……はあ」

一向に定まらない自身の思考に再度ため息を。またもや肩を落としたネギの背中に突如声がかけられた。

「また考え込みすぎてるんじゃないの？」
「っ！？」

驚きのあまり悲鳴をあげそうになったのを必死にこらえて振り向く。
そこに立っていたのは神楽坂明日菜。ネギと最初に仮契約を結んだのが彼女であり、恐らくネギが最も精神的に頼りにしているであろう少女。

「ど、どうしてこんなところに？」

動揺のせいか、上擦った声で尋ねるネギに彼女はソッポを向いて

答える。

「別に……私が屋上にいたらオカシイ？」

「あ、いえ……そういうわけじゃ――」

語尾をすぼませて、ネギは困ったように頭をかく。アスナは一度ため息を落とし、先ほど投げかけた言葉をもう一度繰り返した。

「あんた、また考え込みすぎてるんじゃない？」

「！」

図星だった。

――な、なんでわかったの？

まるで超能力者のようなアスナに一瞬だけ頷きかけたものの、慌てて「ち、違います」と否定した。ネギ自身、なぜ否定したのかがわからない。アスナに心配をかけたくなかったのか、それとももっと別のなにかか。

「……ふ～ん、そう？」

アスナは疑わしそうに首を傾げてネギの正面に立つ。そのままズイと顔を寄せ、ジト目になって言葉を続けた。

「それにしては授業の時からボ～ッとしてたみたいだけど？」

「え」

――僕が？

もれそうになった言葉を、どうにかネギは飲み込んだ。

「あんた、そういうのすぐに態度に出るから」

やれやれと息を吐くアスナに、ネギはムッとして答える。

「え、でもでも確かにちょっとぼーっとしてたかもしれませんけど、しっかりと授業やってしましたし――」

「――そういう問題じゃなくて！」

グチグチと言い訳をしようとするネギの言葉を一刀両断。アスナの声が舞い上がった。

「あんたがちゃんとやることをやる奴っていうのは知ってるの！ そういうこと言ってるんじゃなくて！ あんた……今お父さんのことで頭一杯なんでしょ？」

「！？」

今度こそ、ネギが止まった。

「気付いてる？ 今のアンタ……あの超さんに凄く似てるわよ？ 自分が超さんに言った言葉思い出してみなさいよ」

「！！」

肩を落とすネギに、流石に言い過ぎたと思ったのか「あ」と呟き慌てて言葉を吐き出した。

「ほ、ほら！ それにタケル先輩にも言われてたでしょ？」

「え」

「『もっと周りを見ろ』って。だから、私が言いたいことは別にお父さんを追いかけちゃだめとか言ってるんじゃないのよ？ そうじ

ゃなくて、その……――」

照れくさそうに顔を赤くさせて言いよどんだアスナに、今度はネギが口を開いていた。

「タケルさん……が？」

――タケルさんの、言葉？

気付けば止まっていた呼吸をゆっくりと繰り返し、ともすれば震えそうになる声を必死で落ち着かせて紡ぎだす。

「それ……いつ、ですか？」

「え？　学園祭でアンタが本屋ちゃんにキスしようとしてた時に言われてたじゃ――……ってそういえばあんたあの時正気じゃなかったんだっけ」

平然と呟かれたアスナの言葉に、ネギは無言で小さく頷いた。

「じゃああの時のタケル先輩の言葉も覚えてないんだ」

アスナの声が少し残念そうに響き、だがネギはそれに断固として首を横に振った。

意識が無い時に聞いた言葉とは、例えるなら眠りかけているときに交わした言葉。例えるなら眠っている時に聞かされた言葉。

普通ならば忘れてしまうだろう。気付くことすらないだろう。だが、それは曖昧になっていたものの確かにネギの心に引っ掛かっていた。

ネギにとって、唯一父親と比肩できる存在。ほんの短い付き合いだった。けれどもまるでネギにとっては父のように強く、格好良く。親愛と尊敬と憧れと。

――タケルさんの言葉だったんだ。

何にも優先すべき父のことは当然忘れない。けれど、ネギという人間は決して一人ではない。助けてくれる人間もいる。話を聞いてくれる人間もいる。

――そっか……そうですよね、タケルさん。

吹き荒れていた困惑は、いつしか胸に解けて温かな何かへと変貌していた。

「……」

いつしか俯き黙り込んでいたネギに、アスナが心配そうに「ネギ？」と声をかけた。ネギはスッと顔をあげて口を開く。

「心配してくれてありがとうございます」

吐き出されたのは優しい笑顔と柔らかな言葉だった。先ほどまでのネギの表情からは考えられないその態度に「へっ？」

「確かに、お父さんのことで僕の頭は一杯です。お父さんが僕にとっての全てだということはこれから先もきっと変わりません……変われないんです。例え何があっても何と言われても」

揺るがない視線、ぶれない瞳。どこか遠くを見つめるその表情。沈みこんでいた一瞬前までとは明らかに態度が違っていた。

このままではネギが消えてしまう。

アスナの心に湧いたその可能性が急激に膨らんで止まらなくなる。

――止めなきゃ！

吐き出された言葉は、

「ネ……ギ？」

ただ、これだけ。

まるで錆び付いたかのように動かない口に、どうにかもう一度何かを言おうとして、先にネギが言葉を紡いでいた。

言わせてはいけないという衝動的な想いをもって口を押さえようとアスナは手を伸ばし、だがそれは間に合わず――

「けど、僕を心配してくれる人だっている」

「――は？」

予想とは真逆の言葉に、呆然と彼女は首を傾げた。

「アスナさんや、いつも僕を助けてくれるクラスの皆さんも。きっとそう、だから……――」

「……だか、ら？」

ほとんど呆けた状態でオウム返しに尋ねるアスナに、ネギは言い切った。

「――皆さんの力も借りようと思うんです」

「……」

ハキハキと、それでいて真っ直ぐに空を見つめながら言うネギとは正反対。まるで先ほどまでウジウジしていたネギにでもなったか

のようにアスナは俯いたまま、ただ頷く。その明らかにおかしい様相にネギは気付かずに言葉を続ける。

「あ、もちろん無理にとかじゃないですよ？　お願いするつもりもなくて……ただ報告はするみたいな、そんな感じで――っ！？」

まだ途中。だが、それは完全に中断された。なぜなら――

「え、あ、あの……アスナさん？」

――アスナがネギを抱きしめていたから。

「……」

ワタワタとするネギとは違い、アスナは何も言わない。最初は「アスナさん？」とか「どうしました？」などと声をかけていたネギだったが、何を尋ねても反応しない彼女にどうすればいいのかわからなくなったらしく、結局は黙りこんだ。

「……」

「……」

風が吹いた。お互いの髪が流れて鼻をくすぐる。それでも、二人は動かない。どれほどの時間をそうしていただろうか。

いつの間にかネギは心地よさげに瞳を閉じて、アスナもその顔にはうっすらとした笑みを浮かべて。

「うん、うん」

まるで何かを確かめるように彼女が頷き、その体をゆっくりと離

して呟いた。

「アンタが自分から私達の力を借りたいなんて言ったの……初めて」

その言葉をネギは責められていると解釈したらしく、俯いて謝罪の言葉を。

「……はい、スイマ――」

「――ありがとう」

だが、それは感謝の言葉によって。

「……え？」

首を傾げたネギにアスナは微笑んだまま言う。

「私は刹那さんと無茶ばっかりするアンタを守るって決めた。でも、いつもアンタは先ばっかりを見てて私のことなんてアンタの目に映ってないって思ってた」

「そんなことは――」

「――あったのよ、アンタがそう思っていないだけで」

言葉をとめて視線を空に送る。つられてネギも。

授業が既に終わっている時間というだけあって、空が赤い。地平線に沈もうとする夕陽がじんわりと全てを温かく染めていく。

少し目を落とせば、放課後の校庭を部活動に勤しむ生徒が汗と共に声を張り上げ、校門を見れば待ち合わせをしていた男女が仲良く手をつないで下校していた。

「……」

「……」

微笑ましい青春が広がる日常に、アスナはため息を一つ。

「アンタが自分で選ぶ道はきっとすごく難しくて、だけど立派だと思う」

「……そ、そうでしょうか？」

「うん」

「でも――」

何かを言おうとするネギの唇を、アスナの手が遮った。

「アンタが私を頼ってくれるなら私は絶対にアンタを助ける。だから――」

少し言いよどみ、だがしっかりとネギを見つめて、言葉を続けた。

「――私を、私達を見てくれてありがとう。何があっても私はアンタの味方なんだから――」

ネギの頬に手を置いて、しゃがみこみ視線を同じ位置に。その近さにお互いに赤らむがそれでも動じることなく、目を合わせる。

そして。

「――しっかりとお父さんを見つめてなさいよ？」

ネギの目が開き、口から小さく「え」と漏れた。呆けたようにそのままでいたかと思えばフと表情が綻び、小さくはっきりと。

「はい！」

頷いたのだった。

体が熱い。恐らく先ほどまで太陽の光を浴びすぎていたせい。何と言うか、少し無謀だったと反省しています。

あの気持ち良さそうな空にすらぼくの体は耐えられないってこと。食事が血であること以外は結構普通の人間だと思っていたぼくだけど少しだけ人外だってことを実感させられた感じかな。

そういえば日光を浴びる訓練の途中から記憶がない。確か6時間くらいまでは耐えられたんだけどそれ以降の記憶がなかったりする。というか6時間も太陽光に耐えられたんだから夕方くらいからの外出は許して欲しい。普通は6時間もぶっ通しで太陽にさらされることなんかないって思うんだよね。

……っていうか、あれ？

なんか暗い。というか真っ暗だ。しかも、ぼくって今どんな状態？　っていうか目閉じてるよね、ぼく。

「……あれ？」

という訳で目を開けたんだけど、まず最初に映ったのは室内の電灯だった。次に布団。途中で倒れて気絶しちゃったってところかな？

――駄目だったか。

小さく呟いたつもりだったけど、声がかすれて結局は言葉にならなかった。代わりにため息だけでも吐いておく。
誰もいないと思ってため息を吐いたんだけど、どうもそれは勘違いだったみたい。

「目を覚ましましたか？」

茶々丸さんが声と同時にドアップで覗きこんできた。そのあまりの近さに慌てて「っ近いよ！！」と声を張り上げてしまった。

「……失礼しました」

表情に変化を見せずゆっくりと体を離してベッドの隣に設置してあった椅子に座る茶々丸さん。

――やっちゃった。

驚きと恥ずかしさでつい強めに言っちゃった。普通はあそこでお礼を言わないといけないのに。すぐに謝ろうと頭を下げて――

「――マスターから言伝を預かっています」
「……ことづて？」

ついつい間抜けな声が出ちゃった。そういえばエヴァンジェリンさんがいない。あの人だったらいつの間にか現れて、結局倒れてしまったぼくに皮肉な言葉をいくつか投げかけてきそうなんだけど。
ぼくの視線に茶々丸さんは頷いて呟く。

「はい、少し用事ができたとかで」

「はあ」

なんだか物足りない気持ちがするけど、まぁそれはそれでいいか。寝起きで文句を聞かせられないだけホッとしておこう。

「それよりも――」

肩をなでおろしたぼくに、茶々丸さんが言う……まるでその人のような言葉で。

「あれだけ陽の光に耐えられるならば合格だ。これからはある程度自由時間をくれてやる」

「え、それって……もしかして？」

「ただし、日除けの傘は常備することだ。それと、ぼーやの修行時間に少しでも遅れたら死刑だ」

「……」

こわいよエヴァンジェリンさん……もとい茶々丸さん。物真似上手すぎ。本気で恐いんですけど。

「わかったな」

「はい！」

反射的に背筋を伸ばして答えていた。いや、茶々丸さんだとは分かってはいるんだけどあまりにも似ていてつい。

「……だ、そうです」

物真似が終わったのが、いつもの通りの口調に戻った茶々丸さんに内心でホッとして胸をなでおろす……いやそれよりも。

これでやっと外に出られる。みんな一体どんな学生生活送ってるんだろ？
どうしてもワクワクが止まらなくて、にやけちゃうな。

「それでは、私はこれで」
「え、あれ？　もう行っちゃうんですか？」
「はい。アキラさんももう元気なようなので家の掃除に戻ろうかと思いまして」
「あ、そう……ですか」

まずい、そういえばまだ茶々丸さんに言ってないことがあった。

「それでは失礼します」

そのまま扉を出て行こうとする背中に、ぼくは慌てて口を開いた。

「あ、の！」
「……はい？」

無表情に、だけど怪訝そうに首を傾げる茶々丸さん。最初は機械的だと思っていたぼくだけど、こういう仕草を見慣れてきた最近ではこれも彼女なりの感情なんだと思うようになってきた。

「その、看病してくれてありがとうございました」

少し改めて言うのが恥ずかしいけどやっぱり言葉は口に出さないと伝わらないから。しっかりと感謝を込めて頭を下げる。

「……」

ほんの少しの沈黙があって。それから彼女はどこかぎこちない笑顔で「はい」

「っ！？」

ぼくの動揺に気付かないでそのまま出て行ってしまった。
彼女がいなくなって完全にぼくは一人になった。当然、聞こえてくる音といえば時計の針が進む音くらい。
そんなどこか心地のいい沈黙で、ぼくは目を閉じてため息を。

「……」

なんというか、時々だけど思うことがある。
あの笑顔はとても綺麗で。
破壊力が反則気味だ……って。

かちりと時計の針が進み、古めかしい大時計が深く鳴り響く。

「……」

時計の音がリズムを刻む部屋で、気付けばもう一つのリズム。

「……」

アキラの寝息が加わっていた。

少年は少しずつ世界（ここ）へと溶け込んでいく。
心も、体も。
少しずつ。

周囲を既に夜が包みこみ、唯一の月明かりが誰もいない校舎を不気味に照らしていた。誰もが下校を終え、教師達ですらもとっくに帰路についているであろう時間。そんなほとんど真っ暗と言ってもいいような校舎の中でただ一室、学園長室の扉のからは電灯の光がもれ出ていた。

「――というわけだ」
「……なるほど、とりあえずはお主が面倒を見とるわけか」

エヴァンジェリンの面倒くさそうな言葉に、部屋の主である学園長が険しい顔をしたまま重々しく頷き、目を窓際に向けた。そこには腕を組んで壁にもたれていた龍宮真名が目を閉じたままジッと耳を傾けている。とりあえず動きそうに無いその様子に、学園長は再度エヴァンジェリンに向き直る。

「じゃが、それでもやはり真祖の吸血鬼を学園内に放置しておくわけにいかん」
「ま、そうだろうな」

面倒くさそうどころか興味すらなさげに同意する真祖の吸血鬼に、学園長は困ったように「むう」と一声唸った。

「……」

学園長はほんの束の間、考えるように沈黙し、そして決断した。

「仕事を頼む」

その言葉に反応したのは他の誰でもない。じっと沈黙したまま窓際に佇んでいた一人の中学生。その筋ではかなり有名人の彼女だった。

「わかりました」

言葉はそれだけだった。学園長にもエヴァンジェリンにも目をくれることも無く、彼女は部屋を出て行った。

「……おもしろくなってきたな」

完全に楽しもうとしているエヴァンジェリンの呟きに、学園長は「はぁ」とため息を漏らしていた。

第7話「New Ways」（後書き）

わかる人にはわかるかと思いますが、原作の流れがびみょ～に前後しています。
一応話の大筋には問題ないだろう、と思って直していませんがそういうのが気になる方がいらっしゃったらすいません（汗）

第8話「Ｉｎｖａｄｅ！　？」

麻帆良学園では中等部以上の生徒には全寮制が採用されている。それは原則として例外はない。そんな当然のようにあてがわれている女子寮の一室で、彼女は銃器の点検を行っていた。

時計の針は２２時を回っている。既に門限を過ぎているため、本来ならば同室者が部屋にいるはずだが、その様子は無い。

とはいっても彼女とその同室者は魔法関係の仕事を頼まれることも多々あるため、彼女達に門限はあまり意味のないものではあるのだが。

彼女達は仕事仲間で、たまたま級友だったといった程度の関係。それに加えて彼女と同室者がそれぞれに別口の仕事をすることが多々ある。そのため生活サイクルがかみ合うことも滅多になかった。元々、特に仲が良いわけでも、険悪なわけでもないのだから尚更のことだ。

ともかく、つまり。

誰もいない部屋で過ごすことに慣れているらしく、彼女はそのことに寂しさを覚える様相もなく作業に没頭していた。

「……」

ただ無音で、ただ無言で。

淡々と、テキパキと。

その表情は真摯で、崩れることは無い。

――と。

ゆっくりと扉が開かれた。同室者の帰還である。だがやはり彼女は目もくれずに一心不乱に作業に没頭している。

「龍宮は帰ってるのか？」

同室者の声に、龍宮真名は小さく返事を返す。

「ああ」

「なんだ、いたの――」

背負っていた鞄を下ろそうと居間まで来たところで目に映ったその光景に同室者が息を呑んだ。それはマナが銃を整備していることへの驚きだとか恐怖だとか、そういった感情ではない。どちらかといえばまるで呆れに近いような表情。

「――また仕事か？」

「……ああ」

既に何度もやりとりがなされてきたのであろう言葉に、マナも同じく頷き、そして立ち上がった。

「よし、行ってくる」

銃器類を詰め込んだ大きめのバッグを肩から提げて、そのまま質素に部屋を出て行った。

第三者から見れば仲が悪いとしか思えないほどに数少ない会話だったが、これが彼女達にとっての日常。

気に病むことも、何かを心配する必要もない。

だが。

「……ふぅ」

取り残された同室者、桜咲刹那は小さく息を吐いた。視線は自然と、まるで隠すように手の中に包まれた小さな袋へと。

「せっかくお嬢様に余った分をいただいたのに……――」

――渡しそびれてしまった。

刹那は困ったように椅子に座り、手に持っていた袋を机に置く。ガサリと、可愛らしいピンク色の袋に包まれたソレが音を立てた。

電力による光など一切ない山奥。月明かりすら雲に隠されて闇に包まれている。

そこで火を囲む三人の男女がいた。笑いながら山菜や魚をつついている小太郎と楓と、それらの食事には一切の手をつけようともせずに、水筒に入っている赤い液体を飲むアキラだ。

彼らの後ろには大きなキャンプテント、そこから少し離れた地点にはドラム缶の風呂が用意されている。

こんな夜にアキラがエヴァンジェリンの家以外の場所にいるのはネギの修行時間ではないからに他ならない。アキラが修行以外の時間を自由にすることが許されたのはほんの一日前のことで、そのことを言うためだけに彼はここに来ていた。

どうせあと半日もすればいやでも顔を合わせるのだから、慌てて言う必要性は全く無い。それでもあまりの嬉しさから誰かにその事実を言いたくなるのはある意味仕方のないことといえるのかもしれない。

「――要するに昼間でもある程度は戦えるようになったってことでいいんか？」

小太郎の問いに、アキラは虚をつかれたように表情をこわばらせて首を捻った。

「え、あ？　……う～ん。戦うのはちょっと、どうだろう？」

「なんや、なら聞いて損した」

つまらなさそうに唇を尖らせた小太郎に、アキラは苦笑。同じく楓も「こらこら、そんな言い方をするものではないぞ？」

と、ソッポを向いている少年の頭に手を置いた。それを、彼は少し嫌そうな顔で振り払い立ち上がる。

「致命的な弱点がなくなんのは結構なことやけど、昼に戦えんのやったら結局弱点であることには変わらんやろ……お前、わかってんのか？」

彼が憎まれ口を叩くのはいつものこと。その憎まれ言葉の中には照れが含まれていたり、下手な褒め言葉が隠されてあったり。ともかく、常日頃から『戦うことしか知らない』と言っているだけあり、コミュニケーションが下手なのだ。

今更刺々しい言葉に驚く彼らではないが、今回は少し様相が違っていた。いつもとは違う真摯過ぎるその声と表情に、アキラは驚きに目を見開き、隣で鍋をつついていた楓も不思議そうな顔になった。

「え……あ、うん。ごめん」

なんとなしに頭を下げたアキラに、小太郎がさらにその態度を硬化させた。

「っ俺はわかったかって聞いてるんや。ゴメンちゃうやろが」

言い捨ててテントの中へと去っていく背中に、アキラは慌てて手を伸ばし、だが結局は何を言えばいいのかわからずにその手を引っ込めて無言で見送った。

二人きりになったアキラと楓に沈黙が訪れる。まるで気まずいような、お互いに考え事でもしているかのような、そんななんとも言いがたい空気が流れ、それに耐え切れなくなったアキラがポツリと言葉を漏らす。

「……ぼく、何か怒らせるようなこと言いました？」

その問いに楓は小さく微笑み「いや」と首を振る。

「コタローは不器用でござるからなぁ」

「？」

物知り顔で呟く楓の言葉に、アキラは意味がわからずに首を傾げる。考えるように顎に手を置き、やはり理解できずにもう一度首を傾げる。そのまま一度ため息を落とし、少し言い辛そうに声を発した。

「……じゃあ僕はこの辺で帰ります」

それに対し、楓が意外そうな顔を。

「おや、泊まっていくのでは？」

「なんだかそんな感じでもなくなっちゃったんで」

苦笑しながらもテントに軽く目を送る。一瞬だけ寂しそうな顔をみせ「スイマセン」と楓に頭を下げて背を向けた。楓も引き止めるべきでないと判断したようで「またいつでも来ればいいでござるよ」と明るい声で手を振る。そのまま歩いて遠ざかっていくアキラの体はすぐさま闇に溶けて落ち、楓の目にも映らなくなった。

つい数分前では騒がしかったはずが、気付けば静けさが流れ出していた。一人立ちつくす楓に届く音といえば自然の協奏曲だけ。

足元ではくべられた薪がパチリと音を立てて爆ぜる。夏に差し掛かっているこの時期だけあって虫が綺麗にも騒がしく己を謳いあげ、風が吹いては生い茂った緑を爽やかにかき鳴らす。

気持ち良さそうに目を細めた楓だったが、フとテントに目を向けた。

「……これでいいのでござるか？」

まるで子供に言い聞かせるかのような優しい言葉に、小太郎がテントの中から姿を現した。その表情はつい先ほどまでのような厳しいソレではなくどちらかといえばいつもの快活なソレ。

チラリと舌を出し、爽やかに笑う。

「ええんや、あいつもネギも成長率が半端ないくせに、性格が甘すぎてそれを全然いかせてへん」

「うむ、やはりわざとだったか」

「気付いとったんか」

少しつまらなさそうに火の前に座り込み、再度鍋に手をつけ始める。鍋の残りを己の口の中にかき込み始めた小太郎に、楓もゆっく

りと鍋の残りを処分し始めるのだった。

「……ん？」

「どうしたんや、楓姉ちゃん」

「これ」

足元に落ちてあったそれを拾い上げ、小太郎に渡す。

「あ」

小太郎の顔が呆れと驚きに染まった。

雲の上はやっぱり気持ちがいい。月も星もが綺麗に輝いてるし、何よりも遮るものがないことがぼくの気持ちも晴れになる気がする。

まぁ、もちろん気がするだけなんだけど。

――はぁ。

小太郎君、なんであんな怒ってたんだろ。全くもって予想がつかなくて困る。知らず知らずのうちに何か気にさわることを言っちゃったとか？

――う～ん。

どれだけ頭を捻っても答えは出ない。まぁ、出るはずも無いんだけど。

「……っと」

そろそろエヴァンジェリンさんの家に近い。雲を突っ切って高度を徐々に下げていく。雲を通るときには視界が遮られることが難点だけど、ただそれだけ。特に不都合が起こるわけじゃないからやっぱり気にはならない。

「そろそろかな？」

雲が切れて眼下には住んでいる人たちの家の明かりが目に映る……はずだった。

「っ！？」

いきなりのことだった。ぼくのこめかみを何かが貫いた。

――やばい。

慌てて再生を。だけど、それ以上にそれは相次いでやってくる。また、こめかみ。次いで眉間。人中……全部がぼくの体を見事に貫いていく。正直これは洒落になってない。

しかも、その飛来物にはなにやら怪しげな工夫がされているのかもしれない。再生がしっかりと働かない。

もしもぼくが真祖じゃなかったら最初の一発であの世行きだった。

「っていうかヤバ」

正確に体の急所を貫いていくソレから逃げるため痛みを無視して急降下。とりあえずどこか隠れられるところに身を潜ませる必要がある。

「つう」

痛みを堪えて、雲を抜ける。

「……あれ？」

その途端、飛来物が止んだ。

――あきらめてくれた……わけないよね。

いくらぼくでもそこまで楽観的な考えはもってない。多分、視界を遮るものがなくなったことがミソ。相手は多分、飛来物の角度、方向から位置を探られることを警戒した。

ぼくを殺そうとしている敵はぼくの能力、例えばぼくが頭部の急所を貫かれても痛みを覚える程度ですむこと、視力もすさまじいこと、それから雲の中を通ること、あらゆる全部を計算に入れて行動していることになる。

凄まじいほどの狡猾さと賢さ、念の入れ具合、それと容赦のなさも。

「……本物かぁ、これはマズイなぁ」

自然と漏れちゃう言葉はきっと事実として存在していると思う。こんなことをされる覚えはないけど、実際に襲われているんだからやってられない。自分のことながら肩を落としたくなる。

「っと」

きっと相手は今もぼくを殺す算段をつけていることだと思う。

「はやく移動しなきゃ」

とりえずは何があっても被害が少なくなりそうなところに行かなきゃいけない。

――あそこ、かな？

逃げるため、そして相手に殺されないためにも精一杯の速度で翼をはためかせる。

「……っ！？」

山の上に差し掛かった瞬間だった。急激な痛みが肩にはしった。

『夜に外をうろつくのは気をつけろよ、最近は物騒だからな』

エヴァンジェリンさんが意味あり気に笑みをうかべていたことが頭をよぎる。

その時はほとんど聞き流してたけど、よくよく考えてみれば絶対このことだ。というかそれ以外ありえない。具体的に教えてくれたらよかったのに、とちょっと内心で恨みをこぼすけどそんなことをやっていても現状ではあまり意味が無いからそれもほどほどにしておかないといけない。

――つまり。

うん、現実を見ようと思います。

「……いやぁ、さすがに途中で撃ち落されるなんておもってなかったなぁ」

はい、見事にやられてしまいました。いや、だって両肩だよ？　なんか撃ち抜かれたみたいな穴が開いてるんだよ？　そりゃ落ちちゃうよ。

現在僕は山中の平地にいる。うまいこと開発が手がけられていたみたいで一面には裸になった山の台地しか見当たらない。これなら人はもちろん自然の命が奪われることもない……まぁ、ぼくの命に関しては別物だけど。

「傷の直りが遅いし、しかも隠れるような場所もほとんどなし、か」

じくじくと流れ出る血に、かすかな痛みと疲労感を覚えてしまう。実際に、肩のことを抜いてさっきの雲の中で撃たれたのは5箇所、計8発その全てが人体の急所とされているところ。

ぼくが雲の中で飛んでいた時間を考えればほんの数秒だったはず。それだけで相手の腕のよさに感心。

「……っていうか、やるしかないよね」

今までガンツのミッションではずっと逃げてきた。もちろん、今回もそうしたいのは山々だけど、逃げ切ることは出来そうにない。守ってくれる人もいない。もしもこれがちょっと前までのぼくならきっとなす術も無く殺されていたと思う。

「けど、今は違う」

拳を握り締める。

そう、今のぼくは違う。相手を傷つける兵器も、技もそんなものは絶対に使わない。使うのは――

目を閉じて、五感を開く。この世界に来た時、なぜか自然の存在

を強く感じていたのはきっとこの魔法を使える素質のせいなんだと思う。
だから、今のぼくには出来ることがある。
唱える。
逃げるため。
「――ＯＢ（オブ）　ＺＡＢ（ザブ）」
紡ぐ。
身を守るため。
「ＴＨＥＳＡ（ザッサ）　ＢＢＡＴＨ（バス）」
謡う。
相手を傷つけないため。
「戦いの歌（カントゥスベラークス）・ｖｅｒアキラ！」
もっと疾く。
もっと硬く。
もっと鋭く。
新しい力がぼくを強く包み込んだ。

――真祖というわりには手ごたえがないな
ターゲットを山中に撃ち落したスナイパー、マナは小さく息をついた。相手が真祖ということもあり命がけのつもりで請け負った仕

事だったが、予想を遥かに超えて楽に作業が進んでいた。とはいってももちろんその程度で気を緩めたり手を抜いたりする彼女ではない。

「……」

何かを思うでもなく、淡々と無言でスナイパーライフルを構え、スコープを覗きこむ。

今回の仕事は麻帆良に住みついた新たな真祖の吸血鬼—正志明という人物の危険性の調査、もしくは排除というもの。

情報によれば、まだ真祖に成り立てで決して攻撃性をもたないともう一人の真祖、エヴァンジェリン・ＡＫ・マクダウェルから教えられているが、あくまでもそれは彼女が正志明本人から聞いたもので、マナ自身が確認したことではない。

突然の急襲、命を狙われることによって若い真祖がどんな反応に出るかを確かめるのがマナの最大の目的だった。

大事なのは彼が持つ本性における攻撃性の確認。誰しも咄嗟の状況になれば本質がでるというもの。

そのまま攻撃性をもって応じてくるのならその相手の攻撃性を図りつつ危険性ありと判断できたなら、排除開始。あくまでも自己防衛の程度の攻撃性なら危険性はとりあえずナシと判断。逃げるのならばまだ情報が不確定ということで追いかける。いきなり降参するような根性無しならその時はその時。最悪、狙撃によって死んでもそれも仕事のうちなので大きな支障は無い。

これは単なる調査ではない。排除も可、なのだ。そのためマナは本気で殺してしまっても構わないという考えのもとでこの仕事を請け負っていた。

スナイパーライフルのレンズ越しにアキラが隠れた岩陰をじっと覗き込む。大岩に隠れて15分。そろそろ身を躍らせても不思議ではない。

――まだ動かないなら、こちらから仕掛けるか……？

元々、マナのもつライフルには魔法術式も組み込まれており、今アキラが身を隠している大岩なら簡単に撃ちぬける程度の威力はある。

このまま待っていても埒が明かない。数十分の待機など何の苦痛でもないが、待つ必要性があるほどの相手でもなさそう。

そう考えたマナが引き金にかかっていた指に力を入れようとして、慌ててその指を引き金から外した。

――……慢心だな。

大きく息を吐き出して、彼女は自身を落ち着かせる。そもそもこのライフル、この銃弾自体ではダメージを与えることはともかく致命傷を与えることは難しい。それに加えてあれほどの大岩を撃ち抜けば、下手をすれば瓦礫と化して砂塵が巻き起こり一瞬でも標的の姿を見失うかもしれない。その隙に不意をつかれたり、発見されたり、もしくは標的にとっての得意レンジに入って思わぬ反撃をくらう可能性もある。

どうせ夜が明ければ吸血鬼の能力は半減する。そうなる前に自身の意思で彼が出てくることは自明の理。つまり優位に動いているこの状況で、それこそ焦って動くことなど愚の骨頂でしかない。

――さて、どうする？

動かないことを決めたらしくチラリと唇を濡らし、風を感じつつも相手の出方を窺うマナには一切の隙がない。
が。
「む？」
――魔法か？
たいした大きさではないが、確かに魔力の流れを彼女の左目が感知した。
「……」
それ自体は想定外。魔法を使えないというふうに聞いていた話と違うからだが、それだけ。慌てる様子も、焦る様子もない。考えるように一瞬だけ目を閉じ、そして目を開いた瞬間には引き金の指に力をこめた。
銃口から吐き出された一発の銃弾が空気を切り裂き、魔力を撒き散らす。2キロメートルという超長距離を走り、彼女の狙い通りの箇所に着弾した。

僕という存在を中心として半径1．5キロのあらゆる闇を掌握、把握。それによって全てを知覚する。もちろん、身体強化も兼ねてるけど、どちらかといえば耳や目の強化に重点が置かれている。ネギ君が使っていた戦いの歌とは少し効果が違うけど、これがぼくなりの魔法。

闇に覆われているもの限定で光を発しているものは知覚することは出来ないけど、今のように夜が訪れている今、しかも電気もほとんどないこの山中なら、今のぼくに認識できないものはほとんど無い。
なのに。

「見つからない？」

――ありえない。

言いたくなる口をどうにか押さえ込んで胃袋の中に飲み込む。
この認識の中では隠形も意味をなさないし、魔法による姿の隠匿も意味が無いはず。それでも見つからないということは、恐らく単純にぼくを狙う狙撃手が範囲の外にいるということ。

ただ、それこそありえない。
1．5キロメートルという距離での狙撃は銃の性能はともかく人間の腕ではほぼ不可能。致命傷を与えるという意味での威力はともかく命中はほぼ不可能といわれている。

「……って、それは魔法とか気がない世界での話かぁ」

ここでの人間はぼくの常識にある常人の遥か先にいる人が無数にいる。
多分、そういうことなんだと思う。

「なんて、ムチャクチャな……」

ぼくの認識可能範囲にすらいないほどの超長距離が可能で、しかも狙いが正確。ほとんどバケモノみたいな戦闘力としか思えない。

闇による転移で逃げる手段もあるけど、そんな凄腕ならどうせ見つかるに決まってる。相手の位置がわかれば戦い方もあるけど、これは本当にどうしようもない。
このままずっと待っててても朝になったらぼくの力は半減する、そうなったら絶対に助からない。どうにか誰かに助けを求める必要があるっていうことになる。

「……」

なんて、考えてる場合じゃなかった。
ぼくの認識範囲に、突然飛来物―質量と形から判断するに銃弾だと思う―が現れた。

「はっや！」

その弾速がまた異様。ぼくの強化された動体視力ですら追いつけない。ただ、それでも慌てる必要は無い。実際にぼくの目で捉えることは出来なくても闇の認識がその銃弾を捉えているから。
認識が可能になった地点からぼくへの角度を一瞬で計算し、命中箇所を割り当てる。

――ジャストで心臓部。

体を捻る。その瞬間に、銃弾が岩を突き抜けて、そのまま地面に着弾。砂塵を撒き散らして予想以上に大きな穴が大地に空いた。
その威力、その正確さ、その速さ。それに加えてこの銃弾……紋様がある。
これは見たことがある。

エヴァンジェリンさんに写真つきで見せてもらった。対吸血鬼用

の魔法弾、再生封じ機能付き。
うん、一つだけ聞きたい。
「……ヤル気満々ですか？」
そんな本気で命を狙われるようなことをやった記憶はないんですけどー？　あれですか、俗に言う吸血鬼狩りってやつだよねこれ？
それとも人種差別？　そうだよね、これはいじめですよね。
……うん。
「現実逃避の癖はいい加減に直さないとなぁ」
頬をはたき、目を閉じて思考を回す。
飛来方角、方向、角度、風の向き。
――わかる。
ぼくが知りえたあらゆる情報から逆算して相手の位置を大体に把握。多分だけど距離１．８～２．１キロ、方角は南南西の位置。
「あとはどうやって相手を無効化するか、だよねぇ」
何をするにしてもまずは距離を詰めなければならない。ただどうして２キロの距離を誤魔化して近づく手段がどうしても思い浮かばない。っていうかそもそも２キロって非常識すぎるでしょ、流石に。
強引に近づくっていうのも、なんだか罠が用意されてそうだし……本当にどうしよう？
「っと」

続いて銃弾が飛来してきた。
1、2、3……5、計5発。ただし、今度は狙いがばらばら。直撃コースもあれば外れコースもある。
岩のせいでぼくの位置が見えずに適当に狙って銃を乱射しているんだと思うけど……それでも3発が命中コースってどういうこと？

「もしかして、本当に今日がぼくの命日になる？」

気を抜けば震えそうになってきた体をどうにか抑え込んで、だけどとにかく今は回避が先決。しゃがんだまま3歩後退。
岩から体が出ないようにどうにかやり過ごす。

「……うん、大丈夫」

それぞれの銃弾が岩をぶち抜き大地に突き刺さる。当然、全弾外れ。

「ほ」っと一息。

けど、それがいけなかった。そもそも最初の一発は岩越しのはずなのに、明らかにぼくの心臓部を狙っていた。そんな凄腕のスナイパーが5発のうちの2発も外したことに疑問を持つべきだった。

「けっ……かい？」

多分、声がかすれていたと思う。地面を見ればそれぞれの銃弾が六芒星を描いて、怪しげな光を放っている。いつの間にかその陣の中心にいたぼくの体を光が締め上げて、それだけじゃない。力も抜けていく感じ。これは多分、吸血鬼の能力が一時的に麻痺させられ

ている感覚。
動けない。動けるはずもない。それほどに強力な力。
どうしようもなかった。
ぼくに使える魔法は『戦いの歌・ｖｅｒアキラ』だけ。他はまだ全然無理。そもそも打開策もない。
もう諦めることしかできなかった。
それでも。
――いやだ……いやだ！
叫ぶことさえ許されないこの六芒星の中で、出しちゃいけない本音が漏れる。それは、一度出たら、もう止められなかった。
ずっと抑え込んできた恐怖。ここで死ぬという絶望。結局あの人に会うことさえも出来なかった悲痛。全部が体内に渦巻いて一筋の涙になって流れていく。
元の世界では食事すら許されなかった。けど、ここでは違う。吸血行為を、今では2人の友人が受け入れてくれる。
元いた世界ではできなかった友人が、ここにはいる。
生まれたときから世界に注目されて、会話するのはいつも研究の内容だったり、実験の方法だった。それを求められていたし、それはそれで興味深い事柄でもあったから嫌いじゃなかった。でも、生きていても面白くなかった。
そんなぼくもここでは、この世界では違ってた。ただ、楽しく笑えてた。
それなのに。

それなのに、こんなぼくに。そんな、やっと手に入れた生きる喜びをすぐに手放せっていうんだろうか。死ねっていうんだろうか。

「っ」

酷い。非道すぎるよ、神様。

声が出ない、涙も出ない、身じろぎだって許してくれない。

「！？」

身動きも出来ない中で、それでもぼくの『戦いの歌・ｖｅｒアキラ』は発動している。全てが溶け込んだ闇の中、２発の銃弾が１，５キロ地点から急に出現。

射角を認識したせいで、頭の中で無意識のうちに計算して相手の狙った位置を把握。

後頭部と心臓部に１発ずつ。完璧に命中コース。結界の中に閉じ込められて吸血鬼の能力を麻痺させられてるぼくになら無駄弾はいらないっていうことだと思う。

『どんな強靭な命も、生きている以上死ぬ時は一瞬だ』

あの人の言葉。本当にその通り。

もう、どうしようもない。

その異様な弾速が闇を切り裂いて、ぼくの体めがけて突き進む。

――っ。

目を閉じることだって許されない中、ぼくには諦めることしかできなかった。

「……？」
いつまでたっても来ない痛みに気付いた時だった。
金属がはじける音と黒い影、それに赤いなにかが周囲に散った。
「こ、たろう……君？」
どさりと、影が倒れた。

第9話「Ｉｎｖａｄｅ！　？」

「あ～、なんでこんなことせなあかんねん。別に明日には会うんやし――」

犬神小太郎が面倒くさそうに夜道を歩いていた。ぶちぶちと文句を言いつつも首から下げられた水筒を大事そうに見つめる。

ため息を吐き、さっさと用件を済ませてしまおうと足を踏み出したときだった。

「ん？」

一滴の水雫が小太郎の鼻先を掠めて地に落ちた。

「雨？」

傘を持ってきていないことに顔をしかめ、空を見つめる。が、雨が降る気配はない。気のせいだったろうか、と首を傾げて自分の鼻先を指で拭き、そこで気付いた。

「これ、血か？」

はじかれたように顔を上げてもう一度空を見つめるが、そこに異常はない。今度は首をめぐらせて視野を広げる。

己の指をなめて風の向きを確認。風が吹いてきた方角を突き止めてそちらを重点的に見つめる。本来このような闇の中でどれほど目を凝らしても見える範囲などたかが知れている。それでも彼が諦め

なかったのは自身の動体視力と人間以上の視力に自信があったからだ。

そうやって空を見つめること数秒。ついに彼はそれを見た。

雲の中から出てきた小さな人影。小太郎と似たような身長で、背中に映えている翼からもそれが小太郎の数少ないライバルでもあり友人でもある正志明のものだということがわかる。

泡を食ったようにその場を離れていくアキラの速度はあまりにも速い。まるで逃げ出すかのようにも見えるそれに小太郎の顔が不思議そうな色を浮かべて、次の瞬間には驚愕のソレに変化した。

あまりの速度でその場を離れていこうとするアキラの両肩に銃弾が突き刺さり、翼が融けて消失。アキラの体は必然的に落下状態に入った。

「……まさか、今日？」

自分でも気付かないほどの声で呟き、彼はいつの間にか全速力で駆け出していた。

そして、彼は間に合った。

地に伏して動かなくなった彼を、アキラの目が不思議そうに見つめる。

殺されることに対する恐怖が、絶望が、悲哀が。

あらゆる感情が、思考が。

音が、世界が。

アキラの全てが止まっていた。

倒れて動かない小太郎。縛られて動けないアキラ。既に数秒も経過しているというのに飛んでこない銃弾。
変化がなくなった世界の中、それでもアキラの頭脳が最悪の可能性を閃いた。

――もしも、この状況でトドメの銃撃を放たれたら？

「！！」

アキラの脳内で一つの思考が通り過ぎる。

――いや、だ！！

それは自分が死ぬことへの恐怖ではなく、初めて出来た友人が死ぬことへの恐怖。
アキラが近づきつつある小太郎の存在に気付かなかったのは単なる見落とし。意識を完全に銃弾の方角にしか向けていなかったせい。
そのせいで銃弾がどのように、どんな角度で、どの箇所に命中したのかも判別できていない。今は単に気を失っているだけで、実は軽い怪我なのか。それとも一分一秒を争うほどの重体なのか。
とにもかくにも小太郎の命に対する保証。それが、アキラの中に浮かんだ最優先事項だった。
自分を守るために使う力と他人を守るために使う力。どちらも同じ『力』だが、それは似て非なるもの。

これまでの人生、ガンツという修羅場を越えてきて自分の命を諦めることは多々あった。だが、友人の命を諦めたことはない。いや、そもそも友人がいなかったのだからそんな経験があるはずもない。
諦めたことのある命と諦めたことのない命、どちらが捨てがたい

かはもちろん明言するまでもない。
つまり、アキラにとって小太郎が死ぬことだけは許されないことだった。

小太郎を助けるためには何が必要か、どういう状況になる必要があるか、どうなればいいか。それら全ての思考を経過し、答えを弾き出す。
そして、その覚悟を固めた瞬間だった。まるでそれを待っていたかのように1．5キロ地点に銃弾が現れた。先ほどと同じように心臓部と頭部に突き刺さる軌跡を描いて、着弾まで既に一秒もない。

「ん……ぅぅ」

呻く。
動けなかった体に活を入れる。がんじがらめに縛られた体がキリキリとした痛みを訴える。それら一切全てを無視して、体に力を入れる。
結界の中を無理矢理に動いたせいで目から鼻から耳から口から、体中の穴という穴から血が流れ出す。

歯を食いしばり、体を傾げることに成功。その途端に着弾。右耳が撃ち抜かれ、心臓から数センチずれた胸のど真ん中に穴が空いた。奇跡的にスナイパーの銃弾の回避に成功した。とりあえずは命の危機を免れたもののまだまだ危機に瀕していることに変わりはない。

「あ……と、は！！」

痛みから気を失いそうになる自身を奮い立たせ、未だに動かない小太郎に目を配る。それだけで新たな力がアキラの中に生まれる。
それでも――

「……っう！」

――結界は動かず、壊れない。

少し体を動かすだけで限界を超える力を必要とされた彼に、もう力はない。端正な顔が歪み、涙こぼれだす。それは体の痛みか、友を救えない悲しみか、諦めの絶望か。

どうにもならないこの状況で、ついに目を閉じたときだった。

「……ん？」

フワリと。

「あれ？」

体が解放感に包まれた。

理由はわからない。単なる時間による消失か、最後のあがきが奇跡を呼び込んだのか、それとももっと別の何かが作用したのか。

とにかく、結界が解けた。こうなればアキラにも出来ることがある。すぐさまスナイパーがいるであろう方角へと顔を向け、両腕を天高く上げて、そして大きく口を開いた。

ゆっくりと口の形を変えていき、一文字ずつをしっかりと表現する。声に出すでもなく、いわゆる口パクというやつだ。

声に出さないのは、アキラにそれだけの大声を振り絞る力が残されていなかったことと、口パクでも相手には十分に伝わるだろうと見越してのことだった。

全ての口パクを終え、返って来た反応は無反応というソレ。

「……」

沈黙が重く、彼の肩にのしかかる。もう相手を信じることしか手段が残されておらず、それがアキラに出来る最速で最善で最高の解決方法だった。

小さく微笑み、目を閉じる。

その瞬間、1．5キロ地点に銃弾が出現。

「ごめん」

誰に向けられたかもわからない小さな呟きと共にアキラの意識は闇の中へと葬り去られた。

小さな体が倒れこんだ。

もう、動く影はなかった。

小太郎とアキラが並んで大地に横たわり――いや。

「……ふぅ」

小太郎が、ムクリと。

まるでアキラが倒れるのを待っていたかのようなタイミングで起き上がった。

彼の服はべったりと赤で染まってはいるものの、その顔色は今まで気を失っていたとは思えないほどに元気で明るい。

小太郎が起き上がったのを機に、もう一人の影が現れた。

大きなバッグを肩に提げ、長い黒髪を闇に溶け込ませ、アキラにその姿を一切現すことなく彼を仕留めることに成功したマナの顔に、感情の色はない。

「やはり、死んだフリか」
「へへっ、でもまぁ、そのおかげでこいつも死なんで済んだわけやろ？」
マナの問いに、小太郎はどこか自慢げに答える。懐から穴が開いている水筒を取り出し「あちゃぁ」気まずそうに呟いた。
「……大事なものだったのか？」
「ああ、いや。俺のじゃなくてこいつのやけど――」
言葉のままに倒れているアキラを顎で指して、ため息を。よく聞けば聞こえてくる気持ち良さそうな寝息が小太郎の笑みを誘う。
「――しっかし、こいつホンマに予想どおりの行動とったな」
小太郎はアキラが狙われていることを既にエヴァンジェリンから聞かされていた。その危険性の有無の判断を強引に調査され、もしかしたら殺されるかもしれないことも。
それでもアキラの力量があれば大抵の人間からは逃れられることを知っていたし、心配もしていなかった。だが、その顛末がこれ。もしも今日、アキラが水筒を忘れていかなかったら今頃消滅していてもおかしくはなかった。
小太郎が銃に撃たれたのはわざと。マナも小太郎が飛び込んでくるのに気付いて、一般的なスナイパーライフルに変えて攻撃したため、さすがに水筒には穴が開き大量の血が出る結果になったが、小太郎へのダメージはゼロに等しい。
そうして切羽詰った状況に追い込めば、アキラの本当に攻撃的ではない性が現れると、小太郎は踏んでいた。

そして、正しく彼の予想通りに結果が進み、アキラの命は救われた。
どこかホッとしたような、それでいてどこかむず痒い気持ちが小太郎自身の中に流れ込み、わけもなく照れくさくなった彼がそれを誤魔化すためにシミジミと呟く。
「ホンマにこいつ誰かを傷つけるん嫌いなんやな」
ほとんど独り言のような言葉に、マナが「そのようだな」と無表情に同意する。
既にアキラはマナの位置を特定していた。それは小太郎もマナも理解していたし、マナはあえて特定されるように動かずに射撃していた。
そうして特定された結果、どのような攻撃を繰り出してくるか、危険と判断しうる攻撃性をどれほど秘めているか。それを判別するのが目的だったからだ。
だが、そのような攻撃させるための誘導は結局意味を成すことはなかった。
アキラは一度も攻撃性を示すことはなかったし、敵意すらぶつけようとしなかった。それは小太郎が死んだフリをしていた時も同じだった。
結界から脱出したアキラの言葉。それを現した口の形を、小太郎もマナもしっかりと見ていた。
「『降参するから、殺されてもいいから小太郎君の命は助けてください』……やもんなぁ」
「あの状況でこの少年はキミの命を優先した。これならこの少年の危険性はないと判断しても良さそうだな」

マナは彼らに背を向け、そして何かを思い出しかのように「ああ」と声を出し、言葉をつなげた。

「仕事とはいえ少し手荒だった。その少年には『スマナイ』と伝えておいてくれないか？」

「……」

無言で頷く小太郎に、マナはそのまま闇の山へと姿を消した。

「たつみー姉ちゃん……まだ俺でもかなわんか？」

彼自身の中にフと湧いた疑問。少しだけ考えるように黙り込んだ後、首を横に振る。

「ま、とりあえずはこいつやな」

ため息と共に漏らし、アキラを楓のところに連れて行こうと歩き出した時、重大なことに気付いたらしい。

ピタリと足を止めて、それから確認するように己の赤く染まった服を見つめて愕然と身を震わせた。

「この服、ちずる姉ちゃんに何ていわれるやろ？」

どうやら今日が葱を肛門に刺される日になりそうだった。

時刻は深夜の2時を回っていた。

同室者を起こさないようそっと部屋に入る。

「ふぅ」

小さな息を吐き出し、いつものように使った武器の整備・点検をしようと椅子に座った時だった。

「……これは？」

置手紙とピンクの袋。

「『お嬢様と作ったクッキー。余ったから貰ってくれ』……か」

時計の針が進む音と刹那の寝息がリズムよく室内に響く。クッキーをそっと横に置き、チラリと視線を刹那のベッドに送る。

――変わったな。

それはもちろん刹那のこと。

仕事と近衛木乃香を守ることにしか興味がなかったような少女が、今ではその対象と交友を結び、その他の友人たちとも親しそうな毎日を送っている。

去年から考えればそれは目覚しい変化。

仕事仲間でもあり級友でもあった彼女が、仕事にばかり目を向けていた彼女が、今では時に歳相応の少女のような振る舞いを見せるようになった。

それはどこか寂しく、どこか嬉しい。

――私が忘れた生活、なくした生活。別に一般的な少女のような生活を求めているわけでもない。今の自分にはある程度満足しているし、３－Ａの人間たちと共に学生生活を送ることは実際に悪くな

い。
自分の生き方に感傷を抱いたりするほど甘い生き方もしていないし、するつもりもない。きっと今までと同じようにこの稼業を続けて、どこかで野たれ死ぬことになるのだろう。
それでもいいと思っているし、それが当然だとも思っている。
自身が他人から見れば冷たいと評される人間であることも百も承知。むしろ、今までの自分があったからこその自分であり、それに誇りをもって頷ける自信もある。
そんな私が、今はただ。
クッキーを作るようになった友人の変化にどこかホッとさせられていた。

「よし」

考えごとをしながらも気付けば作業が終わる。小さく息を吐き出してクッキーを手に取って一口。

「……美味しいじゃないか」

なぜかこぼれだす微笑みに、フと自分の手を見つめる。
――そういえば最近、血に染まってないな。
先ほど終えてきた仕事に思いを馳せる。
どれだけ追い詰められてもその力を振るおうとしなかった吸血鬼と、それをゆるぎなく信じた狗族の少年。

「ふっ……面白い」

自嘲気味な呟きと共に立ち上がる。
血に染まることすらも厭わなくなったはずが、なぜか殺さずに済んだことにホッとしていた。自分でもよくわからない感情に首を傾

げてしまいそうになって、部屋を出る。
とりあえず、学園長に報告しに行く必要があった。

傷の痛みに目が覚めた。それと同時に、自分が生きていることを実感。

「小太郎く！　……いったぁ」

飛び起きようとして、体の節々の強烈な訴えに断念。
誰かが見ていたら格好悪いなぁって思って周囲を見回そうとして――

「お目覚めですか？」

――はい、いました。どおりでこの部屋に見覚えがあると思ってました。ぼくの部屋ですよね、わかります。

「ちゃ、茶々丸さん……」

もう、これで何度目だろう。
この世界に来てから気を失うことが多すぎて、こうやって茶々丸さんに看病してもらうことが当たり前になってきた気がする。
いやもちろんこうやって優しくしてくれる茶々丸さんにはとても感謝してるんだけど、流石にちょっと恥ずかしいというか……ってそうじゃない。今はそんなことより大事なことがあった。

「小太郎君は……？」

ぼくの質問に、茶々丸さんは不思議そうな表情になってそれから

首を傾げて「村上小太郎さんならもう帰られましたが？」

「……はい？」

返ってきた言葉の意味がわからない。

その言葉の意味をとると小太郎君が元気だっていうことになる。けど、ぼくが知っている限り小太郎君はぼくよりも大怪我で……ってあれ？　そういえばぼくはなんで生きてるんだ？

「？？」

訳がわからないことが多すぎる状況に、思考が追いつかなくて頭が混乱してきた。

「ああ、それと伝言です」

「伝言？」

「あなたを狙った方から『手荒なことをしてすまなかった』と小太郎さんが伝言をうけたそうです」

これはもうあれを使うしかない。関西人の伝家の宝刀。あの言葉。

「なんでやねん」

「はい？」

いきなりの関西弁に茶々丸さんもたじたじ。きっとその無表情な顔の裏では必死になって笑いを堪えていることだろうと思う。

「……ん？」

なんて半分どうでもいいことを考えたおかげかもしれない。余裕

をもった思考をしたおかげでぼくの頭もいつものように回転する。
「小太郎君とぼくを狙った人って知り合いなんですか？」
「……いえ、アキラさんを狙った方を私は知らないので」
「ああ、そうか。そうですよね。スイマセン、変なことを聞い――」
「――ああ、こぞうの言ったとおりあの２人は顔見知りだ」

諦めかけたぼくに降ってきた突然の言葉。
当然、この家の主エヴァンジェリンさんだ。この人がいきなり入ってくるのはもう慣れてるから驚くことはない。だから、ぼくがひっかかったのはエヴァンジェリンさんの言葉。
「やっぱり……じゃあ――」

考えがまとまりそうな時に、それでもお構い無しの話しかけてくるのがこの人。
「――そんなことより、全然駄目だったな？　正志明？」

いつものように悪めいた笑みを浮かべたこの人は、いきなり核心をつく。もう少しぼくの傷心というものを考えてもらいたい。
……そんなことは口が裂けても言えないんだけど。
「ええ、まぁ。手も足も出ませんでした……ってなんで知ってるんですか？」

その言葉に、エヴァンジェリンさんはその笑みをさらに深く浮かべて「見ていたからな」
「……」

唖然。
ええ、もう唖然です。
「だったら助けてくれてもよかったじゃないですか」
もう拗ねるしか出来ないようなぼくの発言に彼女はヤレヤレと呆れたように首を振る。
「なぜ私が居候ごときを助けなければならん？」
「……」
いや、まぁその通りですけどね。知らない仲じゃないんだからやっぱり助けてくれたってよかったのに。小太郎君がいなかったら……ってそうだ！
「あの、小太郎君は元気なんですよね？」
「ん、ああ。奴はほとんど無傷だ。あの場で本当に死に掛けていたのはお前だけだ。まぁあの犬っころの機転のおかげでお前は助かったんだ。感謝くらいはしておけ？」
「……？」
全然展開が読めない。さっきの会話の流れで、てっきり最初からあの二人がグルだったとかちょっと考えたのに、エヴァンジェリンさんの口ぶりから察するにそれも違うみたいだ。
またもや訳がわからなくなってきて混乱してきたぼくに「それより」とエヴァンジェリンさんがベッドに腰掛けた。
彼女の軽い体重でベッドが軋む。どうしてか嫌な予感を覚えさせるその動きに自然と顔が引きつっていたと思う。

「お前、もっと強くなる必要があるんじゃないのか？」

けれど、投げかけられた言葉は思っていたよりもずっと真剣なものだった。

「え」

いつの間にか真剣な顔になっているエヴァンジェリンさんが「ふん」と息を漏らし、立ち上がる。

「お前ならこの意味、わかっているだろう」

そう言い捨て出て行くエヴァンジェリンさんにくっついて、茶々丸さんもお辞儀をして出て行ってしまう。

それがちょっと寂しくて、茶々丸さんにはいてもらいたいと思ったけどそれ以上に一人になりたい気持ちのほうが強かった。

「……」

結局、そのまま何も言わないでお辞儀だけして2人を見送る。

『お前、もっと強くなる必要があるんじゃないのか？』

この言葉が重くて、それでいてそれは確かに真実味があって。いつの間にか、そのことにばかり頭を傾けていた。

「ｚｚｚ」

まぁ、気付いたら寝ちゃってた……っていうのはご愛嬌っていうことで。

うん、とりあえず今日殺されそうになったことについてはあまり深く考えないようにしよう。

小三話「豹と竜とイレギュラー」

殺すから殺される。
殺されるから殺す。
だから、今回も。

黒いショートヘアーと黒の猫耳が特徴的な少女、コヨミ。その隣には竜の角が特徴的な少女、タマキ。
戦災孤児だったところをフェイトに拾われそれ以来彼につき従ってきた少女たち。コズモエテレンケイアの一員でもあり、実力も申し分ないはずの彼女たちが目の前の出来事に表情をこわばらせていた。
彼女達の視線の先。そこで、また新たな血しぶきが飛び交った。

既にあちこちに死体が出来上がっていた。そのどれもこれもが、この世の生物のものとは思えないほどに醜悪でおぞましい。死んで数分もたっていない内から腐臭すら漂わせるそれらはまるでどこかで見たことのあるようなゾンビそのもの。

それらに取り囲まれ、それでも何の迷いもなく血を浴び、血の池を駆け抜け、屍体を踏み越え、一人の少年が刀と玩具の銃を振り回していた。
学ランに身を包み、ゾンビの群れを駆け巡るその人、新たにコズモエテレンケイアのメンバーとなった少年。名前は大和猛。

フェイトと仲がいいことに嫉妬され、さらには魔法も気も使えな

い上に特徴的な能力もないことからメンバーでいう栞と月詠以外の少女達全てに蔑まれ、どれだけ怒られようが理不尽に扱われようが表情一つ変えなかったことがさらに悪い方向に作用して完全に嫌われていたその大和猛が。

まるで能無しとバカにされていたとは思えないほどに速い動きを。何も知らないとバカにされていたとは思えないほどに無駄のない動きを。役立たずとバカにされていたとは思えないほどに殺しなれたその動きを。

速さでも力でもないその動きがなぜか圧倒的だった。

５０体はいたであろうゾンビと一体の巨大なゾンビを殺した彼は、まるで氷のように表情を変えず、大きく息を弾ませながら少女達に顔を向ける。

変形した左肘、膨れ上がった右肩。穴がぽっかりと開いた腹部を血まみれに染まらせ、足を引きずらせて。

そして、それでも一言。

「大丈夫か？」

コヨミとタマキが呆然と――

「……はい」

「……うん」

――同時に頷いた。

どうだった、さっきのお前は？

今のは……ここに来た時の？
ああ、まだガンツがあった時のだ。
……もう、随分昔に感じるな。
何を我慢してる？
我慢？
もう全部殺しちまえよ。
……殺さない。
なぜ？
殺されないから。
本当にそれでいいのか？
……どういう意味だ？
お前、命のやりとりじゃなきゃ満足できねぇだろ？
それは少し前までの話だ。
ほぅ？
あいつらといれればそれでいい。
おいおい、お前が……か？
ああ、俺が……だ。
けっ、お前はつまんねぇな。
それはわかってる。

はっ、気にイラね。
……
あ？　なんだよ？
お前はずっと一人なのか？
……だったら？
誰よりも俺が、お前を見つけてやる。
っ！？
だからもしも、その時は――

「――……すか？」
声が聞こえる。
かすかな光が瞼の裏にまで差し込み、意識がゆっくりと覚醒を始めた。
「……てますか？」
「っぅ」
次第に聞こえやすくなってきた声に、やっと今の状況を思い出す。
「生きてますか？」
「……ああ、どうにか」

まだクラクラする頭を片手で抑えてゆっくりと立ち上がる。隣ではコヨミ（暦）とタマキ（環）が呆れたような、それでいて少しは心配していてくれたような表情で俺の顔を覗き込んでいた。

「どれほど逝っていた？」
「……２０分」
「全く、ひ弱すぎてハナシになりませんね」

端的に答えるタマキと、彼女とは対照的にいつものように余計な言葉まで付け加えるコヨミに少しばかり安心した。

――ん、安心？　……なぜだ。

何かを夢見ていた気がするが思い出せない。まるで頭にモヤがかかったかのように感じる。

「……」
「どうかした？」

フと考え込んでしまいそうになったところに、タマキが目ざとく首を傾げる。さすがに『夢の内容が思い出せなくて』と正直に答えるわけにもいかないので「いや、なんでもない」

「……本当に？」
「ああ」

疑わしげな声を発する彼女の洞察力が不思議だが、本当に何もないのでこちらとしてもどうしようもない。年頃の少女の考えていることは基本的に理解できないことが多いのであまり気にしないことにしておく。

と、そうやって彼女を軽視したのがよくなかったらしい。
背中に突きつけられた、太く鋭い感覚。
これはつまり、あれだろう。
「本当だからそのでかい角を突きつけるのは止めてくれ」
「……わかった」
タマキはなぜか残念そうな声を発し、それと共に大きな角が背中から離れた。そのまま何かを言うかと思えばそうでもないらしく、沈黙が訪れた。
「……？」
なぜ角を突きつけられたかを大きく聞きたいところだが、生憎だが今は時間が惜しい。2人から少しばかり遠ざかって頭を下げる。
俺の意図に気付いたらしく、今度はコヨミが声をあげた。
「まさか、まだやるんですか？」
「ああ。頼む」
今は訓練中……もちろん、ガンツを失った俺の。
とりあえず今ここにいる面子以外はここを留守にしているが、彼らのことだからあと1，2日もすれば帰ってくるだろう。
それまでにどうしてももう少し体を鍛えておく必要があった。
なぜなら――
「もちろんです」
「……うん」
さっと頷いてくれる彼女達に、あとで何かを奢ることを心に誓っ

てそのまま殴りかかる。

なぜなら――

――俺を嫌っている少女達からいちいちツンとされるのは面倒くさい。

我ながら下らない理由で少し泣けてくる。

「あ」

「だ、大丈夫ですか！？」

そして、また俺は気を失うことになった。

第１０話「Ｔｒａｉｎｉｎｇ」

近代科学が１６，７世紀に誕生としたという説を採用するとする。他にももっと古いとか新しいとかいう説を唱える人間もいるが、それはこの際だから置いておく。

ともかく、１６，７世紀に誕生したとして。それから既に数百年。人類は世界の全て、例えば匂いや明るさまでをも数値化できるということを理解している。

確かに凄い発見であることに間違いはないが、よくよく考えてみればそのそもそもの数値も人類が作り出したものなのだから、当然といえば当然ともいえる。

と、そういう考えを常にもっている少年がここに頭を悩ませていた。

つまり、少年はこう考えたのだ。

同じく人工物に近い魔法だって数値化も可能なんじゃないだろうか？

「……の、はずなんだけどなあ」

その少年、アキラは大きく息を吐き出して椅子の背もたれに体を預けて、またため息。

「もう少しで法則性も見つかりそうなんだけど……そのもう少しが……う～」

考え事をしているときの癖なのか、誰もいない部屋で一人、ブツブツと小言を漏らすその姿は傍から見れば異様なものだろう。

まるで何かに取り付かれたかのように机に没頭し続けてすでに5時間。完全に行き詰ったらしく頭をガリガリとかきむしり立ち上がった。

と、同時。

「受けて立つわよ！！」

大きな声がアキラの部屋にまで響いた。

「……今の？」

聞き覚えのない声に興味を惹かれたらしい。机においてあるノートと同じく机に立てかけてあった日傘を抱えて、そちらへと向かった。

ところ変わって表（おもて）にある修練場の一所。対峙する二人の男女、ネギとアスナ。それを傍観するのは小太郎や楓やエヴァンジェリン、茶々丸をはじめとして他にも6人の女子中学生。刹那、木乃香、古菲、早乙女ハルナ、宮崎のどか、綾瀬夕映である。

「始めるがいい！」

いつも通りの厳しい声が合図となって、まず動いたのはネギ。5Mほどあったはずの間合いを一瞬で詰めてそのまま攻撃に移行。アスナはそのあまりの速さに対応しきれず、ハリセンを苦し紛れにふるった。ネギにとっては簡単に捌ける速度。ハリセンを握っていたアスナの腕を右手で掴み、極（き）めてアスナの体勢を固定し、それと同時に左肘をガラ空きの腹部に突きつけた。

本来なら振りぬくところをスン止めにしたのは、アスナを傷つけることを嫌ったネギの優しさか、それとも圧倒的実力差からくる余

裕か、はたまたその両方か。

ともかく、それで決着――とはいかない。

「コラぼーやなぜ止める！！　振り抜け！！」

エヴァンジェリンの叱咤が飛ぶ。

そうして続けられた2人の組み手は、実に15分間。ボロボロで最早立てなくなったアスナに、エヴァンジェリンは告げた。

「足手まといだ。やはりお前は口先だけだな、神楽坂明日菜」

「……」

その容赦のない言葉に、全員が絶句する中、いつの間にか小太郎の横にいた一人の少年が場違いにもポツリと呟いた。

「うわ～、知らない人がたくさんいる」

手が埋まるほどの大学ノートと日傘を手にキョロキョロと首をめぐらせているその少年、もちろん、この騒ぎを聞きつけて部屋から出てきたアキラその人だ。

「ねぇ、この人達って誰？」

呑気に小太郎に話しかける声は、彼なりに空気を読んだらしく一応は小声ではあるものの、残念ながら丁度沈黙が訪れていた時だったので、その声がよく通った。

自然と、全員の視線がアキラに向けられ、そしてその場に集まっていたネギま部（仮）の少女達が一斉に呟いた。

「「「誰？」」」

と、いうわけで軽い自己紹介をそれぞれお互いに済ませたその日の晩。

「正志明、１０歳です。宜しくお願いします！」

言葉が終わると共に小さくお辞儀。少年の改まった自己紹介にあわせて少女達の拍手がアキラを包み込んだ。

「ど、どうもどうも」

それに対してぺこぺこと頭を下げるサマはまだ１０歳の少年にしてはどこか慣れていて、恥ずかしさよりも純粋に嬉しそうな笑顔が映えていた。

「ん～、にしてもこんな興味深（おもしろ）そうな子までいるなんて……」

早乙女ハルナ、通称パルの彼女らしい独り言がワイワイとした室内に漏れる中、その隣にいた宮崎のどかや綾瀬夕映はご丁寧にも少年に頭を下げて

「これからよろしくね」

「よろしくお願いします」

と挨拶を交わす。それを受けたアキラが慌てて再度お辞儀を返そうとして「グエ」と蛙が潰れたような声を漏らした。苦しそうに振

り向いたアキラの視線の先ではまるで酒でも飲んでいるかのようにジュースを片手に振り回すお転婆娘、古菲がアキラの首をロックしていた。

「く、クーさん？」

「今度、私と組み手をするアル～！」

その陽気すぎる態度に頬を引きつらせて困ったような表情を浮かべる。それを見計らったかのように今度は長瀬楓の声がクーを制止する。

「これこれ……」

クーの絡む対象が楓へと変わったことにより、首が解放される。ホッと胸をなでおろしたアキラに、今度はどこか和みを誘う声。

「コタくんに聞いたえ～、アキラくんもガンバッとるんやて？」

「お嬢様、いきなりそんなに慣れ親しんだ態度では逆に……」

万人受けしそうな優しい笑顔を浮かべる近衛木乃香と、そのいきなり親しすぎるような態度をとる彼女を止めようと常識的な振る舞いをとる桜咲刹那。

刹那の発言に対し、アキラが慌てて口を開く。

「あ、いえ、僕は全然大丈夫です。寧ろ嬉しいです」

悠然と微笑を浮かべたその態度に、ほんの少しだけ空気が止まった。

「……え、あれ？」

なぜか集まったその場の全員の視線と、静まり返った室内に首を傾げる。そして何を言えばいいのか分からずにオロオロし始めた少年に対して、パルがまるでみんなを代表したかのように呟いた。

「う～ん、この子も確実に将来イケメンね」

「はい？　……え、あ、はい」

どうやら己の顔が人並みはずれて端整であることを少年は理解しているらしく、当然のように頷く。ネギや小太郎とは明らかに違うその態度に誰かが「ほぅ」と声を漏らした時だった。

「アスナさん、大丈夫かな……？」

「いや、流石にヤバイやろ」

まるでタイミングを見計らっていたかのように2人の少年が扉を開けて現れた。それに誰よりも真っ先に反応したのは少女達の値踏みするかのような視線にさらされて困っていたアキラ。

「ネギ君！　小太郎君も！」

まるで飛びつくかのような勢いで2人に飛びつこうとした矢先だった。いつの間にか現れていたエヴァンジェリンがアキラの襟元を見事に捕まえて言う。

「次はお前が行ってみろ」

「……はい？」

返事はもちろん残酷な笑みを浮かべるだけ。嫌な予感しかさせないその態度に、アキラが苦笑を浮かべて呟く。

「拒否け――」
「――ない」
必死になって振り絞った拒否の言葉はもちろんバッサリと断ち切られ、そのまま外へと放り投げられた。
「え？」
さすがに意味のわからない展開に首を傾げたアキラを、外にいた茶々丸がキャッチ。
「頑張ってください」
同じく訳の分からないままに励まされて「あ、ありがとうございます」と理解も追いつかないままに礼を述べたアキラは次の瞬間には魔法陣へとまたもや投げこまれた。
そして少年は――
「さむっ！！」
――気付けば雪山にいた。
「お前、あいつらの代わりに神楽坂明日菜を指導してみろ」
「え？」
一応はアキラもアスナのことは知っている。なにせネギにボコボコにされていた張本人だ。しかもその後簡単にだが自己紹介までしたのだから立派な知り合い関係といえる。が、言ってしまえばそれだけの仲。

単なる顔見知りの人の指導を任されてもアキラからしてみれば戸惑いしかない。第一そもそもこの展開はいきなりすぎる。

「いいな」

「……え？」

エヴァンジェリンの念押しに、最早人形のように同じ言葉を繰り返しているアキラはほとんど思考停止状態といっても過言ではない。

その様子にさすがのエヴァンジェリンも呆れたようにため息を放ち「茶々丸！」と例によって優秀な従者を呼び寄せた。

「説明は任せた」

「わかりました」

そして、アキラは丁寧な説明を受けてやっと理解をするに至った。

つまり、こういうことだ。

一週間をこの雪山で過ごし、同じく雪山で過ごす神楽坂明日菜を指導すること。

たったそれだけ。ただし、あらゆる防寒グッスは持ち込み不可。いうなれば裸一貫でこの試練に挑まなければならない。

風が吹き荒れる。それと同時に雪が猛威と化してアキラの体に襲い掛かり、それだけで体温をまた奪っていく。

いくら不死と謳われる真祖であっても寒さを感じるし、体も凍える。それはつまり体力が徐々に失われていくということ。そうして体力が底を尽きてしまえばもちろん待っているのは凍死という死。雪が降りしきり、風が吹きすさぶこの氷点下の世界ではいくらアキラといえど楽観的に過ごすことは出来ない。

ここはその真祖のアキラですら辛い環境であることに間違いない。とはいってもそれは魔法を使えなかったときの話。魔法に関してあ

らゆる研究を重ねている彼にとって耐寒用の魔法は既に容易に扱えるものだった。
いつの間にか耐寒魔法を唱えていたらしく、氷点下の世界を歩く姿はどこか呑気でまるで散歩でもしているかのような気軽さを感じさせる。

「さて」

白い息を吐き出すと共に立ち止まった。かと思えば首をめぐらせて「神楽坂さんはどこにいるんだろ？」と呟いた。

「そんな遠いところにはいないと思うんだけど……ってあそこ？」

アキラの視線の先には洞窟。洞窟があること自体は別に奇妙なことではない。問題はこの場所にあるということだ。
掘られた穴のサイズからして人間が出入りするのに丁度適した形をしており、かといってこんな山奥の雪山に人間がそんな洞窟を掘るなどということは考えにくい。
アキラはその洞窟にアスナがいるとふんだらしく、そこに向かって一直線で歩き出した。

はたして、それはビンゴだった。
数分で辿り着いた洞窟内にいたのは場違いとしか思えない女の子らしい服装に身を包んだ少女、神楽坂明日菜だ。
とりあえずの目的人物を探すことに成功してホッとしたのも束の間。新たな問題に気付き、アキラはただでさえ白い顔を青くさせて、恐る恐るその可能性を口にした。

「神楽坂さん……寝てますか？」

そう、アスナはこの雪山でなんとも恐ろしいことに頭をウツラウツラとさせていたのだ。

「まだ生きてますか？」

「う……ん」

返事があったことにホッと息を吐き出して「あ」と声を漏らしたかと思えばすぐさまアスナの手足の指先から順にそっと触れていく。そうしてまるで触診のようなソレを終わらせてかすかな笑みを浮かべて頷いた。

「うん、大丈夫……凍傷になってるところはあるみたいだけどまだ壊死はしてないね。体温はぎりぎり２４度過ぎ。っていうことは今は昏睡状態だとして、結構危ないけどまだあと数分は放っておいても大丈夫かな？」

すらすらと落ち着いて現状を把握していく。まずは体を温めることが先決だが、アキラはなかなか動かない。じっとアスナを見つめて数秒、考え込むように顎に手を当てた。

「この人、今までどうやって耐寒対策してたんだろ？」

この雪山で生き延びるということはつまり、魔力や気の効率的運用が最重要テーマであることを示している。

それはもちろんアキラも理解しているし、今更疑っているわけでもない。ネギやアキラなら『魔力』で小太郎なら『気』といった具合に運用をしていくわけだが、そのどちらか使用するかによってアスナを助ける方法は変わってくる。

アスナが体力を消費する『気』をつかうなら、それがテーマなのだから体力を回復させずに精神力を回復させることによってアスナ

の手助けをしなければならないし、また逆に精神力を消費する『魔力』なら精神力を回復させずに体力を回復させて手助けをしなければならない。

「あのネギ君との組み手のときは……あれ、どっちだろ」

自分の記憶を掘り起こしてアスナの戦い方を思い出しても、アキラの目からすればどちらとも判断がつかない。

「困ったなぁ……どうしよう」

こうして悩んでいる間にもアスナのタイムリミットは迫っている。体温が２０度を切ればもはやいつ死んでおかしくないほどの状態になる。現在の体温を確認しようとアスナの体に触れようとして「あれ？」

首を傾げた。

魔力でも気でもない力が相変わらず眠りこけているアスナを包み込んでいた。体温も、凍傷も嘘のように常態に戻っていくその様子にアキラが困惑を示す。

「これは……？」

いくらアキラでも分類できないものまでの理解は及ばない。数秒ほど考え込み、結局は諦めたらしく

「明日聞こうっと」

呟き、目を閉じて横になる。

「一週間くらいか。血を採りながら死なない程度に休憩すればぼくの魔力もギリギリもちそうだし……まぁ、気楽に雪山生活を楽しもうかな」

なんともお気楽な言葉を呟いたアキラ。小さくも気持ちよさげな寝息を立て始めるのに時間はかからなかった。

アスナもアキラもが寝静まった夜の雪山。彼らを見つめる2つの影があった。エヴァンジェリンとその従者茶々ゼロである。

「アイツ結構クールダナ」

純粋に笑う茶々ゼロに対し、エヴァンジェリンも同じく唇をゆがめる。

「ま、あいつが死ぬわけでもないからな」

「アイツノ血液入リノ水筒ハ取リ上ゲナクテヨ良カッタノカ？」

不思議そうな茶々ゼロに、エヴァンジェリンは「ふん」とつまらなさそうな息を吐き出して口を開いた。

「今更あいつに魔力の効率的運用を教える必要はない……普段のネギを見て勝手に学習でもしてるんだろ」

その言葉に茶々ゼロは元々大きな目をさらに見開いて、寝静まったアキラに視線を送る。

「ツマンネェ……天才カ」
「ま、そういうことだ……確かにつまらんが、だがあいつはあいつで面白いぞ？」
「？」

クっと笑みを浮かべたその顔は確かに楽しそうで、だが矛盾したようにしか聞こえない言葉に茶々ゼロが首を傾げた。

「あれだけの才能を有しながら、未だにこぞうや犬には遠く及ばない」
「ソリャ年季が違ウカラダロ？」
当然のように言う茶々ゼロに、エヴァンジェリンは首を振る。
「あれほどの才能に年季は関係ない。既に心の問題だよ」
「ココロ？」

首を傾げて数秒「アア」と何かを思い出したかのように手を叩き
「誰モ傷ツケナイ……ダッタカ？」
「そうだ。龍宮真名にボロボロにされてから身を守るための研究は重ねているようだが、未だに攻撃系の魔法は一切覚えていない」

一拍の間を置いて「だから」と言葉をつなげた。

「こぞうや犬にもまだ2、3歩分も及んでいない」

言葉を続けるほどに愉快そうになるエヴァンジェリンの姿とは対照的に茶々ゼロは呆れにその表情を染まらせる。

「筋金入リノ馬鹿ダナ」
「ああ、その通りだ。死んでも直らん本物の馬鹿だ」

そして茶々ゼロも笑った。
と。
「ン？」
何かに気付いたように「ジャア、ナンデアイツヲ訓練ニ？」
「私も一日中あの馬鹿女を見ているわけにもいかんからな」
事も無げに呟いたその言葉に、茶々ゼロが少しだけ残念そうにぼそりと呟く。
「死ナセルツモリナシカヨ」
「ん、何か言ったか？」
どうやら聞こえなかったらしいエヴァンジェリンに、茶々ゼロはそっぽを向いて答える。
「イヤ何ニモ」
それを額面どおりに受け取ったらしく「そうか」と呟いて言葉を重ねる。
「そろそろ帰るぞ」
「アイヨ」
そして、闇の主従は白銀の世界からゆっくりと姿を消した。

騒ぎを好む女子中学生たちも、遊ぶためだけに来たわけではないのでやはり夜は早い。既にほとんど全員が寝静まった時間となっている。

その空間のある一角。一筋の光が魔法陣から生まれ、エヴァンジェリンがその空間へと帰還を果たした。

普通の人間と同じようなタイムテーブルで過ごしているアキラのせいで忘れられがちだが、本来彼ら吸血鬼の時間は今からが本番である。眠くなるはずもない時間に、とりあえずの用事を消化させたエヴァンジェリンが退屈から生まれた欠伸を噛み締めて暗くなった廊下を歩く。

「とりあえず風呂にでも入って……む？」

今からの夜をどのように過ごすかを思案していたエヴァンジェリンがその足を止めた。戻ろうとしていた部屋の前で、一人の少年がオドオドと歩き回っていたからだ。

「？」

首を傾げたのも束の間、暗闇の中で薄く漏れ出した月明かりが少年の顔を照らし出す。女子にモテそうなベビーフェイス、後ろ髪を短く縛り、今にもずれ落ちそうな眼鏡をかけた子供。今やエヴァンジェリンの生活圏の一部にまで入り込んできた唯一の弟子。

ネギ・スプリングフィールドだ。

いい暇つぶしを見つけたとばかりににやりと笑みを浮かべて、エヴァジェリンは気配を消した。そして、そのまま背後にまで近づき

「何か用か」

「わひゃっ！？」

不意をつかれた驚きから奇妙な声をあげて後ずさるネギのリアクションに、エヴァンジェリンは満足げに頷き、もう一度同じ問いを発した。

「何か用か？」

「あ、いえ……その」

言いづらそうに一度顔を伏せて、数秒ほど沈黙。それから意を決したのか、顔をあげて言い放つ。

「あ、アスナさんは大丈夫ですか？」

「……」

――なんだ、そんなことか。

もっと面白いことが聞けるのかと思っていたエヴァンジェリンはつまらなさそうに鼻を鳴らして歩き出した。

「え……あの」

無言の返事により戸惑いを見せるネギとそのまますれ違って扉のとってに手をかけて、背中越しに一言。

「神楽坂明日菜はこぞうに任せておけ、あいつがいれば死ぬことはないだろう」

「アキラ君がいれば？　……いや、でも――」

ホッとしたような安堵の声とどこか困惑したようなネギの声。それも当然といえば当然。あの雪山修行はネギと小太郎が2人がかり

でどうにか生きながらえた真に過酷な修行だった。
それを、咸卦法を使えはするもののまだまだ未熟な中学生少女に、まだ魔法を勉強し始めて一年もたっていないような少年が指導役として就いたから安心しろといわれて安心できるほうがおかしい。
「――あいつは基礎的な魔法の運用もお前が使っていた耐寒魔法も既に習得している」
「え」
ネギの小さな驚きの声に、エヴァンジェリンはさらに言葉をつなげる。
「その上、医学的知識も多少あるようだ。あれならあの女がギリギリで死ぬかどうかのラインを見極めるのも上手いだろう」
「あ、アキラ君が……」
呆然と、ホッとしたような安堵の声に困惑と複雑な感情が混ざった色がこめられる。それを彼女が見逃すはずもない。底意地の悪い笑みで「なんだ、女をとられて嫉妬か？」
「なっ、そんな違います！！　僕は本当にアスナさんが心配で――」
「――ならばなぜあのこぞうの心配はしない？」
「……え？」
今度こそ、本当にネギの顔と声が呆然と空に舞った。が、それも一瞬。次の瞬間にはマシンガンのように言葉がエヴァンジェリンに吐き出された。
「だだだってアスナさんは僕の生徒ですししかもアキラ君ほど強くもないですしそれにアキラ君てそもそも人間じゃなくて真祖のきゅ

――って師匠（マスター）！？」

ネギの言葉の途中で、どうやら面倒になったらしいエヴァンジェリンがフと動いた。

それは余りにも無音で、無言で。それをネギが認識した頃には扉は閉まり、エヴァンジェリンは部屋の中に引っ込んでいた。

「マ、マスター？　あの！？」

慌てて扉にすがりついたネギに返ってきたのは素っ気無い言葉。

「私はガキの恋愛に興味はないんだ、うるさくてかなわん。もう寝ろ」

それ以降ネギが扉越しに話しかけても、エヴァンジェリンは無言。

最初は何度も扉越しに話していたネギも、余りにも反応のないエヴァンジェリンに諦めたのか、最後に「はぁ、僕も寝よう」と呟いてそのまま部屋の前から姿を消した。

徐々に遠ざかる弟子の気配に「まったく、ガキが」とエヴァンジェリンが面倒そうに呟いたその反面。

その表情はなぜか面白い玩具を見つけたような顔だったという。

そして、夜は更けていく。

雪山修行は2日目の朝を迎えた。
2人が目を覚まして行ったことはまずは挨拶。お互いに昨日に簡単な自己紹介は済ませていたとは言ってもほとんど知らない仲と言っても過言ではない。
それからアキラによる状況説明。
そして、それらを終えた彼らは早速、新たな修行に入っていた。

神楽坂さんが左手に魔力を、右手に気をかき集める。「ふっ」小さく息を吐き出すと同時に右手と左手を胸の前でパンと軽く叩き合わせてそれらを混ぜ合わせる。
相反している2つの力は本来同時には存在しえない。その矛盾が同一に矛盾でなくなったとき、それは新たに『究極技法（アルテマ・アート）』という強力な力へと昇華する。
それが――
神楽坂さんの体内外に魔力と気が融合した新たな力が纏われた。確かにこれは物凄い技術だ。そもそも相反する2つの力を融合させていることが既に矛盾しているようにしか思えない。神楽坂さんはこれを簡単そうにやったけどこれは多分ぼくでも練習しなければ難しい。

「これが……」
「――咸卦法よ」

胸を張って自慢げに答える神楽坂さんの反応が年相応で、とてもこんな神懸かりな技を習得しているとは一目では分からない……まさに人は見た目ではわからないってことだね。

「ってアンタ、今失礼なこと考えなかった？」

え、エスパーですか？

「……マ、マサカ」

「目をそらして言うんじゃない！！」

かろうじて誤魔化したつもりだったんだけど簡単に嘘がばれちゃった。下手したら殴りかかられそうなほどの勢いでつかみかかってくる神楽坂さんに、どうにか話をそらすために「そんなとより――」

「なによ？」

相変わらずの勢いのまま、けれどジトッとした目でぼくから手を離してくれた。

「――いや、まだ少し無駄が多いみたいですよ？」

「え？」

「いや、ほら多分そのペースだと数時間ももたずにガス欠になります」

「う、うそ！？　とか言ってる場合じゃないわね……平常心よ平常心。落ち着くのよ私」

慌てて何度も深呼吸を繰り返す彼女は、騒がしいけどどうしてか見ていて好ましい。肩を上下させ、すぐに瞳の焦点が一点に集中された。その様子はぼくから見ていて心がここから消えてなくなったように見える。

「か……神楽坂さん？」

「ん？」

心配になって声をかけたはいいけど、以外にも簡単に返事が返ってきた。ちょっとだけ拍子抜けしたけど、すぐにその異常さに気付いた。

「すごいですね。ぼくから見たらほとんど完璧です」
「で、でしょ？」

エへへと今度は照れくさそうに笑う。
うん、忙しい人だ。ちょっと子供みたいかな？

「さて、じゃ早速朝食でも取りに行こうかな」
「あ、そうですか。じゃあ頑張ってください」

とりあえず手を振って応援したぼくに、神楽坂さんは慌てて振り向いた。

「って、ちょっとちょっと。アンタは？」
「え、ほらぼくは吸血鬼だから魚食べませんし」

ぼくとしては当然のつもりで言ったんだけど、彼女は少し違うことを言っていたみたいで首を横に振ってぼくに指をつきつけてきた。

「そうじゃなくて！　アンタ手伝ってくれるんじゃないの？」
「はい？」
「はい？　じゃなくて。私一人でこんな雪山生活を過ごせるわけないじゃない。だからアンタが助っ人として来てくれたんじゃないの？」

ああ、そういうことか。う～ん、間違ってはいないんだけど、正確には少しだけ違う。

ぼくはあくまでも単なる指導役。さっきみたいにアドバイスとかはするけど、それだけ。他には彼女を助けたりするつもりはない。まぁ本当に死に掛けたらちゃんと助けるつもりだけど、やっぱりそれくらいになるまでは見てるだけでいくつもり。

この人本当にエヴァンジェリンさんの修行を受ける気があるんだろうか……ってそういえば普通の中学生だったけ……ってあれ？そしたらなんで咸卦法みたいな難しい技法を使えるんだろ？

「……」

思考に入ってしまったせいで、つい沈黙してしまった。それを黙秘と思っちゃったらしく神楽坂さんがやっぱり恐いほどの剣幕でぼくに詰め寄る。

「ちゃんと答えなさいってば！」

「……はぁ」

「ちょっと、なんでため息をそこで吐くの！？」

いや、そりゃため息も吐きたくなるってもんですよ。

「いいですか、ぼくはあなたを助けるためにここに来たんじゃありません。あなたの指導役としてここに来たんです。まぁ寂しくなったら会話役くらいならいつでも大丈夫ですんで……」

「指導役のくせに会話役って……」

まだ文句を言おうとする彼女に、ぼくはまたため息を。

「あれだけネギ君にボロボロにされて、悔しくなかったんですか？」

「う」

それは昨日の一件。15分間も戦って結局ネギ君に傷一つ与えられていなかった。それは、ネギ君を守るといきまいていた彼女にとっては屈辱でしかなかったはずだ、とぼくは思ってた。だから、こういえばきっと彼女は――

「わ、わかったわよ！　一人でやるわよ！！」

――ほら、やっぱり。

焼きクソ気味だったけどいい決意だ。この人はやっぱり見ていて気持ちのいい人だと思う。

「はい、じゃ頑張ってください。本当に死に掛けたら助けに来ますから……多分」

「たぶんってアンタ……」

最早諦め気味にうなだれちゃった神楽坂さんだったけど「よし」とすぐ顔をあげた。

「さっさとご飯よご飯！！」

「行ってらっしゃ～い」

「よ～し、頑張るわよ～！！」

そのまま走り去って行っちゃった……のは元気があっていいんだけど。

「あ、また無駄に漏れてる」

やっぱり、普通は無駄のないエネルギーの運用っていうのは難しいらしい。神楽坂さんも気分次第ですぐに無駄にエネルギーを消費

してるみたいだし。

「ま、それが普通か」

とりあえず気を取り直していこうかな。ぼくも早速取り掛かりたいことがあるし。

それはずっと取り組んでいたことで、何かが足りないと思っていたこと。それを、神楽坂さんのおかげで足りていなかった最後のひとかけらがきっと揃った。

「魔法と気の合成……その可能性かぁ。そっか、まだそんなのもあったんだ」

多分、その時のぼくの顔はとてもにやけていたと思う。ずっと数値化するまでに至らなかった理由それが、きっと咸卦法。

これが出来ればぼくの魔法の可能性がぐっと広がる。本に載ってない魔法とか、既存の魔法に関してももっと効率的な運用とか、もしかしたら呪文詠唱の簡略や省略までもが可能になるかもしれない。

「そのためにも咸卦法を理解しなきゃいけないんだよね……」

正直、魔法も気も既にある程度扱える。魔法はもちろんだけど、気もずっと小太郎君の戦いを見ていたから。まぁ、魔法に比べたら大分雑になるとは思うけど。

あとは神楽坂さんのやり方を真似するだけのはず。

「けど……う～ん」

正直な話、自信がない。それだけじゃ何かが足りない気がする。もう少し神楽坂さんの咸卦法を見る必要がある。

「うん、ちょうどいいや」
監察がてらに神楽坂さんを見に行こうかな。
「よっし、出発！」
……もう死んでるとかは流石にないよね？

アキラとアスナの雪山生活も、少しずつ日が流れていく。
時に厳しく。
「ちょっと、アキラ君助けて！」
「いや、僕が直接助けちゃったら意味ないじゃないですか」
「鬼〜！！」

時に優しく
「うう寒いぃ……ｚｚｚ」
「うわ、寝ちゃってる。これは死に掛け……だね。仕方ない、適当に何かを燃やしておこっかな」「ｚｚｚ」

やっぱり厳しく。
「お、お腹へった。もう3日は何も食べてないわ」
「っくは〜、やっぱり冷えている血液は最高ですね！」
「あ、悪魔ね。アンタ」
「いや吸血鬼ですから……あ、似たようなものかな？」

「呑気にいうな〜〜！」

そして４日目の昼。

ついに、彼女の体力は限界を迎えていた。

この氷点下の世界の中、睡眠は無事に取れていた。アスナは知らないが、アキラが本当に死に掛けたときに近くで火をくべたりしていたからだ。だから、睡眠に関しては問題ない。

問題は食事のほう。

そもそもこの雪山でとれる食糧などほとんど存在しない。植物は絶望的、あるのは豊富な水分と、そしてここを生活圏とする川魚だけ。だが、その川魚もこの雪山にあってはやはり素人に簡単に捕まえられるほど豊富には……とうか滅多にいないし、よしんばいたとしても簡単には捕まえられない。

アキラも、食事のこととなると一切非協力的になるので援助もない。結果、アスナはここ４日間でネギが先にとっていた小魚を２匹食べただけでしかない。

ほとんど動かない生活ならば倒れることもないだろうが、咸卦法を使い続けている以上体力も精神力も必然的に消費する。しかも魚を取ろうとしたり、風が入ってこないような寝床を確保したりとやらなければならないことはたくさんあった。

それほどに忙しい４日間を、たった２匹の小魚で生活していけただけでもむしろ奇跡に近かった。だが、それもここまで。

「も……ダメ」

晴れ渡る山の空。溶けるはずもなくつもりつもった雪の中に彼女は倒れこんだ。

それを遠めに見つめる影が計３つ。

もちろん1つ目はアキラのもの。その目は真摯でさらにじっとアスナへと向けられている。さらに、アスナとアキラを見つめる2つの影はエヴァンジェリンと茶々ゼロのもの。

「もうそろそろ諦めるかな？」

心配そうな顔で誰ともなく呟いたのはアキラ。

咸卦法を使えること以外は普通の中学生でしかないアスナにとってこの修行はあまりにも酷。実際にアキラがいなければ死んでいてもおかしくない場面も多々あった。

それを泣き言も漏らさずに、彼女は必死になってこなしてきた。むしろここまで鐘をならさずにギブアップをしてこなかったことだけでも大したもの。ここ4日間の彼女をずっと見てきたアキラは既にアスナの努力を認めていた。

だがアキラのそういった思い、アスナという少女は強いという彼の考えはすぐに大きく覆ることになった。

「あきらめない」

小さな呟きが、大きく広がる雪山に連なり、反響してアキラの耳に届いた。

「諦めない、あきらめないあきらめないあきらめないっ！！」

鳴らそうとしていた鐘をぐっと握りしめ、そしてそれを――。

「諦めないわよ～～！」

――空の彼方へと投げ飛ばした。

アスナはアキラが思っていたような強い女ではなかった。アキラ

が思っていたよりももっとずっと彼女は強い女だった。
「は……ハハ……凄いな、あの人」
物凄い勢いで走り抜けていく彼女の背中に、アキラはぼんやりと笑うのだった。

そして、彼女は無事にその修行を乗り切った。
エヴァンジェリンの上機嫌な笑い声が高らかに響く中、肩を落とすアキラの存在にネギと小太郎が気付いた。
「どうしたの、アキラ君？」
だが、その問いかけには返って来たのはいつもの彼らしい言葉ではなかった。聞こえてきた言葉はむしろ小さな独り言。
「まさかぼくが出来ないなんて……うそだ、ありえない。このぼくに習得不可能な事象があるなんて……」
「あ、アキラ？」
顔を覗き込むネギと小太郎の二人にすら気付かず、彼は「フフ」と小さく笑い出した。
「咸卦法……究極技法と名づけられるだけはあるみたいだね」
「「咸卦法！？」」
ネギと小太郎の驚きの声は大きく、エヴァンジェリンによる『神

楽坂明日菜、悪の中ボス化計画』と『修行中、ずっと黒のゴスロリ服命令』をどうにか回避しようしていたアスナの耳にも届いた。
「なんか、ずっと私の咸卦法を見ながら練習してたみたいだけど結局出来なかったみたいよ？」

ほとんど腐った魚のような目をして質問に答えようともしないアキラの代わりに、アキラがやろうとしていたことをアスナが答える。
だが、それでもやはり2人の疑問は尽きることはない。

「え、でもどうして咸卦法を……？」
「おう、アキラやったら今更咸卦法に頼らんでも色々と強くなる方法あるやろ？」

2人に問いかけられたアスナだったが、もちろんそんな深いところまでを彼女が知っているはずもない。

「さぁ？」
「「？？」」

首を傾げた3人に、再びアキラの独り言が耳に届く。

「咸卦法がわからないと魔法と気の融合の可能性への結論が導けないよ……困ったなぁ……こうなったら予測で導く……？　いやいやもしそれで間違ってたら取り返しがつかないし……ダメだ、やっぱりもっと咸卦法習得の修行に入るしかないか……うん、そう、だよね！」

長い長い独り言が終わりを告げ、とりあえずアキラももっと修行を頑張ろうと燃えているということだけを理解した三人が、大いに頷き笑った。

「頑張ろう！」
「ええ心がけや！」
「私も負けてないわよ！！」

こうして彼らはエヴァンジェリンの下、新たな段階へと昇っていくのだった。

ちなみに、広場に戻ったアキラを待っていたのは新たなネギま部（仮）の人物、朝倉和美、長谷川千雨、幽霊の相坂さよだった。

「あ、どうも初めまして」

また、宴会が開かれたのはいうまでもないこと……なのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1847v/

ネギまとぼくとガンツな俺と

2011年12月16日23時54分発行